

- 第十四條 検査未済ノ酒類ヲ届出ノ上他ノ酒類ニ變製第一條第二條中一類ノ酒ヲニスル時ハ造石稅ハ其變製シタル酒類ニ就キ之ヲ納ムヘシ
- 第十五條 検査済ノ酒類ヲ他ノ酒類ニ變製スル時ハ既ニ検査済ノ石數ニ係ル造石稅ヲ納メ更ニ變製ノ石數ニ就テ造石稅ヲ納ムヘシ
- 但變製ノ節ハ必ス管廳ヘ届出テ検査ヲ受ケヘシ且製成ノ上ハ第十條ノ手續ニ據リ検査ヲ受ケヘシ
- 第十六條 検査済酒類納稅以前ニ於テ漏敗シ若クハ天災其他避ケヘカラザル事故ニ依リ廢棄ニ關シタルトキハ直チニ管廳ニ申出テ検査ヲ受ケ其造石稅ノ免除ヲ請フコトヲ得
- 第十七條 前條検査ノ上再ヒ酒類ニ製成スル者ハ其石數ニ應ジ造石稅ヲ納ムヘシ
- 第十八條 葡萄酒及ヒ麥酒ノ類ヲ製造スル者ハ免許稅ヲ納ム可シト雖モ造石稅ハ之ヲ免除ス
- 第十九條 酒造中ハ管廳主任官員時々巡回スヘキニ付何酒類ヲ問ハス其仕込ケル酒も其地仕込及ヒ營業ニ關スル諸帳簿等ノ検査ヲ受ケヘシ
- 第二十條 酒造用諸器械ハ使用以前管廳ヘ申出検査ヲ受ケ其賣買讓與貸借ハ其時々管廳ヘ届出造酒着手後造石稅完納以前ニ於テハ管廳ノ許可ヲ得ヌシテ諸器ヲ酒造場外ヘ移スルヲ許サス
- 第二十一條 酢及酒もどヲ販賣スルヲ許サス
- 但事故アリテ酒もどノ不用ニ屬シタルモノヲ同業ノ者ニ限リ賣渡ヌハ此限ニ在ラス
- 第二十二條 他ノ依託ヲ受ケテ酒類ヲ代造シ又ハ酒造營業人ニ非ル者ニ酢及酒類ヲ製造スル爲メ酒造場ヲ賃スルヲ許サス
- 第二十三條 検査未済ノ酒類ヲ賣捌貸與讓與若クハ自家ノ所用ニ消費スルヲ許サス一検査済酒ノ酒類ヘ検査未済ノ酒類ヲ混和スルヲ許サス
- 第二十四條 免許鑑札ハ貸借スルヲ許サス
- 第二十五條 造酒用諸器械ニハ管廳主任官員ノ封緘ヲ受ケ置キ使用スル時ハ其旨申出開封ヲ請フヘシ

第三章 禁令雜令

- 但過誤等ニ封緘ヲ毀損シタル者ハ直ニ管廳ニ届出再封ヲ請フヘシ
- 第二十六條 免許ヲ受タル者ハ其節管廳ヘ該一期造酒見込種目石數并ニ其造り方法共届出ヘシ
- 但種目變換並見込石數ノ増減等ハ其時々届出ヘシ
- 第二十七條 酒造ニ屬スル倉庫納屋并ニ諸器械共豫テ管廳ヘ届出ヘシ
- 但増減ハ其時々届出ヘシ
- 第二十八條 一期造酒届出ノ石數何酒何石造ト書シタル標札ニ免許鑑札ノ番號ヲ書載シ之ヲ戸外ニ掲出ス

第四章 罪令

- 第二十九條 免許鑑札ヲ受ケスシテ製造シタル者ハ其酒類及ヒ製造諸器械トモ没收シ免許稅額ニ倍ノ金額ヲ科シ之ヲ賣捌キタル者ハ其石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ併セ科スヘシ
- 但シ本文酒類并ニ諸器械ヲ已ニ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ
- 第三十條 免許鑑札ヲ借受ケ製造スル者ハ第二十九條ニ據テ處分シ之ヲ貸與ヘタル者ハ其鑑札取揚ケ免許稅相當ノ金額ヲ科スヘシ
- 第三十一條 酒類石數ノ検査ヲ受ケスシテ之ヲ賣捌キ又ハ貸與讓與シタル者ハ其代價ヲ追徴シ其酒類ヲ石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ科スヘシ
- 但第二十一條但書ノ場合ニ於テハ此限ニアラス
- 第三十二條 酒類ヲ隱蔽シタル者ハ其酒類ヲ没收シ其酒類ノ石數ニ相當スル造石稅三倍ノ金額ヲ科スヘシ
- 第三十三條 検査未済ノ酒類ヲ自用ニ消費シタル者ハ其石數ニ係ル造石稅ニ相當スル金額ノ三倍ヲ科スヘシ
- 第三十四條 第十四條ノ届出ヲ怠リタル者第五條第七條第二十八條ヲ犯シタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第三十五條 第六條第二十五條第二十六條第二十七條ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 第一項ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其器械ヲ沒收ス第二項ヲ犯シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其器械ヲ沒收ス

第三十六條 第十條第二項第二十一條第二十二條第二十三條第二項ヲ犯シタル者ハ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處シ其製造酒類ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴スヘシ

但第三十三條第二項ノ酒類ハ總石數ヲ沒收ス

第三十七條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニ在ラス

第三十八條 酒造營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル者ハ總テ其營業者ヲ所罰ス

勅令 明治十九年七月二日 朕酒造稅則改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治十五年十月二十六日 第六十一號布告酒造稅則附則左ノ如ク改正シ明治十九年十月一日ヨリ施行ス

酒造稅則附則

第一條 自家用料ノ酒類 飲料ニ用ヒ醬油等ニ混和シテ製造セント欲スル者ハ其旨管廳ヘ届出免許鑑札ヲ受ケ鑑札料金八拾錢ヲ納ムヘシ

第二條 免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス

第三條 自家用料ノ清酒ヲ製造スルヲ得ス

第四條 左ニ掲ル者ハ自家用料ノ酒類ヲ製スルヲ得ス

- 一 酒類受(卸小)賣營業者
- 一 飲食店又ハ旅館營業者
- 一 前二項ノ營業者ト同居ノ者

第五條 自家用料ノ酒類ハ一家内ニ於テ二期製造高一石ニ種以上製造スル者ヲ超ユルヲ得ス

第六條 自家用料ノ酒類ハ其住居セル一家外ニ於テ之ヲ製造シ又ハ他ノ委託ヲ受テ之ヲ製造スルヲ得ス

第七條 自家用料ノ爲メ製造シタル酒類ハ之ヲ賣捌クヲ得ス

第八條 免許鑑札ハ賣捌與貸借スルヲ得ス

第九條 自家用料ノ酒類ヲ製造スル者ハ主任官隨時之ヲ検査スヘシ

第十條 第一條第三條第四條第五條第六條第七條ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其製造酒類及ヒ容器ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徴ス

第十一條 第八條ニ違ヒ鑑札ヲ賣捌賣渡シタル者ハ其鑑札ヲ取揚二圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ之ヲ借受賣受讓受ケテ酒類ヲ製造シタル者ハ第十條ニ依リ處分ス其未タ酒類ヲ製造セサルモノハ其罰鑑札ヲ賣渡賣渡讓渡シタル者ニ同シ

第十二條 此規則ヲ犯シタル者ニハ本則第三十七條及第三十八條ヲ適用ス

大藏省令 明治十九年八月二日 勅令第六十號ニ基キ自家用料酒類製造者心得左ノ通之ヲ定ム

第一項 酒造稅則附則第一條ノ届書ニハ該期造酒ノ種目及製造見込石高ヲ記シテ呈出スヘシ

第二項 前項届出ノ後造酒種目ノ變換及製造高ヲ増減スル片ハ其時々管廳ヘ届出ヘシ

第三項 免許鑑札ヲ受ケタル者ハ自家用料酒製造ノ標札ヲ戸外ニ掲出スヘシ

第四項 免許鑑札ヲ失却毀損スル或ハ改名代替轉居セシキハ其管廳ニ届出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

第五項 第一項免許届書式第三項標札書式ハ府縣知事ノ定ル所ニ依ル

第六項 第二項第三項第四項ヲ犯シタル者ハ一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

法律 明治二十六年四月二十日 狀帝國議會ノ協贊ヲ經タル酒精營業稅法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

酒精營業稅法

第一條 酒精(アルコール)又ハ他物ト混和シタル酒精ヲ販賣スル營業者ヲ分テ左ノ二種トス

甲種營業人

本條ノ物品ヲ製造シ又ハ買入レ之ヲ自用者ニ非サル者ニ販賣スル者
乙種營業人

第二條 本法ノ營業ヲ爲サムトスル者ハ先ツ管廳ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 營業ノ免許ヲ受ケタル者ハ政府ノ定ムル所ニ從ヒ保證金トシテ十圓以上千圓以下ヲ現金又ハ國債證
券ヲ以テ供託スヘシ

第四條 本法ノ税金ヲ滯納シタルトキハ保證金ノ一部又ハ全部ヲ以テ税金ニ充ツ仍不足スルトキハ明治二
十二年法律第三十二號國稅滯納處分法ニ據テ處分スヘシ

第五條 免許ヲ受ケタル者ハ左ノ算程ニ從ヒ營業稅ヲ納ムヘシ
甲種營業人

酒精(アルコール)一石ニ付金二十五圓ノ割合

乙種營業人

酒精(アルコール)一石ニ付金二十五圓ノ割合

清精(アルコール)一石ニ付金二十五圓ノ割合

營業人ヲ經由セスシテ第一條ノ物品ヲ買取リ消費スル者ハ本條ニ準シテ納稅スヘシ

第六條 營業稅ハ翌年一月三十一日限之ヲ納ムヘシ但シ廢スル者ハ其際營業稅ヲ納ムヘシ

前項ノ期限内ト雖營業稅高第三條ノ保證金高ニ超過スルトキハ先其ノ税金ヲ納メテ後之ヲ販賣スヘシ

第七條 第一條ノ物品ヲ醫藥用又ハ工業用ニ供スル者(造酒家ヲ除ク)ハ勅令ヲ以テ定ムル所ノ規定ニ從
ヒ其營業稅ノ免除ヲ請フコトヲ得

第八條 營業者ハ帳簿ヲ調製シ第一條物品ノ出入ニ關スル事項ヲ記載スヘシ
前項ノ帳簿ハ主任官吏ノ檢定ヲ受クヘシ

第九條 主任官吏ハ正當ノ命令ニ依リ營業者ノ營業ニ關スル帳簿物品等ヲ檢査スルコトアルヘシ

第十條 無免許ニテ營業シタル者ハ其現在酒精類及營業用ノ物品器械ヲ沒收シ營業稅三倍ノ罰金ニ處ス

但シ已ニ賣捌キタルモノハ其ノ代價ヲ追徵ス

第十一條 帳簿ノ記載ヲ偽リ若ハ故ラニ記載ヲ爲サスシテ脫稅ヲ圖リ又ハ脫稅シタル者ハ十圓以上五百圓
以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 帳簿ノ調製記載ヲ怠リタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十三條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及減輕、再犯加重、數罪俱發ノ例ヲ用井ス但シ刑法第七十
五條第一項ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 本法ハ明治二十六年七月一日ヨリ施行ス

勅令 明治二十六年五月 朕酒精營業稅法第七條ニ依リ醫藥用及工業用酒精營業稅免除ニ關スル件ヲ裁可シ茲
ニ之ヲ公布ヒシム

第一條 酒精營業稅法第七條ノ醫藥用トハ日本藥局方ニ據リ製藥用ニ供スルモノ又ハ醫術用ニ供スルモノ
ヲ云ヒ工業用トハ工藝製作ニ供スルモノヲ云フ

第二條 醫藥用ノ爲メ酒精ヲ販賣又ハ使用スル者ニシテ營業稅ノ免除ヲ請ハント欲スル者ハ豫メ管廳ニ申
出テ認許ヲ受クヘシ

第三條 前條ノ認許ヲ受ケタル者ハ醫藥用外ニ酒精ヲ販賣又ハ讓與スルコトヲ得ス

第四條 第二條ノ認許ヲ受ケタル者ハ醫師ノ證明書ヲ所持スル自用者、醫師、藥劑師、藥種商及製藥者ノ
外ニ酒精ヲ販賣又ハ讓與スルコトヲ得ス

第五條 認許ヲ受ケタル者ヨリ酒精ヲ買受ケ又ハ讓受ケタル醫師若クハ藥劑師、藥種商及製藥者ニ於テ
其酒精ヲ自用者ニ賣渡シ又ハ讓渡シ得ルハ其自ラ診療スル患者若クハ醫師ノ證明書ヲ有スル者ナル場合
ニ限ル

第六條 第二條ノ認許ヲ受ケタル者ヨリ酒精ヲ買受ケ又ハ讓受ケタル醫師、藥劑師、藥種商及製藥者ハ其
酒精ヲ醫藥用外ニ使用スルコトヲ得ス

第六條 第二條ノ認許ヲ受ケタル者醫藥用ノ爲メ酒精ヲ販賣スルトキハ其都度量數代價及買受人ノ住所、職業、氏名(醫師ノ證明書ヲ所持スル自用者ニ販賣シタル場合ハ住所氏名)ヲ帳簿ニ詳記シ每一箇月分ノ月計ヲ附記シ左ノ書類ト共ニ翌月五日限リ管廳ニ差出シ帳簿ニ免稅ノ檢印ヲ受クヘシ其使用又ハ讓與ニ係ルモノモ亦之ニ準スヘシ

一 醫師ノ證明書又ハ買受人若クハ讓受人ニ於テ量數年月日、住所、職業及氏名ヲ記載シ捺印シタル注文書、物品領收書等

第七條 第二條ノ認許ヲ受ケタル者ヨリ酒精ヲ買受ケ又ハ讓受ケタル醫師、藥劑師、藥種商及製藥者ハ其都度量數代價及賣渡人若クハ讓渡人ノ住所氏名ヲ帳簿ニ記載シ置クヘシ

前項ノ酒精ヲ販賣スルトキハ其都度量數代價及買受人ノ住所氏名ヲ帳簿ニ詳記シ醫師ノ證明書(醫師ノ場合ニ於テハ處方書)ヲ添ヘ置クヘシ其使用又ハ讓與ニ係ルモノモ亦之ニ準スヘシ

第八條 工業用酒精ニ係ル營業稅ノ免除ヲ請ハント欲スル者ハ販賣若クハ使用以前ニ管廳ニ其量數ヲ届出ツヘシ此場合ニ於テハ當該官吏ハ百分ノ八乃至十ノ割合ヲ以テ額人ノ望ニ從ヒ木精(メチールアルコール)若クハ石油ヲ混和スヘシ但其物品ノ費用ハ額人之ヲ負擔スヘシ

第九條 第三條第四條第五條ヲ犯シタル者及第六條第七條ノ帳簿ノ記載ヲ詐リタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五款 烟草稅

勅令 明治二十一年四月 朕烟草稅則改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

月六日第二十號 烟草稅則

第一條 烟草營業者ヲ分テ左ノ三種トス

烟草製造人

葉烟草ヲ買受ケ刻烟草又ハ卷烟草ヲ製造スル者

烟草仲買人

葉烟草ヲ買受ケ又ハ人ノ依頼ニ由リ之ヲ烟草製造人又同業者ニ賣渡ス者

製造烟草ヲ買受ケ又ハ人ノ依頼ニ由リ之ヲ烟草小賣人又ハ同業者ニ賣渡ス者

烟草小賣人

製造烟草ヲ烟草製造人又ハ烟草仲買人ヨリ買受ケ之ヲ自用者ニ賣割ク者

第二條 烟草營業者ヲ爲サントスル者ハ管廳ニ願出營業場一箇所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ但營業者未了年

源癩白痴又ハ瘡啞ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ

第三條 烟草製造營業ノ免許ヲ受クル者ハ正實ニ營業ヲ爲シ此稅則ヲ遵守スヘキコトヲ證約スル爲メ證約

狀ヲ管廳ニ差出スヘシ

證約狀ニハ左ノ定限内ニ於テ大藏大臣定ムル所ノ證約金額ヲ記入スルモノトス

證約金營業場一箇所毎ニ五百圓以上

烟草製造人此稅則ヲ犯シ證約ニ背キタルトキハ其犯罪ノ輕重ニ依リ管廳ニ於テ證約金ノ一部若クハ全部

ヲ徴收スヘシ

第四條 烟草營業者烟草ノ仕入出賣ヲ爲シ又ハ家族雇人ヲシテ之ヲ爲サシムトキハ管廳ニ申出鑑札ヲ受置

キ之ヲ携帶シ又ハ携帶セシムヘシ

第五條 鑑札ヲ受クル者ハ左ノ鑑札料ヲ納ムヘシ

烟草營業鑑札料 一枚ニ付金二十錢

烟草仕入鑑札料 一枚ニ付金十錢

烟草出賣鑑札料 一枚ニ付金十錢

第六條 烟草營業者ハ各左ノ營業稅ヲ納ムヘシ

烟草製造營業稅 營業場一箇所ニ付一箇年金十五圓

烟草仲買營業稅 營業場一箇所ニ付一箇年金十五圓
 烟草小賣營業稅 營業場一箇所ニ付一箇年金五圓

第七條 烟草營業稅ハ毎年兩度ニ區分シ前半分ハ一月三十一日限後半分ハ七月三十一日限之ヲ納ムヘシ但新ニ營業鑑札ヲ受クルトキハ其節該半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ

第八條 烟草製造人烟草ヲ製造シタルトキハ其定價十分ノ二ノ割合ヲ以テ烟草印紙ヲ貼用スヘシ

第九條 製造烟草ハ一定ノ包裹ヲ施シテ之ヲ密封シ自己ノ印章ヲ以テ其帖用印紙ニ消印スヘシ

第十條 烟草營業者ハ帳簿ヲ調製シ營業ニ係ル要領ヲ記載スヘシ

第十一條 外國ニ輸出スル製造烟草ハ輸出ノ節稅關ノ検査ヲ受置キ輸入港稅關ノ陸揚免狀若クハ其他證憑ト爲ルヘキ書類ニ該港在留ノ我國領事ノ檢印ヲ受ケ之ヲ輸出港ノ稅關ニ差出シ其印紙稅ニ相當スル金額ノ下戻シヲ請求スルコトヲ得但印紙稅ノ下戻ヲ受ケタル烟草ヲ本邦ニ輸入スルトキハ更ニ其金額ヲ納ムヘシ

第十二條 烟草耕作人烟草仲買人ハ其所持スル葉烟草ヲ烟草製造人又ハ烟草仲買人ニアラサル者ニ賣渡貸渡讓渡スコトヲ得ス

第十三條 烟草製造人烟草仲買人ハ烟草耕作人又ハ烟草仲買人ニアラサル者ヨリ葉烟草ヲ買受借受讓受クルコトヲ得ス但賣流又ハ葉烟草ヲ買受クルハ此限ニアラス

第十四條 烟草仲買人ハ烟草製造人ニアラサル者ヨリ製造烟草ヲ買受借受讓受クルコトヲ得ス但賣流又ハ葉烟草ヲ製造スルハ此限ニアラス

第十五條 何人ニテモ製造人ニ雇使セラル、ノ外人ノ依頼ヲ受ケテ烟草ヲ製造スルコトヲ得ス

第十六條 烟草耕作人ニアラサル者ハ自用ノ爲メタリトモ烟草ヲ製造スルコトヲ得ス

第十七條 烟草耕作人ニ限り自用ノ爲メニ烟草ヲ製造スルコトヲ得ト雖モ之ヲ賣渡貸渡讓渡スコトヲ得ス

第十八條 烟草小賣人ハ烟草製造人又ハ烟草仲買人ニアラサル者ヨリ製造烟草ヲ買受借受讓受クルコトヲ得ス

第十八條 烟草營業者ハ無印紙不足印紙ノ製造烟草若クハ包裹ノ解錠毀損シタル製造烟草ヲ所持シ又ハ賣買貸借及讓渡讓受ヲ爲スコトヲ得ス

第十九條 何人ニテモ無印紙ノ製造烟草又ハ包裹ノ解錠毀損シタル製造烟草ヲ烟草營業者ヨリ買受クルコトヲ得ス

第二十條 鑑札ハ賣買貸借及讓渡讓受ヲ爲スコトヲ得ス

第二十一條 烟草印紙ハ管廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ノ外ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第二十二條 烟草營業者ノ營業場倉庫其他ノ場所及營業ニ關スル帳簿物品ハ當該官吏之ヲ検査スルコトアルヘシ但當該官吏ハ其證票ヲ携帯スヘシ

第二十三條 營業免許ヲ受ケスニテ烟草營業ヲ爲シタル者ハ通脫ニ係ル營業稅三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ其烟草及器械ヲ沒收ス

第二十四條 第九條第十八條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル烟草ヲ沒收ス

第二十五條 帳簿ノ記載ヲ偽リ若クハ故ヲニ記載ヲ爲ナスニテ稅稅ヲ謀リ又ハ稅稅シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル烟草ヲ沒收ス

第二十六條 第四條第二十一條ヲ犯シタル者又ハ帳簿ノ調製記載ヲ怠リタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ第二十一條ヲ犯シタル者ハ仍ホ其印紙ヲ沒收ス

第二十七條 第十二條第十三條第十四條第十七條ヲ犯シタル者又ハ賣流抵當流ヲ葉烟草ヲ烟草製造人烟草仲買人ニアラサル者ニ賣渡シ又ハ賣流抵當流ノ製造烟草ヲ烟草仲買人ニアラサル者ニ賣渡シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル烟草ヲ沒收ス

第二十八條 第十六條第二十條ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル烟草及物品ヲ沒收シ第十六條第二十條ヲ犯シタル者ハ仍ホ其器械ヲ沒收ス

第二十九條 煙草自用者ニシテ禁煙草若クハ無印紙ノ製造煙草又ハ包裹ノ解旋毀損シタル製造煙草ヲ買受ケタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 此稅則ヲ犯シ沒收スヘキ物品ニシテ既ニ之ヲ賣渡シ又ハ消棄シタルトキハ代金ヲ追徵ス

第三十一條 此稅則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第三十二條 煙草營業者ノ家屬屬人ニシテ此稅則ヲ犯シタルトキハ其營業者ヲ處罰ス

煙草營業者未丁年風癩白痴又ハ瘡啞ニシテ此稅則ヲ犯シタルトキハ其後見人ヲ處罰ス

第三十三條 煙草印紙ノ種類及此稅則施行ノ細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第三十四條 此稅則ハ明治二十一年七月一日ヨリ施行ス

附則

第三十五條 沖繩縣及東京府管下小笠原島伊豆七島ニハ當分此稅則ヲ施行セズ但此稅則施行ノ地ニ煙草ヲ輸送スルトキハ此稅則ニ從フヘシ

第三十六條 此稅則發布以前ニ免許ヲ受ケタル煙草營業者ニシテ第二條但書ニ該當スル者ハ後見人ヲ立テ三月以内ニ管廳ニ届出ヘシ

第三十七條 此稅則發布以前ニ免許ヲ受ケタル煙草製造人ハ三月以内ニ第三條ニ依リ證約狀ヲ管廳ニ差出スヘシ

第三十八條 此稅則施行以前ヨリ煙草仲買人煙草小買人ノ所持スル卷煙草ハ煙草製造人ニ委託シ又ハ自ラ包裹ヲ施シ印紙ヲ貼用スヘシ

第三十九條 此稅則發布以前ニ裝置シタル刻煙草ハ此稅則施行ノ日ヨリ三月以内ハ之ヲ賣捌ケコトヲ得前項ノ期限ヲ過キ賣捌ニ至ラサル刻煙草ハ其所持人ニ於テ煙草製造人ニ委託シ又ハ自ラ此稅則ニ從ヒ包裹ヲ施シ更ニ印紙ヲ貼用ス

大藏省令^{明治二十一年四月二十六日第三號} 今般勅令第二十號ヲ以テ煙草稅則改正ニ就キ右施行細則左ノ通相定ム

煙草稅則施行細則

第一條 稅則第二條ニ依リ煙草製造又ハ煙草仲買營業ノ免許ヲ願出ル者ハ其營業ニ關スル地所建物ノ位置構造圖面ヲ其願書ニ添テ管廳ニ差出スヘシ但免許ヲ受ケタル後異動ヲ生シタルトキハ其時々管廳ニ届出ヘシ

第二條 稅則第三條ノ證約金額ハ證約者ノ雇人器械ノ員數及其建物ノ坪數ニ應シ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ム

北海道廳長官府縣知事必要ト認ムル場合ニ於テハ前項ノ員數坪數ニ拘ハラズ證約金額ヲ増減スルコトアヘシ證約ノ手續及證約狀ノ様式ハ別ニ之ヲ告示スヘシ

第三條 煙草製造又ハ煙草仲買營業免許ヲ受ケタル者ハ其營業ニ關スル家屋倉庫ノ圖面製造器械ノ種類箇數及雇人弟子職工ノ數(職工其住所トモ)ヲ其府縣ノ租稅檢査員派出所ニ届出ヘシ但異動ヲ生シタルトキハ其時々之ヲ届出ヘシ

第四條 稅則第二條但書及第三十六條ノ場合ニ於テ左ニ掲クル者ハ後見人ト爲ルコトヲ得ス

- 一 公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者
- 一 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第五條 稅則第三十六條第三十七條ノ手續ヲ履行セサルトキハ營業免許ノ効ヲ失フモノトス

第六條 煙草營業者不在其他事故アルトキハ代人ヲ置キ稅則ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシムヘシ會社營業ノ場合ニ於テモ亦之ニ準ス

但代人ノ氏名住所ハ所轄收稅署ニ届出ヘシ

第七條 稅則第四條ノ仕入出賣ヲ爲スコトヲ得ル家族雇人ハ其營業者ト同居常住ヲ爲ス者ニ限ル但會社ニシテ其業務ニ從事スル役員又ハ常時雇人ヲ以テ仕入出賣ヲ爲ス場合ハ本條ノ限リニアラス

第八條 煙草印紙ノ種目ハ左ノ如シ

- 黑色 一枚 二厘

第十四章 稅則 煙草稅

(三百九十一)

淡赭色	一枚	三厘
黃色	一枚	四厘
秋色	一枚	六厘
萌黃色	一枚	八厘
淡青色	一枚	一錢
茶褐色	一枚	一錢二厘
淡紅色	一枚	一錢六厘
桔梗色	一枚	一錢八厘
橙黃色	一枚	二錢
老綠色	一枚	二錢四厘
濃青色	一枚	三錢
淡黑色	一枚	三錢二厘
黃綠色	一枚	四錢
嬌栗色	一枚	四錢八厘
紫色	一枚	六錢
朱色	一枚	六錢四厘
赤色	一枚	八錢

第九條 製造煙草ノ包葉每一箇ノ定價種類ハ左ノ制限ニ從フヘシ

百又入	八十又入	六十又入	五十又入
-----	------	------	------

刻煙草每一包(函)ニ付八四十又入
三十又入
二十又入
十五又入
十又入
五又入
二百本入
百本入
五十本入
二十本入
十本入
六本入

第十條 稅則第八條第九條ノ場合ニ於テ製造者ハ各種煙草一束毎ニ各之ヲ紙袋入り、又ハ紙包入りトシ其包裏ノ接キ目、合キ目等ハ糊類ヲ以テ完全ニ之ヲ固着シテ貼用印紙ヲ破毀セザレハ煙草ヲ取出スヲ得サル様ニ密封スヘシ

製造煙草ニハ普通ノ文字ヲ以テ每箇本數ノ定價及ヒ製造人ノ氏名(テハ社名)營業場ヲ鮮明ニ其包裏ノ裏面ニ記入スヘシ

煙草營業人ニ於テ所持ノ製造煙草ヲ定價以上ニ賣捌カントスルトキハ原製造人ニ托シ定價ヲ改メ改定定價ニ相當スル印紙ヲ増貼セシムヘシ

第十一條 煙草印紙ハ一枚ヲ連貼スルコトヲ得

第十二條 製造煙草每一箇ノ定價錢位ニ滿クサル端數ナルトキハ四拾五入ノ例ニ依リ二厘印紙ヲ貼用スヘシ

第十四章 稅則 煙草稅

(三百九十一)

第十三條 毀損又ハ汚染セル印紙ハ其効ナキモノトス

第十四條 煙草營業者ハ既ニ用ヒタル煙草印紙又ハ其包裹ヲ所持スルコトヲ得ス又何人ニテモ之ヲ賣買シ若クハ譲渡譲受ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條 煙草營業者ハ商品見本トシテ毎種別煙草五匁紙卷煙草十本葉卷煙草五十本ニ超ヘサル包裹ヲ切扱キ之ヲ店頭ニ陳列シ又ハ出賣先キニ携帶スルコトヲ得

第十六條 稅則第九條貼用印紙ノ消印ハ曲尺經七分以上ノモノヲ用ヒ黒肉ヲ以テ其包裹封緘ノ要部ト印紙ノ彩紋トニ掛ケテ之ヲ押捺スヘシ

第十七條 煙草製造人製造スル煙草ハ其自用ニ供スル者ト雖モ總テ煙草稅則ニ從フヘシ

第十八條 煙草製造人仲買人ニシテ葉煙草ヲ買入レ又ハ預リタルトキハ査倅、蓋「カマス」又ハ壹束毎ニ其葉ノ種類、量目、及買入レクル番號年月日等ケリ主ノ住所、資格、氏名ヲ記シタル票札ヲ貼ケ置クヘシ

第十九條 煙草營業者ハ第三條ニ依リ租稅檢査眞派出所ニ届出テタル家屋倉庫ノ外ニ煙草ヲ藏置スルコトヲ得ス但葉取リ果拵ノ原ノニ煙草ヲ職工ニ渡ス煖合ハ此限ニアラス

但第二十條ノ認許ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

第二十條 煙草營業者營業場外ニ於テ煙草葉取拵又ハ舊卷ヲ爲サシメントスルトキハ其仕業ノ種類及職工ノ住所氏名年齢ヲ詳記シタル書面ヲ添ヘ所轄稅署ニ申出テ認許ヲ受クヘシ

前項認許ヲ受ケタルモノハ通帳ヲ製シ煙草營業者何果使用職工住所何果ト記シ之ヲ職工ニ渡シ置キ煙草ヲ授受スヘシ但通帳ハ使用以前所轄稅署ニ差出シ檢印ヲ受クヘシ其附込濟又ハ使用ヲ止メタルトキハ其時々消印ヲ受クヘシ

總テ煙草ヲ授受スルトキハ左ノ事項ヲ詳記シ授受ノ證トシテ其時々受取人ニ於テ調印スヘシ

一 仕上ケ原料葉煙草又ハ舊卷原料煙草ノ量目及職工ノ受取リタル年月日

一 仕上ケ日限、仕上ノ種類、量目(葉卷煙草ハ原料別毎箱一斤又及二付仕上ケ何分) 卷又ハ何々何分何百匁量目何程ト區別記載スヘシ

一 紙卷煙草ニ用ユル卷紙、口紙ノ數量

通帳ハ一箇月分月計ヲ附シ置キ當該官吏ノ求メアルトキハ之ヲ差出シ檢査ヲ受クヘシ

營業者ハ職工ニ於テ煙草ヲ滅失シタルトキハ三日以内ニ且官所轄稅署ニ届出ツヘシ

左ノ場合ニ於テハ五日以内ニ所轄稅署ニ届出スヘシ

一 職工ニ異動アリタルトキ

一 通帳紛失シタルトキ

一 職工氏名ヲ變更シ又ハ住所ヲ移轉シタルトキ

第二十一條 煙草營業者又ハ煙草耕作人葉煙草又ハ製造煙草ヲ運送スルトキハ送狀ヲ其荷物ニ添付スヘシ

煙草送狀ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 葉煙草ノ種類、番號、荷造ノ區別、箇數、量目、荷數尙主ノ氏名、住所

一 製造煙草ノ種類、包裹ノ區別、箇數、荷數、尙主ノ氏名、住所

第二十二條 煙草製造人ハ煙草印紙買入帳ヲ調製シ印紙買入ヲ爲ス毎ニ之ヲ携帶シ印紙賣捌人ヲシテ左ノ事項ヲ記載シ其名下ニ押印セシメ置クヘシ

一 印紙買入ノ年月日

一 印紙ノ種類枚數

一 賣捌人ノ氏名住所

第二十三條 輸出製煙草ノ檢査ヲ受ケントスルモノハ種類、箇數、定價、印紙稅額ノ仕譯書ヲ添ヘ輸出港稅關ニ願出ツヘシ但印紙稅ノ下戻ヲ受ケタル製造煙草ヲ本邦ニ輸入シ其金額ヲ納ムルトキモ亦同シ

第二十四條 稅則第十條ノ帳簿ノ調製記載ノ方式ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ム

第二十五條 送狀ヲ添付セサル煙草荷物ハ租稅檢査員其荷物ノ運送ヲ差留ムルコトアルヘシ

第二十六條 代替ノトキ若クハ鑑札ヲ遺失毀損シ又ハ氏名住所營業場ヲ改易シタルトキハ管廳ニ届出左ノ期日以内ニ鑑札ノ書替又ハ再渡ヲ請フヘシ但稅則第五條ニ從ヒ鑑札料ヲ納ムヘシ

一代替書換ハ六十日間
 一其他ノ書換再渡ハ十日間
 第二十七條 煙草稅則及此規則ニ掲タル帳簿書類ハ三箇年間保存スヘシ
 第二十九條 第九條第十條第十四條第十九條第二十一條第二十五條第三十條第三十二條第三十三條第三十四條第三十五條第三十六條第三十七條第三十八條第三十九條第四十條第四十一條第四十二條第四十三條第四十四條第四十五條第四十六條第四十七條第四十八條第四十九條第五十條第五十一條第五十二條第五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條第七十二條第七十三條第七十四條第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條第八十三條第八十四條第八十五條第八十六條第八十七條第八十八條第八十九條第九十條第九十一條第九十二條第九十三條第九十四條第九十五條第九十六條第九十七條第九十八條第九十九條第一百條
 シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處シ第一條第三條第六條第十六條第十八條第二十條第二十二條第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十七條第二十八條第二十九條第三十條第三十一條第三十二條第三十三條第三十四條第三十五條第三十六條第三十七條第三十八條第三十九條第四十條第四十一條第四十二條第四十三條第四十四條第四十五條第四十六條第四十七條第四十八條第四十九條第五十條第五十一條第五十二條第五十三條第五十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條第七十二條第七十三條第七十四條第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條第八十三條第八十四條第八十五條第八十六條第八十七條第八十八條第八十九條第九十條第九十一條第九十二條第九十三條第九十四條第九十五條第九十六條第九十七條第九十八條第九十九條第一百條
 第三十條 稅則第三十八條及第三十九條第二項ノ場合ニ於テ煙草營業者包裹ヲ施シ又ハ印紙ヲ貼用スルト
 キハ稅則第八條第九條ノ手續ニ從フヘシ
 第三十一條 從來免許ヲ受ケテ煙草營業ヲ爲ス者ハ本年七月三十一日迄ニ第一條及第三條ノ届出ヲ爲スヘシ

第六款 菓子稅

布告 明治十八年五月十日 菓子稅則別紙ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス但東京府管轄伊豆七島小笠原島函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分ノ施行セズ

第一條 菓子營業者ヲ分テ左ノ三種トス
 菓子製造人 菓子ヲ製造シ之ヲ菓子營業者ニ賣渡ス者ヲ云フ
 菓子卸賣人 菓子ヲ買入レ之ヲ菓子營業者ニ賣渡ス者ヲ云フ
 菓子小賣人 菓子ヲ賣用人ニ賣渡ス者ヲ云フ
 第二條 菓子營業ヲ爲サントスル者ハ管廳ニ願出營業鑑札ヲ受クヘシ但一人ニテ二個所以上ノ營業場ヲ設クル者又ハ二種以上ノ營業ヲ兼ヌル者ハ各別ニ營業鑑札ヲ受クヘシ

第三條 菓子營業者自己又ハ家族雇人ヲ以テ仕入又ハ出賣ヲ爲サントスルトキハ管廳ニ願出仕入鑑札又ハ出賣鑑札ヲ受ケ各自之ヲ携帯スヘシ

第四條 鑑札ヲ受ケルトキハ左ノ鑑札料ヲ納ムヘシ
 營業鑑札料 一枚ニ付金二十錢
 仕入鑑札料 一枚ニ付金十錢
 出賣鑑札料 一枚ニ付金十錢

第五條 鑑札ヲ失却毀損シ又ハ代替改名轉居セシトキハ管廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フヘシ但前條ノ鑑札料ヲ納ムヘシ
 第六條 菓子營業者廢業スルトキハ管廳ニ届出鑑札ヲ還納スヘシ
 第七條 鑑札ハ貸借賣買又ハ讓受讓渡ヲ爲スコトヲ得ス
 第八條 菓子營業者ハ左ノ區別ニ從ヒ營業稅ヲ納ムヘシ但二種以上ノ營業ヲ兼ヌル者ハ其稅額ノ多キモノニ就キ納稅スヘシ

製造營業稅

雇人十人以上アル者	一箇年 金貳拾圓
雇人六人以上アル者	一箇年 金拾五圓
雇人三人以上アル者	一箇年 金拾圓
雇人二人アル者	一箇年 金五圓
雇人一人アル者	一箇年 金三圓
雇人ナキ者	一箇年 金一圓

卸賣營業稅

雇人十人以上アル者	一箇年 金貳拾圓
雇人六人以上アル者	一箇年 金拾五圓

雇人三人以上アル者 一箇年 金拾圓
 雇人二人アル者 一箇年 金五圓
 雇人一人アル者 一箇年 金三圓
 雇人ナキ者 一箇年 金壹圓

小賣營業稅
 雇人三人以上アル者 一箇年 金七圓
 雇人二人アル者 一箇年 金三圓
 雇人一人アル者 一箇年 金貳圓
 雇人ナキ者 一箇年 金壹圓

二種以上ヲ兼タル營業者ノ雇人各種ヲ別タス之ヲ合算スルモノトス
 露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ其營業稅ヲ免除ス

第九條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分チ前半分ハ其年一月三十一日限後半分ハ同ク七月三十一日限之ヲ納ムヘシ但新ニ開業スル者ハ營業證札ヲ受ケルトキ其半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ

第十條 營業稅前半分ハ其年一月一日後半分ハ同ク七月一日ノ雇人ノ現員又新ニ開業スル者ハ其營業證札ヲ受ケルトキノ現員ニ據リ定ムヘシ但雇人増加シタルトキハ該期ノ增稅ヲ納ムヘシ

第十一條 菓子製造人ハ製造稅トシテ菓子賣上金高百分ノ五ヲ左ノ期限ニ從ヒ納ムヘシ
 第一期 前月一旬一旬六日限 其年八月三十一日限
 第二期 前月一旬一旬六日限 翌年二月二十八日限

半年分ノ賣上金高三十圓未満ノ者及露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ其製造稅ヲ免除ス

第十二條 菓子營業者ハ毎年一月一日七月一日現在雇人ノ員數氏名ヲ取調其月十五日限又新ニ開業スル者ハ出願ノトキ管廳ニ届出ヘシ但増員アルトキハ其時々之ヲ届出ヘシ

第十三條 菓子製造人ハ毎年其製造高及賣上金高ヲ左ノ通管廳ニ届出ヘシ但露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ

此限ニアラス

一月一日ヨリ六月三十日迄ノ分 其年七月十五日限
 七月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ分 翌年一月十五日限

第十四條 菓子製造稅額ハ前條ノ届出ニ據リ郡區長之ヲ調登シ府縣知事之ヲ定ム

第十五條 菓子營業者ノ帳簿倉庫營業場及營業物品ハ主任官隨時之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第十六條 (削除)

第十七條 第二條ニ違ヒ營業證札ヲ受ケスシテ菓子營業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ菓子及製造器械ヲ沒收ス既ニ賣捌キケル者ハ其代金ヲ追徴ス

第十八條 第十二條第十三條ノ届書ニ詐偽ノ記載ヲ爲シ又ハ第十五條ノ檢査ヲ拒ミタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第三條ニ違ヒ證札ヲ携帶セスシテ仕入又ハ出賣ヲ爲シタル者及第七條ニ違ヒ證札ヲ貸借賣買又ハ讓受讓渡シタル者ハ二圓以上二拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 第五條第六條第十二條第十三條ノ届出ヲ怠リタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不倫罪及減輕、再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十二條 菓子營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタルトキハ其營業者ヲ處罰ス

第七款 醬麵稅

布告開始時三時九月ニ醬麵營業稅則別冊ノ通相定本年十月一日ヨリ施行候條此布告候事

醬麵營業稅則
 第一章 免許證札 營業稅

第一條 凡ソ醬麵、醸造酒類ヲ製造シテ營業セント欲スル者ハ其旨管廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許證札ヲ受ケ一期營業稅トシテ左ノ通納ムヘシ

醬油營業稅 金五十圓

- 第二條 營業免許ハ其年十月一日ヨリ翌年九月三十日迄ヲ以テ一期トス
- 第三條 一期中何月ニ新規免許ヲ受フルモ營業稅ハ直ニ管廳ヘ納ムヘシ
- 第四條 免許ヲ受ケタル者ハ其一期中販賣見込ノ石數毎年十月月中管廳ヘ届出ヘシ
- 第五條 販賣ノ節ハ其石數並ニ購求者居所姓名及ヒ年月日等遺漏ナク帳簿ニ記載シ置キ翌年十月月中管廳ヘ差出シ檢査ヲ受ケルヘシ
- 第六條 蓄藏及ヒ仕込水諸帳簿倉庫納屋等主任官隨時之ヲ檢査スヘシ
- 第七條 免許證札遺失或ハ毀損スル時ハ双方連印ノ願書ヲ管廳ニ差出シ書換ヲ請フヘシ
- 第八條 免許ヲ受ケタル者ハ管廳賣捌所ト書シタル標札ヘ免許證札ノ番號ヲ記載シ戸外ニ掲出スヘシ
- 第二章 禁令 罰令
- 第九條 免許證札ハ貸借スルヲ許サス
- 第十條 免許證札ヲ受ケス營業スル者ハ科料トシテ其營業稅二倍ノ金額ヲ徵スヘシ
- 第十一條 前明條ノ外販賣ノ節石數並ニ購求人ノ居所姓名等ノ帳記、怠ルカ其他本則ニ違反スル者ハ科料トシテ一期ヨリ少ナカラス五拾圓ヨリ多カニナル金額ヲ徵スヘシ
- 第十二條 管廳營業場ノ中ニ於テハ酒類受賣管廳受賣許造有業ヲ爲シ又ハ酒類精造ヲ製造スルヲ許サス
- 第十三條 第十二條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ犯罪ニ係ル物品及ヒ器械ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタル者ハ其代價ヲ追徵スヘシ
- 第十四條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第一項ノ場合ハ此限ニアラス
- 第十五條 管廳營業者ノ家族雇人ニシテ其營業ニ係リ此規則ヲ犯シタル時ハ總テ其營業者ヲ處罰ス

第八款 醬油 稅

勅令 明治三十一年六月十日 陸軍省 稅則改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

醬油稅則

- 第一條 醬油ヲ製造ノ營業ヲ爲サントスル者ハ管廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許證札ヲ受ケヘシ但製造人十六歳未満ノ幼年者及瘋癲白痴又ハ瘖啞ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ
- 第二條 醬油製造人ハ左ノ營業稅及造石稅ヲ納ムヘシ
 - 營業稅 製造場一箇所ニ付一箇年 金五圓
 - 管廳稅 醬油ハ諸味一石ニ付 金一圓
 - 造石稅 溜ハ製成一石ニ付 金一圓
- 第三條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分テ前半分ハ其年一月三十一日限後半分ハ同七月三十一日限之ヲ納ムヘシ但新ニ營業ヲ爲ス者ハ免許證札ヲ受ケルトキ其半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ
- 第四條 造石稅ハ左ノ期限ニ從ヒ之ヲ納ムヘシ但廢業スル者ハ其節之ヲ納ムヘシ
 - 第一期 五月三十一日限
 - 第二期 一月一日ヨリ四月三十日マテノ間査定済石數ニ係ル稅額
 - 第三期 五月一日ヨリ八月三十一日マテノ間査定済石數ニ係ル稅額
 - 第四期 九月三十日限
 - 第五期 五月一日ヨリ八月三十一日限
 - 第六期 翌年一月三十一日限
- 第五條 九月一日ヨリ十二月三十一日マテノ間査定済石數ニ係ル稅額
- 第六條 醬油ハ之ヲ製成スル前ニ溜ハ之ヲ製成シタル後十日以内ニ管廳ニ申出造石數ノ査定ヲ受ケヘシ
- 第七條 造石數査定済ノ醬油ト査定未済ノ醬油トヲ混和シタルトキハ其總石數ニ就テ更ニ査定ヲ受ケヘシ
- 第八條 醬油製造人廢業ノ際査定未済ノ醬油ヲ所持スルトキハ管廳ニ申出造石數ノ査定ヲ受ケ其造石稅

ヲ納ムヘシ但其醬油ヲ同業者ニ賣渡讓渡ス場合ニ限リ管廳ニ申出検査ヲ受置キ其買受讓受人ニ於テ第五條ノ査定ヲ受ケ及第四條ノ期限ニ從ヒ造石稅ヲ納ムルコトヲ得
製造場ニ箇所以上ニ於テ醬油製造ヲ爲ス者其一箇所以上ヲ廢シ査定未済ノ醬油ヲ他ノ製造場ニ移ストキハ管廳ニ申出検査ヲ受ケヘシ

第七條 免許鑑札ハ貸借賣買及讓渡讓受ヲ爲スコトヲ得ス

第八條 醬油製造人ハ同業者ニ非サル者ニ醬油ヲ製造スル爲メニ製造場ヲ貸渡スコトヲ得ス

第九條 醬油製造人ハ製造場ニ關シ修繕等已ムヲ得サル事故ニ因リ管廳ニ届出タル後ニ非サレハ造石敷登定未済ノ醬油ヲ其製造場外ニ移スコトヲ得ス

第十條 醬油製造人ハ造石敷登定未済ノ醬油ヲ賣渡貸渡讓渡又ハ自用スルコトヲ得ス但第六條但書ノ場合ハ此限ニ在ラス

第十一條 造石稅ノ査定ヲ經タル醬油其造石稅納期內ニ天災又ハ避ヘカラサル事故ニ因リ廢棄ニ屬シタルトキハ直チニ管廳ニ申出検査ヲ受ケ該造石稅ノ免除ヲ請フコトヲ得

第十二條 醬油製造人ハ營業ニ係ル要領ヲ帳簿ニ記載スヘシ

第十三條 外國ニ輸出スル醬油ハ輸出ノ節稅關ノ検査ヲ受置キ輸入港稅關ノ陸揚免狀若クハ其他證憑ト爲ルヘキ書類ニ該港在留ノ我國領事ノ檢印ヲ受ケ之ヲ輸出港ノ稅關ニ差出シ造石稅ノ下戻ヲ請求スルコトヲ得其下戻ノ歩合ハ大藏大臣定ムル所ニ依ルヘシ但造石稅ノ下戻ヲ受ケタル醬油ヲ本邦ニ輸入スルトキハ其金額ヲ輸入港稅關ニ還納スヘシ

第十四條 醬油製造人ノ製造スル醬油ハ他ノ依託ヲ受ケ又ハ自家用料ニ供スルモノト雖モ總テ此稅則ニ從フヘシ

醬油製造人ハ製造場外ニ於テ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス

第十五條 醬油請賣ヲ爲ス者ハ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス其同居者亦同シ

第十六條 自家用料ノ爲メ製造シタル醬油ハ之ヲ賣渡スコトヲ得ス

第十七條 醬油製造人ノ製造場倉庫其他ノ場所醬油仕込高並仕込ニ屬スル原品及營業ニ關スル帳簿ハ當該官吏之ヲ検査スルコトアルヘシ但當該官吏ハ其證票ヲ携帶スヘシ

第十八條 當該官吏ニ於テ此稅則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但當該官吏ハ其證票ヲ携帶スヘシ

第十九條 免許鑑札ヲ毀ケシテ醬油製造ノ營業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其醬油及容器製造器械ヲ沒收ス

第二十條 醬油製造人ニシテ醬油ヲ隱蔽シタル者ハ其石敷ニ相當スル造石稅三倍ノ罰金ニ處シ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及容器ヲ沒收ス第十條第十四條第二項ヲ犯シタル者ハ罰前項ニ同シ

第二十一條 第五條第六條ノ査定ヲ受ケサル者第八條第九條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及違稅ヲ謀ル爲メ帳簿ノ記載ヲ詐リタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ第十五條ヲ犯シタル者ハ仍ホ其犯罪ニ係ル醬油及容器製造器械ヲ沒收ス

第二十二條 第七條ヲ犯シタル者第六條ノ検査ヲ受ケサル者及帳簿ノ記載ヲ怠リタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 此稅則ヲ犯シ沒收スヘキ物品ニシテ既ニ之ヲ賣渡讓渡又ハ消費シタルトキハ其代金ヲ追徴ス

第二十四條 此稅則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重數罪併發ノ例ヲ用ヒス

第二十五條 醬油製造人ノ家屬雇人ニシテ此稅則ヲ犯シタルトキハ其製造人ヲ處罰ス

醬油製造人十六歳未満ノ幼年者及癡癩白痴又ハ瘡癩ニシテ此稅則ヲ犯シタルトキハ其後見人ヲ處罰ス

第二十六條 此稅則施行ノ細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二十七條 此稅則ハ明治二十一年九月一日ヨリ施行ス

附則

第二十八條 北海道沖繩縣及東京府管下小笠原島伊豆七島ニハ當分此稅則ヲ施行セズ但此稅則施行ノ地ニ輸送スル醬油ヲ製造スル者ハ此稅則ニ從フヘシ

第二十九條 此規則施行以前ニ免許ヲ受ケタル醬油製造人ニシテ第一條但書ニ該當スル者ハ後見人ヲ立テ三月以内ニ管轄ニ届出ヘシ

第九款 船車稅

布告明治十六年三月船稅規則別冊ノ通制定シ明治十六年七月一日ヨリ施行ス
但船稅ニ關スル從前ノ布告布達ハ廢止ス

船稅規則

第一章 總則 稅率 免稅

第一條 凡ソ船舶ハ此規則ニ依リ課稅スル者トス
第二條 船舶所有主ハ其船舶定繫場ヲ定メ定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ヲ乞フヘシ
第三條 新規造船シタル者其造船場所在ノ府縣管内ニ定繫場ヲ定メサル時ハ該廳ニ願出檢査ヲ受ケ假使檢査ヲ乞ヒ定繫場ニ面清ル上其地方廳ニ願出本鑑札ト引換ヲ乞フヘシ
第四條 船體ヲ變更シ積置若クハ間敷ニ増減ヲ生スル時ハ其定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ト引換ヲ乞フヘシ
第五條 船舶ヲ買賣讓與シタル者ハ雙方連署ノ上買賣讓與主ノ定ムル定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ト引換ヲ乞フヘシ

第六條 船舶ノ稅率ハ左ノ如シ

- 西洋形蒸氣船 百噸ニ付一年金拾五圓
- 同 風帆船 同 金拾圓
- 日本形船積石五十石以上 百石ニ付同 金二圓
- 同 積石五十石未満 (長 自油梁 三間迄ハ一年金三十錢 至 船梁 至 船梁) 同 金拾圓
- 同 積石五拾石未満 同 金拾圓
- 同 積石五拾石未満 (長 自油梁 三間迄ハ一年金三十錢 至 船梁 至 船梁) 同 金拾圓

但三間以上二間ヲ加フル毎ニ金貳拾五錢ヲ增加ス

遊船

但三間以上壹間ヲ加フル毎ニ金貳拾五錢ヲ增加ス

第七條 本鑑札又ハ假使鑑札ハ航行若クハ回漕ノ時之ヲ本船ニ所持スヘシ

但日本形積石五拾石未満ノ船并解漁船小廻船遊船ノ本鑑札ハ其艇ニ釘付スヘシ

第八條 解船破船又ハ水災盜難等ニ因リ船舶ヲ失ヒタル者ハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ届出鑑札ヲ還納ス

第九條 鑑札ヲ亡失毀損シタル時或ハ改名代替ノ時或ハ船號ヲ改メ若クハ定繫場ヲ變換シタルトキハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ再渡若クハ引換ヲ乞フヘシ

倉庫船

水田ノ耕作ニ用フル船

水災ノ爲メ陸地ニ備ヘ置ク船

橋梁ニ換ヘ渡場ノニ用フル船

船橋ノ組成ニ用フル船

航海中本船ニ揚ケ置ク傳馬船ノバッテリーヲ船ノ頭

第二章 納稅

第十一條 稅金ハ一年ヲ二期ニ分チ一月一日及七月一日現在ノ船舶ヨリ徵收スル者トス其前半年分ハ一月三十一日限後半年分ハ七月三十一日限定繫場所在ノ地方廳ニ上納スヘシ

第十二條 新規造船シタル者ハ鑑札ヲ受ケル時該期ニ係ル稅金ヲ上納スヘシ

第十三條 船體ヲ變更シ積置若クハ間敷ニ増減ヲ生シタル時ハ次期ヨリ其積置又ハ間敷ニ隨ヒ稅金ヲ納ムヘシ

第十四條 他管下ニ定繫場ヲ定ムル者ハ該地ニ代人ヲ定メ連署ノ上其定繫場所在ノ地方廳ニ届出納稅ヲ辨

セシムヘシ
 第十五條 本籍管内ニ定繫場ヲ定メタル者不在ノ時ハ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ
 第十六條 假蓋札ヲ受ケタル船舶定繫場ニ回漕中納稅期限ニ係ル時ハ豫メ定繫場所在ノ地ニ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ
 第十七條 此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ處罰ノ後其稅金ヲ追徵ス

第三章 罰則

第十八條 此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ其脫稅高五倍ノ科料若クハ罰金ニ處ス
 第十九條 免稅船有稅船ノ用ニアタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス
 第二十條 第三條第五條第七條第九條第十四條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及第十條ノ免稅船ニ烙印ヲ受ケサル者ハ壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
 第二十一條 此規則ニ依リ罰金若クハ科料ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但刑法第七十五條第七十六條ノ場合ハ此限ニアラス

布告 明治八年二月二十七日 明治六年一月第三十一號布告候馬車人力車駕籠乘馬遊船諸稅規則昨七年十二月三十一日
 限リ相廢シ尤遊船ノ義ハ本年一月一日ヨリ昨七年十二月第二十一號布告候漁船并海川小廻船等船稅規則ニ照準收稅之車類ノ義ハ改テ車稅規則左ノ通相定全月全日ヨリ施行候條此旨布告候事

第一則

- 馬車貳疋以上 一箇年稅金三圓
- 同 壹疋立 一箇年稅金貳圓
- 荷積馬車 一箇年稅金壹圓
- 人力車貳人乘 一箇年稅金貳圓

同 壹人乘

- 牛車 一箇年稅金壹圓
- 荷積大七八車 一箇年稅金壹圓
- 荷積中小車但大六以下 一箇年稅金五拾錢

第二則 新調ノ車ハ總テ其都度區戶長ヘ届出檢印可申受事

但從來所持ノ分ニテ檢印無之牛車荷積車等ハ更ニ檢印可申受事

第三則 新調ノモノハ六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅シ破解ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅候儀下可相心得事

第四則 右稅金上納ハ年々兩度ニ區別シ半箇年分死區戶長ヘ取集メ其管轄廳ヘ可相納事

但前半年分ハ一月三十一日限リ後半年分ハ七月三十一日限其管轄廳ヘ可相納事

第五則 荷積車等ノ内耕作一途ニ相用候分ハ免稅タルヘキ事

第六則 諸車類無届テ營業スル歟又ハ使用スル者ハ其脫稅高ノ五倍科料タルヘキ事

附則

北海道廳管内ニ限リ第一則ニ掲ル諸車ノ内荷積馬車牛車荷積大七八車荷積中小車ハ當分ノ内稅金ヲ免除ス

第十款 牛馬稅

布告 明治五年十一月四日 牛馬賣買渡世之者免稅ノ儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ相達候處今般別紙規則書ノ通相定候條各管内共區々ノ取計無之様可致候事
 牛馬賣買渡世ノ者免稅ノ儀昨辛未十二月相達候處此度御詮議ノ次第モ有之別紙ノ通規則相定候條是迄相渡候免許鑑札ハ引換相渡シ引上ケ候分各府縣廳ニ於テ取纏メ燒捨其段可申立候其餘ハ規則ニ隨ヒ處置可致事

壬申十月 規則

大 藏 省

- 第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世ノ者取調牛馬賣買綱ニ付免許鑑札壹枚相渡可申事
但壹隻綱ハ牛馬共七疋ニ限リ鑑札壹枚ヲ所持スル者旅行ノトキハ七疋以內貳枚ヲ所持スル者ハ十四疋ニ限ルヘシ其餘準之可申事
 - 第二條 免許鑑札新規願受候者六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅シ廢業ノ者七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅可致事
 - 第三條 免許鑑札萬一燒失流夫盜難等ニテ失ヒ候モ有之其段申出候ハ、事實取調鑑札相渡可申事
 - 第四條 免許鑑札壹枚ニ付一ヶ年稅金一圓上納可致事
但右稅金ハ前半年分ハ一月三十一日限後半年分ハ七月三十一日限各管轄所ニ取立租稅寮へ上納可致尤新規免許ノ者ハ其都度半額直ニ取立上納可致候事
 - 第五條 免許鑑札燒印并押切判ハ雜形ノ通其管轄所ニテ製造致シ各稼人共へ相渡可申事
但鑑札相渡次第稼人共國郡町村名及ヒ名面等詳細取調右鑑札印鑑相添當省へ可差出事
 - 第六條 右様取調立候上ハ向後無鑑札ニテ賣買不相成萬一無鑑札ニテ密々賣買候者有之相顯ルニ於テハ牛馬トモ取上ケ免許稅十倍ノ料科可申付事
但密賣買候者他ヨリ見出シ訴出ルニ於テハ其訴主へ取上ケ牛馬拂代金ノ十分ノ二壞美トシテ被下候事
 - 第七條 取上牛馬拂代并料科金等ノ儀ハ第四條但書ニ照準上納可致事
 - 第八條 此規則施行ニ付候諸入費ハ一ヶ年試驗ノ上可申立事
 - 第九條 免許鑑札ハ貸借決テ不相成候事
但免許鑑札借受賣買スル者ハ規則第六條密賣買ノ廉ニ照シ處分可致貸渡シ候者ハ免許稅五倍ノ料科可申付事
- 右ノ鑑札水火盜難又ハ過誤等ニテ遺失或ハ毀損候節ハ其管轄廳へ届出新規鑑札可申受事

但手數料トシ鑑札一枚ニ付金貳拾錢可相納事

鑑札雜形

長三寸 横二寸

番號
○ 牛馬賣買免許鑑札
何府縣支配所
國郡町村名
誰

裏面
年號
千支月
何府
廳
印

第十一款 水產稅

勅令 明治二十年三月六號 除北海道水產稅則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道水產稅則

- 第一條 北海道水產物營業人ハ此稅則ニ從ヒ水產稅ヲ納ムヘシ
- 第二條 北海道廳長官ハ水產稅ヲ徵收スル爲メ水產物營業人ノ組合ヲ定ムヘシ
- 第三條 水產稅ハ各組合水產物產出高價額百分ノ五ヲ以テ其組合一箇年ノ稅額ト爲シ之ヲ各營業人ニ賦課スルモノトス
- 第四條 此稅則ニ於テ水產物トハ左ノ種類ヲ云フ

第一類	生鮭	生鱒	生鮭	生鮭	生鮭	生鮭	生鮭	海馬
第二類	魚粕	乾身缺鮭	乾胴鮭	乾背割鮭	乾外割鮭	乾二ツ割鮭	鮭鹽粕	鹽鮭

鱈魚 ホシガキ 鮑魚 ホシガキ 乾河豚 イリコ 煎海鼠 スネ 海扇殼 カタカヒ 乾海扇 ホシホタテ 乾牡蠣 ホシカキ
 昆布 ホソク 細布 ホソク 布海苔 ワカメ 若布 ワカメ 銀杏草 ギンナンサワ

第五條 此稅則ニ於テ水產物營業人トハ第四條第二類ノ水產物ヲ採取スル者又ハ原品ニ勞力ヲ加ヘテ第四條第二類ノ水產物ト爲ス者ヲ云フ

第六條 水產稅ハ明治十五年ヨリ同十七年マテ三箇年間ノ水產物產出高ヲ平均シ其三箇年間北海道ニ於テ該稅品拂下ヲ爲シタル代價ヲ平均シテ價格ヲ定メ其組合ノ稅額ヲ算出スルモノトス但明治二十年以後三箇年以上ヲ經過シ大藏大臣ニ於テ北海道ノ全部又ハ其幾分ニ就キ水產物既定ノ價格不相當ナリト認ムルトキハ更ニ既往三箇年間ノ產出高拜其賣買相場ヲ平均シテ之ヲ改正スヘシ

第七條 第四條第一類ノ水產物ヲ以テ第二類ノ水產物ト爲ストキハ第二類ノ水產物ニ就キ課稅ス

第八條 水產物營業人トナラントスル者ハ水產物營業人ノ組合ニ加入スヘシ

第九條 水產物營業人組合ハ納稅委員ヲ置キ其ノ組合ニ係ル納稅ノ事ヲ擔理セシムヘシ但納稅委員ニ關スル費用ハ其組合ノ負擔トス

前項納稅委員ハ組合ニ於テ其會員中ヨリ之ニ充ツヘキ者若干名ヲ選舉シ其中ニ就キ北海道廳長官之ヲ指定ス但納稅委員ハ三箇年毎ニ改選スルモノトス

第十條 納稅委員ハ水產物營業人組合ヲ開キ組合ノ稅額ニ對シ各自ノ負擔スヘキ稅金ヲ評決セシメ郡區長ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム但營業人ノ組合會期其他本條ニ關スル手續ハ北海道廳長官之ヲ定ム

第十三條 第八條ノ組合ニ加入セスシテ水產物ノ營業ヲ爲シタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ其水產物ヲ沒收ス既ニ賣捌キタルモノハ其代金ヲ追徵ス

第十四條 此稅則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不倫罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第十五條 水產稅ノ納期及此稅則施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

附則

第十六條 從前現品定稅ヲ徵收シ又ハ現品稅ヲ徵收セス若クハ無稅ニシテ明治十五年ヨリ同十七年マテ三箇年間ノ產出高詳カナラサルモノハ當分其營業人各自ノ現產出高ニ就キ第六條ノ稅品拂下平均代價ヲ以テ價額ヲ定メ其百分ノ五ヲ稅金トシテ徵收スヘシ但明治二十年以後三箇年ヲ經過シタル上ハ大藏大臣ニ於テ本稅則ニ據リ改正スヘシ

第十七條 前條ノ營業人ニ關シ特ニ明文ヲ掲ケタルモノハ第十條ノ稅金ニ係ル事項ヲ除クノ外總テ此稅則ニ從フヘシ

第十八條 第十六條ノ營業人ニシテ其水產物ノ產出高ヲ偽リ進稅シタル者ハ其進稅高三倍ノ罰金又ハ科料ニ處シ其水產物ヲ沒收ス既ニ賣捌キタルモノハ其代金ヲ追徵ス但自首スル者ハ其稅金ヲ追徵シ其罪ヲ問ハス

第十九條 明治十年第五十六號布告同十七年第四號布告同年第十二號布告及從前北海道物產ニ關スル命令規則ハ此稅則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十二款 酢造稅

布告 明治十六年十二月 酢造營業者酢元ニ供スル爲メ酒類ヲ製造スル者ハ酒造稅則中第三條免許稅第四條第二項第三項ヲ除クノ外該稅則ニ準據スヘシ

第一項ニ從ヒ酒類ヲ製スル者酒類ヲ販賣シ又ハ檢査未済ノ酒類ヲ以テ酢ヲ製造スルヲ許サス犯ス者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ現在ノ酒類及ヒ酢ヲ沒收ス其已ニ賣捌キタル者ハ代價ヲ追徵ス
 第一項ニ從ヒ酒類ヲ製造スル者酢製成ノ上ハ管轄廳ニ届出ヘシ違フ者ハ壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十三款 賣藥稅

布告 明治十年一月 賣藥規則別冊ノ通相定候條此布告候事
 二十日第七號

賣藥規則

第一章

- 第一條 此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ調製シ効能書ヲ附シ販賣スルモノヲ云フ
- 第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法服量功能ヲ詳記シタル書ニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ
- 第三條 管轄廳ニ於テハ願書ヲ検査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ハラズ取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許ササルヘシ
- 第四條 藥味分量用法服量能書改正セント欲スルモノ其由ヲ届出管鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ
- 第五條 賣藥ヲ請賣セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タルモノハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持ノ免許鑑札寫及營業者ト取諾タル約定書トヲ添ヘ其管轄廳ヘ願出免許鑑札ヲ受クヘシ
- 第六條 賣藥營業者及請賣者共必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ
- 第七條 賣藥營業者及請賣者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ發出シテ行商ヲ爲サシメント欲スルトキハ其由ヲ管轄廳ヘ届出テ行商鑑札ヲ願受ク行商スルトキハ必ス之ヲ所持スヘシ
- 第八條 製藥第三條ニ掲グル處ノ有害品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノトアル時ハ直ニ鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルトアルヘシ
- 第九條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セラル、時ハ其請賣者及賣子共其販賣ヲ許サス
- 第十條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳ヘ届出再ヒ之ヲ願受クヘシ
- 第十一條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡セント欲ス者ハ双方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳ヘ鑑札名前書換ヲ請フヘシ

第十五條 賣藥營業者廢業シ若クハ禁止セラレタルトキハ營業者ハ勿論其請賣者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納スヘシ

第二章

第十六條 賣藥營業者ハ左ノ通り税金並ニ鑑札料ヲ上納スヘシ

賣藥營業税 藥劑一方ニ付 一ヶ年 金貳圓

右鑑札料 藥劑一方ニ付 一 枚 金貳拾錢

但第二條但書ニ依リ免許鑑札ヲ受ケル者ハ其箇所毎ニ本文ノ税金并鑑札料ヲ納ムヘシ

第十七條 水火盜難ニ因リ鑑札ヲ毀失シ更ニ新鑑札ヲ願受ケル時ハ其鑑札料ノ半高ヲ納ムヘシ

第十八條 税金ハ毎年兩度ニ區分シ前半年分ハ一月三十一日限リ後半年分ハ七月三十一日限リ鑑札料ハ其都度並ニ管轄廳ニ上納スヘシ

第十九條 税金ハ六月以前免許ノ者ハ全年分七月以後ノ半年分發業ノ者ハ七月以後ハ全年分六月以前半年分ヲ納ムヘシ

但第十條ノ有官品ナルヲ更ニ發見セシ時ニ限リ片割ヲ以テ税金ヲ納メシムヘシ

第三章

第二十條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ自ラ行商シ又ハ行商セシムル者及ヒ之ヲ貸ス者ハ其鑑札ヲ取上ケ藥劑

一万ニ付全五圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十一條 無鑑札又ハ鑑札ヲ借受ケ請賣スル者及ヒ無鑑札ノ者ヲシテ請賣セシメ又ハ鑑札ヲ貸ス者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付金十圓ノ罰金ヲ科スヘシ

第二十二條 免許ヲ受ケメシテ私カニ藥味分量用法服量能書等ヲ改更シ又ハ許可ヲ經メシテ無稽ノ妄說ヲ記載シ世人ヲ迷惑スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥ヲ没入シ藥劑一方ニ付十圓以上二十五圓以下ノ罰金ヲ科

第二十三條 無鑑札ニシテ營業スルモノ又ハ營業者ニシテ私ニ請賣者ニ藥劑ヲ調製セシムル者又ハ請賣者
 自ラ之ヲ調製スル者ハ其製藥及ヒ賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付二十五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘ
 第二十四條 諸鑑札ヲ偽造シ又ハ他人ノ膏藥ヲ偽造シテ發賣スル者ハ其製藥及ヒ其賣得金ヲ没入シ藥劑一方
 ニ付五十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ
 第二十五條 私ニ有製藥ヲ配伍スル者ハ其鑑札ヲ取上ケ製藥及ヒ其賣得金ヲ没入シ藥劑一方ニ付百圓以上
 五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ
 第二十六條 以上ノ犯則者ヲ見届ケ訴出ル者アル時ハ事實取札ノ上相違ナキニ於テハ其當トシテ其罰金ノ
 半高ヲ與フヘシ

布告 明治十五年十月二日 膏藥印紙稅規則左ノ通相定明治十六年一月一日ヨリ施行ス

膏藥印紙稅規則

第一條 膏藥ニハ必ズ定價ヲ付記シ其定價ニ從ヒ營業者ニ於テ左ノ割合相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ
 印紙稅ノ割合

一定價壹錢迄	印稅 壹厘
一全 貳錢迄	全 貳厘
一全 三錢迄	全 三厘
一全 五錢迄	全 五厘
一全 拾錢迄	全 壹錢
以上總テ五錢迄毎ニ五厘ヲ增加ス	

第二條 印紙種類ハ左ノ如シ

壹厘	淡黑色
貳厘	青色
三厘	黃色
五厘	茶褐色
壹錢	赭色
二錢	綠色
三錢	濃青色
四錢	橙黃色
五錢	紫色
拾錢	深紅色

第三條 印紙ハ藥品ノ容器又ハ包紙等ニ貼用シ營業者ニ於テ之ヲ消印スヘシ
 但印紙面ノ中心ヨリ他所ヘ掛ケ消印スヘシ

第四條 膏藥印紙ハ官ノ許可シタル賣捌所ニ限リ賣捌クベシトス

第五條 營業者ニシテ無印紙ノ藥品ヲ販賣シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ印紙不足ノ藥品ヲ
 發賣シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條 請賣者行商者ニシテ無印紙ノ藥品ヲ所持シ若クハ之ヲ販賣シタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ
 處シ印紙不足ノ藥品ヲ所持シ若クハ之ヲ販賣シタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 貼用印紙ニ消印セザル者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 印紙賣捌所ノ外ニ於テ印紙ヲ賣捌ク者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其品ヲ沒收ス其情
 ヲ知リテ之ヲ買受ケタル者ハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其品ヲ沒收ス(印紙貼用雜形畧ス)

第十四款 證券稅

第十四章 税則 證券稅

(四百十四)

布告 明治十七年五月 明治十七年第七第八十一號布告證券印稅規則別冊ノ通改正シ明治十七年七月一日ヨリ施行ス

但明治八年比第百二十號布告ハ同日ヨリ廢止ス

證券印稅規則

第一條 凡ソ財産ノ授受及ヒ契約ノ證明ニ用フル證書帳簿ハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 證書帳簿ヲ分テ二類ト爲シ其稅率ハ左ノ如シ

第一類

- 左ニ掲ケル所ノ證書帳簿ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラズ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ但當座預リ金引出小切手ハ大藏省ニ稅印ノ押捺ヲ請フコトヲ得
- 一 當座預リ金引出小切手 印稅 五厘
- 一 委任狀 同 五厘
- 一 金高記載ナキ約定證文 同 壹錢
- 一 遺物證文 同 壹錢
- 一 跡式讓證文 同 壹錢
- 一 讓與證文 同 壹錢
- 一 期限ヲ定メケル預金證文 同 壹錢
- 一 耕地小作證文 同 壹錢
- 一 雇人請合狀 同 壹錢
- 一 金高記載ナキ諸物品預リ證文 同 壹錢
- 一 金高記載ナキ諸物品借用證文 同 壹錢
- 一 地所預リ證文 同 壹錢
- 一 諸物品切手 同 壹錢

- 一 借入證文 同 壹錢
- 一 賣買仕切書 同 壹錢
- 一 保險證文 同 壹錢
- 一 諸會社株券 同 壹錢
- 一 送金手形 同 壹錢
- 一 送金通帳 同 壹錢
- 一 諸物品判取帳 同 廿錢
- 一 諸物品約定書 同 壹錢
- 但結社約定書ニ金圖授受貸借ニ係ル條項アリテ之カ効力ヲ確定スル證書帳簿ハ金高記載ナシト雖モ
- 第二類 金高記載アル諸般ノ契約證書ニ準シ印紙ヲ貼用スヘシ
- 左ニ掲ケル所ノ證書ハ金高五圓以上ノモノニ限リ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ
- 一 營業ニ關スル送狀 印稅 壹錢
- 一 營業ニ關スル請取書 同 壹錢
- 右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ都テ一年以内一冊ニ付壹錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ
- 第二類
- 左ニ掲ケル所ノ證書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但爲替手形約束手形ハ手形用紙ヲ用フヘシ
- 一 金錢借用證文
- 一 地所賣買證文
- 一 家屋賣買證文
- 一 金高記載アル諸物品預リ證文
- 一 金高記載アル諸物品借用證文
- 一 諸物品賣買證文

第十四章 税則 證券稅

(四百十五)

一 金銭定期預り書文	
一 金高壹圓以上貳拾圓未滿	印稅 壹錢
一 金高貳拾圓以上五拾圓未滿	同 貳錢
一 金高五拾圓以上百圓未滿	同 四錢
一 金高百圓以上百五十圓未滿	同 六錢
一 金高百五十圓以上貳百圓未滿	同 八錢
一 金高貳百圓以上三百圓未滿	同 拾壹錢
一 金高三百圓以上四百圓未滿	同 拾四錢
一 金高四百圓以上六百圓未滿	同 貳拾錢
一 金高六百圓以上八百圓未滿	同 貳拾六錢
一 金高八百圓以上千圓未滿	同 參拾貳錢
一 金高千圓以上千四百圓未滿	同 參拾八錢
一 金高千四百圓以上千七百圓未滿	同 四拾四錢
一 金高千七百圓以上貳千圓未滿	同 五拾錢
一 金高貳千圓以上貳千五百圓未滿	同 六拾錢
一 金高貳千五百圓以上三千圓未滿	同 七拾錢
一 金高三千圓以上三千五百圓未滿	同 八拾錢
一 金高三千五百圓以上四千圓未滿	同 九拾錢
一 金高四千圓以上	同 壹圓
右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ	印稅 四錢

一 金高百圓以上總テ諸證書税率ニ據ルヘシ	
一 金銭當坐預り書文	
一 貨物預り書	
一 金高一圓以上二十圓未滿	印稅 一錢
一 金高二十圓以上	同 二錢
右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ	
一 金高百圓未滿	印稅 二錢
一 爲替手形	同 四錢
一 荷爲替手形	
一 約束手形	
一 金高五十圓未滿	印稅 一錢
一 金高五十圓以上百圓未滿	同 二錢
一 金高百圓以上二百圓未滿	同 四錢
一 金高二百圓以上五百圓未滿	同 八錢
一 金高五百圓以上千圓未滿	同 十五錢
一 金高千圓以上二千圓未滿	同 二十五錢
一 金高二千圓以上	同 五十錢
第三條 前條ニ掲ケル所ノ證書帳簿ト効用ヲ同ニスルモノハ其名稱ニ拘ハラズ税率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ	
第四條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニシテ第五條ノ手續ニ循ヒ印紙ヲ貼用セザルモノハ民事裁判上之ヲ受理セス但處罰ヲ受ケル後印紙ヲ貼用シタルモノハ此限ニ在ラス	

第五條 印紙ハ證書ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ證書ハ授受ノ前帳簿ハ使用ノ前ニ貼用シ證書帳簿記名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ證書帳簿ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ消印スヘシ

第六條 印紙及ヒ手形用紙ノ種類定價ハ相違ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 印紙及ヒ手形用紙ハ官ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ非サレハ之ヲ賣捌クコトヲ得ス

第八條 印紙ヲ貼用スヘキ帳簿仕切書送り狀ハ主任官之ヲ検査スルコトアルヘシ

第九條 左ニ掲グル所ノ證書帳簿ハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セス

- 一 官廳ヨリ差出ス證書帳簿
- 一 官吏準官吏若クハ布告布達又ハ達ヲ以テ定メタル議員若クハ公立學校病院ニ從事スルモノ各其職務ニ依テ用フル證書
- 一 國庫金取扱所又ハ為換方ヨリ管廳ニ差出ス預リ金ニ對スル抵當證書
- 一 國庫金取扱所又ハ為換方ヨリ管廳ニ對シタル諸上納金ノ預リ證書帳簿
- 一 金員記載アル管廳ヨリノ命令書ニ對シ國庫取扱所又ハ為換方ヨリ差出ス請書
- 一 諸上納金ニ付國庫金取扱所又ハ為換方ヨリ納入ヘ差出ス請取證書
- 一 罹災救助金獻金寄附金ニ關シ人民ヨリ管廳ニ差出ス證書
- 一 切手、手形類ノ裏面ニ記載シタル受取書

第十條 第二類ノ帳簿ハ初丁ヘ附込見積金高及ヒ使用期限紙數ヲ記載スヘシ但物品ノ授受ニ關スルモノハ其代價ヲ記載スヘシ

第十一條 證書帳簿ニ稅率ノ異ナルモノヲ雜記スルトキハ各相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十二條 印紙貼用濟第一類ノ帳簿見積金高又ハ使用期限ノ滿チタルトキハ其旨該帳簿ニ記載シ置キ主任官検査ノ節之レニ檢印ヲ受クヘシ

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙之ヲ使用セントスルトキハ第十條ノ手續ヲ以テ更ニ正當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積金高米ダ滿チタルカ又ハ使用期限未ク盡キサルニ紙數盡キタルトキハ更ニ紙數ヲ増加スルコトヲ得此場合ニ於テハ其帳簿初丁見積金高又ハ期限ノ剩ニ其事由及ヒ増加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 證書帳簿ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルトキハ內國ノ貨幣ニ改算シタル金高ヲ附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十六條 取換セ證書ハ雙方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 證書ニ副證書ヲ附シ又ハ裏書等ヲ爲シ水證書ト効用ヲ異ニスルモノ若クハ金高ニ増減ヲ生スルモノハ其副書又ハ其裏書ニ款キ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十八條 此規則ヲ犯シ稅稅ニ係ルモノハ處罰ヲ受クル後證書帳簿ノ受取人ニ於テ相當ノ印紙ヲ貼用スルコトヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニ之ヲ貼用セス若クハ貼用不足スルモノ及ヒ手形用紙ヲ用ヒス若クハ不足稅ノ手形用紙ヲ用ヒタルモノハ稅稅高二十倍ノ料料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十條 第十八條ノ場合ヲ除ク外第五條ノ手續ニ據テ消印ヲ爲サス又ハ總ノ印ヲ以テ消印シタルモノハ印稅高十倍ノ料料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十一條 此規則ヲ犯シタル證書帳簿ニ諸人證入トシテ加印シタルモノハ各正犯ニ係ル料料罰金ノ半額ニ相當スル料料又ハ罰金ニ處ス

第二十二條 第八條ノ證書帳簿ノ検査ヲ拒ミタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯シタルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ料料ニ處ス

第二十五條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ沒收シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 前數條ノ罪ヲ犯シタルモノハ二ハ刑法ノ不倫罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發例ヲ用ヒス

第十五款 登記税

法律第十九年八月 朕登記法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布シム
登記法

第一章 總則

第一條 地所建物船舶ノ買賣讓與質入書入ノ登記ヲ爲ス者ハ本法ニ從ヒ地所建物ハ其所在地郡縣ハ其定界
場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ

已ニ登記ヲ受ケタル地所建物船舶ニ變更ヲ生シ又ハ亡失破壊シタルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ノ變
更又ハ取消ヲ請フ可シ

農商務省特許局ニ於テ登錄シクル特許意匠及商標ノ登記ハ本人ノ居住地ノ管轄スル登記所ニ於テ之ヲ爲
ス可シ

第二條 地所建物船舶ノ買賣讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトシ治守裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ郡區役所其他可
法大臣指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム

第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サル地所建物船舶ノ買賣讓與質入書入ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノト
ス

第七條 地所建物船舶ノ買賣讓與質入書入ニ付テ登記不可キ概目左ノ如シ
第一 地所ハ郡區町村名、字、番地、地目、反別若クハ坪數、地畧面ノ價格
第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造ノ種類、建坪雜作ノ有無
第三 西洋形船舶ハ汽船風帆船ノ區別船名番號登簿噸數公稱馬力汽機及汽錐ノ種類船名其他必要ノ所

屬品

第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、開數、端部其他必要ノ所屬品

第五 登記ノ事由

第六 金額

第七 質入書入ハ其期限及利息

第八 所有者及登記ヲ受ケル者ノ姓名住所

第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實

第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲ス
トキハ其事實

第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ハ契約者雙方又ハ其代理人登記所ニ出頭シテ之ヲ請求ス可シ

登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏ハ之ヲ受付帳ニ記載シ契約者ヨリ差出シタル書類ノ受取證ヲ下付ス可
シ

登記ヲ爲スニハ登記ノ番號ヲ記シ登記官吏之ニ署名捺印ス可シ

第九條 地所建物船舶ニ關スル憑証押留假借留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テハ裁判所ノ命令書
又ハ官廳ノ照會書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ

前項ノ記入ハ裁判所又ハ官廳ヨリ直ニ之ヲ求ム可シ

第十條 登記ハ第一條第二項第十五條第十六條第十七條及第十八條ヲ除クテ外契約者雙方ノ請求若
クハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消ス可トヲ得ス

第十一條 登記ノ請求又ハ取消又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ之ヲ請求スルコトヲ得

第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ格式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 賣買讓與

第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シテ其證書ヲ示シ其署名捺印シタル謄本一通ヲ差出ス可シ但第九條第十六條第十七條第十八條及第十九條ノ登記ニ付テハ證書ヲ示スノ限ニ在ラス

本條ノ謄本ハ登記簿ノ一部トシテ之ヲ添ヘ置ク可シ
證書ニ塗抹改竄アリテ利害關係人ノ承諾シタル謄本ヲ登記官吏ノ求ニ應シ請求者ヨリ之ヲ説明スルコト能ハサルトキハ登記官吏ハ登記ヲ拒絕スルコトヲ得

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示スヘシ
死亡者失踪者若クハ離縁戶主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ親屬二名以上又親屬ナキトキハ近隣ノ戶主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且證明書類アルモノハ之ヲ示ス可シ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ落札證書及其代金完納ノ證書ヲ示ス可シ

本條ノ登記ハ其處分ヲ爲シタル官廳ヨリ直ニ之ヲ求ム可シ本項ノ規定ハ第十七條及第十九條ノ場合ニモ亦之ヲ準用ス

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ併下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本書若クハ違書ヲ示ス可シ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其官廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ變賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶ノ賣買讓與ニ因リ地券鑑札ノ下付若クハ書換ヲ請フ者ハ登記所ヨリ登記簿ノ證書ヲ受ク可シ

第三章 賣入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ賣入書入ニ付テモ亦第十四條ヲ準用ス
貸借ノ爲ノニ非スシテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ賣入書入ト爲シ其登記ヲ請フ者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

第二十二條 賣入ノ地所建物船舶ヲ重テ書入ト爲ストキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ書入ト爲リタル地所ヲ賣入ト爲シ又賣入ト爲リタル地所ヲ書入ト爲ストキ亦同シ

第二十三條 賣入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付テモ亦第十四條ヲ準用ス

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付キ數個ノ登記ヲ爲ストキハ其登記ヲ請フ日時ノ前後ニ因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手数料

第二十五條 地所建物船舶賣買ノ登記ニ付テハ其賣受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ヲ納ム可シ

賣買代價	登記料
五圓未満	五錢
五圓以上拾圓未満	拾錢
拾圓以上貳拾五圓未満	貳拾五錢
貳拾五圓以上五拾圓未満	五拾錢
五拾圓以上百圓未満	壹圓
百圓以上貳百圓未満	貳圓
貳百圓以上三百圓未満	三圓
三百圓以上四百圓未満	四圓
四百圓以上五百圓未満	五圓
五百圓以上七百圓未満	六圓

七百五十圓以上千圓未満	七圓
千圓以上千五百圓未満	八圓
千五百圓以上貳千圓未満	九圓
貳千圓以上五千圓未満	拾圓
五千圓以上壹萬圓未満	拾貳圓
以上五千圓ヲテ毎二貳圓ヲ増加ス	

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ニ掲ケル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 地所建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入人書入人ハ第二十五條ニ掲ケル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ但一件ニ付テハ金五錢ヨリ下ヌコトヲ得ス

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第二十九條 第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物件ハ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第三十條 第九條第十六條第十七條及第十九條ノ場合ニ於テ處分ヲ爲シタル官廳ヨリ登記ヲ承ハルニハ登記料ハ登記印紙ヲ請求書ニ貼用シテ其官廳ニ納メシメ官廳ヨリ之ヲ登記所ニ送付スベシ

第三十一條 第十五條ノ登記ニ關シ地所ニ付テハ一箇毎ニ金三錢ヲ納メシメ建物船舶ニ付テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲ケル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ五分一ヲ納メシム但一件ニ付テハ金三錢ヨリ下ヌコトヲ得ス

第三十二條 第十五條第一項ノ場合ニ於テ家督相續ノ日ヨリ六十日ヲ經過シタル日ヨリニ付テハ讓與ノ登記料ヲ納ム可シ

第三十三條 左ニ掲ケル者ハ手数料トシテ金五錢ヲ納ム可シ

第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ每一件

第二 登記ノ勝手若クハ抜書ヲ請フ者ハ每一枚

第三 登記ノ覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲ケルモノハ登記料及手数料ヲ要セズ

第一 官廳ノ請求ニ係ル登記

第二 公立ノ學校病院、公園及養育院ニ係ル登記

第三 社寺、堂宇及墳墓地ニ係ル登記

第四 人民共有ノ用惡水路溜池敷地敷井溝敷及公衆ノ用ニ供スル道路ニ係ル登記

第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届出タル價格ヲ不相償ト認ムルトキハ其事件ニ關係ナキ者三名ヲ選ビ之ヲ評價人ト爲シテ其價格ヲ評定セシム可シ

第三十三條 評價人ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低價ナルトキハ該費用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五節 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減額シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ罰法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶質書入費手續同十三年第五十二號布告土地賣買讓渡規則同十四年第三十號布告地券封印稱則其他從前ノ法律規則中本法ニ抵触スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所賣買讓與地起返關連領下年期明等納テ地券下付費後ニ係ル手續及其手数料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四十條 登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ從來保有セル所有權ヲ明確ナラシメント欲スル者ハ管轄登記所ニ其所有權ノ登記ヲ請フコトヲ得
 右ノ登記ヲ請フ者ハ物件ヲ明示シタル請求書ニ其所有權ノ證明書類ヲ添ヘ之ヲ登記所ニ差出ス可シ但其所有權ヲ取得シタルコトヲ證スル證書ヲ其證明書トシテ差出ストキハ第十四條ヲ準用ス
 本條ノ登記ニ關シ地所ニ付テハ一筆毎ニ金壹錢ヲ納メシノ建物船舶ニ付テハ一筆毎ニ金壹錢ヲ納メシム
 第四十一條 登記所ハ初テ登記ヲ爲シタル地所ニ付テハ之ヲ其地ノ土地臺帳所管轄ニ通知シ其所管轄ヨリハ右ノ地所ニ付キ分合筆又ハ地番號及地目ノ變換アル毎ニ之ヲ登記所ニ通知ス可シ
 土地臺帳所管轄ハ明治二十二年勅令第三十九號ニ依リ登記所ヨリ所有ノ移轉又ハ貸入ニ付キ通知ヲ受ケタル地所ニ關シ前項ノ變換アルトキモ亦通知ヲ爲ス可シ
 登記所ハ前二項ノ通知ニ依リテ登記簿ニ其變換ノ旨ヲ追記ス可シ

勅令 明治二十六年十月 朕登記印紙規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 八月第六十六號 登記印紙規則

第一條 明治十九年(八月)法律第一號登記法ニ定メタル登記料及手数料ハ登記印紙ヲ以テ納付スヘシ
 第二條 登記印紙ハ登記法ノ定率ニ從ヒ登記ニ關スル請求ノ書面ニ貼用シ請求人記名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ書面ト印紙ノ彩紋トニカケテ消却スヘシ
 第三條 登記印紙ノ種類定價及其賣下ニ關スル手續ハ大藏大臣之ヲ定ム
 第四條 登記印紙ハ官廳ノ許可シタル賣捌所ノ外ニ於テ之ヲ賣捌クコトヲ得ス若其賣捌所ノ外ニ於テ之ヲ賣捌キタルモノハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ登記印紙ヲ買收シタルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第五條 前條規則ヲ犯シタルモノハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條 本規則ハ明治二十一年十二月一日ヨリ施行ス

第十六款 訴訟用印紙稅

法律 明治二十三年八月 朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟用印紙法

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
 第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ
 訴訟物ノ價額金五圓マテ 二十錢
 同 十圓マテ 三十錢
 同 二十圓マテ 六十錢
 同 五十圓マテ 一圓五十錢
 同 七十五圓マテ 二圓二十錢
 同 百圓マテ 三圓
 同 二百五十圓マテ 六圓五十錢
 同 五百圓マテ 十圓
 同 七百五十圓マテ 十三圓
 同 千圓マテ 十五圓
 同 二千五百圓マテ 二十圓
 同 五千圓マテ 二十五圓
 同 五千圓以上八千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ
 第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ
 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ
 訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ
 第四條 本條ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス
 第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ
 第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ
 第一 抗告
 第二 故障
 第三 證據調ノ申立
 第四 假差押及ヒ假處分ノ申請
 第五 判決ノ送達ヲランコトヲ求ムル申立
 第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數違ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印
 紙ヲ貼用ス可シ
 第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區
 裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ
 第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ
 第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ
 第十條 答辯書其他前收條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ
 第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其効
 ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効
 ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル
 第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ發賣スルコトヲ許サズ
 第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙
 ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス
 第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ル
 第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

第十七款 徵稅法

法律明治二十二年三月 朕國稅徵收法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 第十三日第九號 國稅徵收法

第一章 總則

第一條 國稅ハ關稅ヲ除ク外總テ此法律ニ據テ之ヲ徵收ス
 第二條 市町村ハ其市町村内ノ地租ヲ徵收シ之ヲ金庫ニ納付スルノ義務アルモノトス
 前項ノ事務ニ關スル費用ハ市町村ノ負擔トス
 第三條 其他ノ國稅ハ勅令ヲ以テ命スルトキハ前條ノ例ニ依ル
 前項ノ場合ニ於テハ徵收金額ノ百分ノ四ヲ其市町村ニ交付スヘシ
 第四條 市町村ハ過誤怠慢ニ依リ其徵收シタル稅金ヲ亡失シタルトキハ之ヲ辨償スルノ責ニ任スヘシ
 第五條 市町村ハ避ケヘカラサル變災ニ罹リ其徵收シタル稅金ヲ亡失シタルトキハ府縣知事ヲ經テ其責任
 ノ免除ヲ大藏大臣ニ訴願スルコトヲ得
 第六條 納稅人納期限ヲ過キ國稅ヲ完納セザルトキハ別ニ定ムル所ノ法律ニ據リ之ヲ處分ス
 第七條 國稅納期ノ末日日曜日又ハ大祭日祝日ニ當ルトキハ其翌日ヲ以テ納期ノ末日トス
 第二章 徵收

- 第八條 地租及勅令ニ依リ市町村ニ於テ徵收スヘキ國稅ヲ徵收スルトキハ市町村ニ對シ其他ノ國稅ヲ徵收スルトキハ各納稅人ニ對シ府縣知事徵稅令書ヲ發スヘシ
- 第九條 市町村長ハ徵稅令書ニ據リ徵稅傳令書ヲ調製シ之ヲ各納稅人ニ發スヘシ
- 第十條 納期アルモノハ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外該納期ノ十五日以前納期日ニ涉ルモノハ初時收入ニ係ルモノハ其納期日ヲ定メ徵稅令書若クハ徵稅傳令書ヲ發スヘシ
- 第十一條 第八條第一項ノ場合ニ於テハ各納稅人ハ稅金ヲ市町村收入收付拂込ニ其領收證ニ市町村長ノ檢印ヲ得テ納稅ノ義務ヲ了ルモノトス但市町村會ノ議決ヲ以テ町村長ニ收入役ノ事務ヲ委任スルコトヲ得
- 第十二條 市町村長ハ市町村收入役ニ於テ受領シタル稅金ヲ受取之ヲ金庫ニ拂込ニ其別府附領收證ヲ得之ヲ收入官吏ニ差出シ其別府ノ切離及領收證ノ檢印ヲ得テ其義務ヲ了ルモノトス
- 第十三條 市町村長ハ納期限ヲ過キ稅金ヲ完納セサル者アルトキハ其滞納ノ稅目金額及滞納人ノ住所氏名ヲ記載シ之ヲ收入官吏ニ報告スヘシ
- 第十四條 納稅人他ノ負債ニ依リ身代限りノ處分ヲ受ルトキ其既ニ徵稅令書ヲ發シタルモノアルトキハ未ダ其納期ニ至ラサルモ他ノ債主ニ先テ其稅金ヲ徵收スヘシ
- 第十五條 前條ノ場合ニ於テ負債ノ抵償物件中徵收ヲ要スル稅金ノ納期限ヨリ一箇年前ニ質入書入ト爲シタルモノアルトキハ其質却代金ヨリ先ツ其負債金額ニ充テタル後稅金ヲ徵收スヘシ
- 第十六條 地方稅備置儲蓄金市町村稅ヲ滞納シタル爲メ滞納者ノ財産ヲ賣却シタル場合ニ於テ既ニ徵稅令書ヲ發シタルモノアルトキハ國稅ヲ先取スヘシ

第三章 期滿免除

- 第十七條 徵稅令書若クハ徵稅傳令書ヲ發セスシテ納期限ノ翌日ヨリ起算シ滿三年ヲ經過スルトキハ納稅人ハ其義務ヲ免ルモノトス
 - 第十八條 納稅人法律命令ヲ犯シ脫稅ヲナシタル場合ニ於テ其公訴ノ期滿免除ト爲ルトキハ其脫稅金ノ追徵モ亦同時ニ免ルモノトス
 - 第十九條 國稅期滿免除ノ期限內ニ於テ徵稅令書若クハ徵稅傳令書ヲ發シタルトキハ期限ノ經過ヲ中斷スルモノトス
 - 期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタルトキハ更ニ其翌日ヨリ期限ヲ起算スヘシ但前後ノ日數ヲ通算シ滿五年ヲ過ルコトヲ得ス
- 第四章 附則
- 第二十條 市制町村制ノ施行ニ至ラサル地方ニ於テハ此法律ニ據リ市町村ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ
 - 第二十一條 此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ施行ス但沖繩縣及東京府管轄小笠原島伊豆七島ニハ當分ニ之ヲ施行セス
- 法律明治二十三年九月 朕府縣稅徵收法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 府縣稅徵收法
- 第一條 市町村ハ其市町村內ノ府縣稅ヲ徵收シ之ヲ府縣ニ納付スルノ義務アルモノトス
 - 地租割外ノ府縣稅ニ對シテハ其徵收金額ノ百分ノ四ヲ徵收費用トシテ其市町村ニ交付スヘシ但東京市京都市大阪市ハ此限ニ在ラス
 - 第二條 市町村ハ過誤怠慢ニ依リ其徵收金ヲ亡失シタルトキハ之ヲ辨償スルノ責ニ任スヘシ
 - 第三條 市町村ハ避クヘカテサル變災ニ罹リ其徵收金ヲ亡失シタルトキハ其責任免除ヲ府縣知事ニ訴願スルコトヲ得

- 第四條 府縣知事ハ前條ノ訴願ヲ受ルトキハ府縣事會ノ議決ヲ經テ責任ヲ免除スルコトヲ得
- 第五條 府縣稅ヲ徵收スルトキハ府縣知事又ハ其委任ヲ受ケタル命令者ハ市町村ニ對シ徵稅合書ヲ發シ市町村長ハ徵稅合書ニ依リ徵稅傳合書ヲ調製シ之ヲ各納稅人ニ交付スルモノトス
- 第六條 市長ニ於テ收入命令ノ委任ヲ受ケタル場合ニ於テハ徵稅合書ヲ直チニ各納稅人ニ交付スルコトヲ得
- 第七條 隨時徵收ノ府縣稅ハ府縣知事又ハ委任ヲ受ケタル命令者ニ於テ直チニ各納稅人ニ徵稅合書ヲ發スルコトヲ得
- 第八條 徵稅傳合書ヲ受ケタル各納稅人及徵稅合書ヲ受ケタル市町村ノ各納稅人ハ稅金ヲ市町村ノ收入役ニ拂込シ其領收證書ニ市町村長ノ捺印ヲ得テ納稅ノ義務ヲ了ルモノトス
- 市町村ハ其徵收シタル稅金ヲ府縣出納吏ニ納付シ其領收證書ヲ得テ義務ヲ了ルモノトス
- 第七條ニ依ル各納稅人ハ稅金ヲ府縣出納吏ニ納付シ其領收證書ヲ得テ納稅ノ義務ヲ了ルモノトス
- 第九條 納稅人他ノ負債ニ依リ身代限ノ處分ヲ受ケルトキ其既ニ徵稅合書ヲ發シタルモノアルトキハ國稅徵收法第十四條第十五條ノ例ニ依リ國稅ニ次テ府縣稅ヲ徵收スヘシ
- 第十條 國稅若クハ市町村稅ヲ滯納シタル爲メ滯納者ノ財産ヲ賣却シタル場合ニ於テ既ニ徵稅合書ヲ發シタルモノアルトキハ市町村稅ニ先テ府縣稅ヲ徵收スヘシ
- 第十一條 府縣稅納稅義務ノ期滿免除ハ國稅ノ例ニ依ル
- 第十二條 町村制ヲ施行セザル地方ニ於テハ此法律ニ依リ町村ノ爲メ職務ハ戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ
- 第十三條 此法律ニ關スル細則ハ府縣會ノ決議ヲ經テ府縣知事之ヲ定ムヘシ
- 第十四條 府縣制施行ニ至ル迄ノ間ハ此法律ハ地方稅ノ徵收ニ適用ス
- 第十五條 此法律ハ明治二十四年度所屬ノ徵稅ヨリ之ヲ施行ス

第十五章 備 荒 儲 蓄

佈告明治三十三年六月十日 備荒儲蓄法別紙ノ通相定來ル三十三年度明治十四年一月一日ヨリ施行條明治八年七月第二十二號達窮民一時救助規則及同十年九月第六十二號佈告凶爲起稅延納規則ハ右施行ノ期日ヨリ廢止トス此旨布告候事

備荒儲蓄法

- 第一條 備荒儲蓄金ハ非常ノ凶荒不慮ノ災害ニ罹リタル窮民ニ食料小屋掛料農具料種穀料ヲ給シ又罹災ノ爲メ地租分限ルヲ納ムル能ハサル者ノ租額ヲ補助シ或ハ貸與スルモノトス
- 第二條 備荒儲蓄金ヲ分ツテ中央儲蓄金府縣儲蓄金ノ二トス
- 中央儲蓄金ハ明治二十二年年度迄ノ中央儲蓄金及ヒ之ヨリ生スル利殖金ヲ以テ成立スルモノトス
- 府縣儲蓄金ハ明治二十二年年度迄ノ府縣儲蓄金及ヒ之ヨリ生スル利殖金ヲ以テ成立スルモノトス
- 第三條 中央儲蓄金ハ國庫ニ備置キ大藏大臣之ヲ管理シ府縣儲蓄金ノ補助ニ充ツヘキモノトス
- 第四條 府縣儲蓄金ノ管守支給及ヒ利殖ノ方法ハ府縣知事之ヲ府縣會ニ付シ其議決ヲ販リ內務大藏兩大臣ニ具狀シ其許可ヲ得テ之ヲ施行スヘシ
- 第五條 (削除)
- 第六條 府縣會ニ於テ議決スル儲蓄金支給ノ方法ハ左ノ制限ヲ越コヘカラス
- 第一 食料ヲ給スルハ罹災ノ爲メ自ラ生存スル能ハサル者ニ限ル其日數ハ三十日以内トス又同上ノ窮民ニ小屋掛料ヲ給スルハ一戸拾圓以内農具料種穀料ヲ給スルハ一戸貳拾圓以内トス
- 第二 地租ヲ補助及ヒ貸與スルハ罹災ノ爲メ土地家屋ヲ賣却スルニアラサレハ地租ヲ納ムル能ハサル者ニ限ル
- 第七條 各府縣窮民ノ救助地租ノ補助及ヒ貸與ノ金額府縣ノ儲蓄金百分ノ五以上ヲ供用支出スルハ府知事縣令ノ具申ニ依リ內務大藏兩卿ノ協議ヲ以テ中央儲蓄金ヨリ補助スヘシ
- 第八條 從前人民公儲ノ儲蓄金アル府縣郡區町村ハ之ヲ以テ今般施行セル所ノ備荒儲蓄金ニ補充スルコトヲ得

第九條 各府縣内儲蓄金ノ出納ハ大藏卿歳次或ハ臨時ニ之ヲ検査スヘシ

第十條 府縣知事ハ府縣儲蓄金ノ出納決算ヲ翌年度通常府縣會ノ初メニ於テ府縣會ニ報告シ仍ホ内務大藏
兩大臣ニ報告スヘシ

大藏大臣ハ每年中央及ヒ府縣儲蓄金ノ出納決算ノ要領ヲ告示スヘシ

第十一條 此方法ハ貳拾ヶ年間施行スルモノトス滿期ノ後ニ至リ各府縣ニ存在スル儲蓄金ハ府縣會ノ議決
ヲ以テ其保存方法ヲ定ムヘシ

附則

本法改正ノ爲メ府縣儲蓄金明治二十三年度内ニ於テ施行スヘキ利殖ノ方法ヲ定メ及ヒ收入豫算又ハ管守
支給ノ方法ニ改正ヲ要スルトキハ府縣知事ハ常置委員會ニ付シ之ヲ議決セシムルコトヲ得

第十六章 交通

第一款 郵便

第一節 普通郵便

布告 明治十五年十二月 郵便條例別冊ノ通制定シ明治十六年一月一日ヨリ施行ス

郵便條例

第一章 郵便物

第一條 凡郵便物別テ四種ト爲ス

- 一 書狀
- 二 郵便葉書及往復葉書
- 三 毎月一回以上發行スル定時印刷物及其附録

四 書籍、帳簿、名種ノ印刷物、寫真、書畫、繪圖、郵紙、營業品ノ見本及雜形、農産物種子

第二條 何品ヲ問ハス此條例ニ抵觸セサルモノハ第一種郵便物トナスヲ得

第三條 封緘シタル郵便物ハ第一種郵便物トナスヘシ

第四條 第二種郵便物ヲ他種ヲ郵便物ト合装スルトキハ總テ第一種郵便物トナスヘシ

第五條 第二種郵便物左ニ記載シタル所爲アルトキハ第一種郵便物トナスヘシ

- 一 截斷又ハ破却シタルモノ
- 一 税額印面ニ文字ヲ書シタルモノ
- 一 税額印面ニ郵便切手ヲ貼付シタルモノ
- 一 紙(配達又ハ返戻ノ爲ニスルモノヲ除ク)其他ノ品ヲ貼付シタルモノ
- 一 一葉ヲ折り之ヲ全ク糊著シ又ハ數葉ヲ合セ之ヲ全ク糊著シタルモノ
- 一 表面ニ音信文ヲ記載シタルモノ

第六條 第三種郵便物ハ其發行人ヨリ定時印刷物タルヲ證シテ郵便總局ノ認可ヲ受ケ郵便總局認可ノ文字ヲ
印刷スヘシ但其文字標題番號及發行ノ年月日ヲ見易カラシムヘシ

其附録ハ其本紙ノ標題番號及發行ノ年月日ヲ印刷シ冊子トナサスシテ本紙ニ添付シ且本紙ノ重量ニ超過
セサルモノニ限ルヘシ

第七條 第三種第四種郵便物ハ封緘セサルモノトス

第八條 第三種第四種郵便物ニ音信文又ハ暗號隱語ヲ筆書スルトキハ第一種郵便物トナスヘシ

第九條 營業品ノ見本及雜形ハ雙方又ハ一方營業者ト往復スルモノニ限ルヘシ

第十條 營業者ニアラサルモノノ間ニ往復スル見本及雜形ハ第一種郵便物トナスヘシ

第十一條 異種ノ郵便物ヲ合装スルトキハ總テ其種類中高額税ヲ課スヘキ郵便物トナスヘシ但第四條ニ記
載シタルモノハ此限ニアラス

第十二條 郵便物ノ重量ハ郵便切手封皮帶紙ノ重量ヲ合算スルモノトス

第十三條 第三種第四種郵便物(營業品ノ見本及雛形ヲ除ク)ハ一個重量三百目ニ超過スヘカラス

第十四條 營業品ノ見本及雛形ハ一個ノ重量百目ニ超過スヘカラス

第十五條 郵便物ノ大サハ曲尺ニテ長一尺二寸幅八寸厚五寸ニ超過スヘカラス

第十六條 左ニ記載シタルモノハ郵便物トナスヘカラス

- 一 毒藥劇藥燐燐燒シ易キ物品
- 一 流動物流動腐敗シ易キ物鮮化スヘキ物動物植物鋒刃器硝子器陶器等他ノ郵便物ヲ傷害スヘキ物品
- 一 但十分ノ豫防ヲ爲シ郵便局若クハ郵便受取所ノ承認ヲ受ケタル後郵便ニ差出マモノハ此限ニアラス
- 一 風俗ヲ害スヘキ文書 書圖 寫真及物品
- 一 金銀 寶玉
- 一 貨幣但第十章ノ規則ニ從フモノハ此限ニアラス

第二章 郵便税

第十七條 郵便税ハ郵便物ノ種類ニ從ヒ其額ヲ定ム

第一種郵便物 重量ニ毎毎ニ(二匁未滿亦同シ)

第二種郵便物 葉書一葉 往復葉書一葉

第三種郵便物 一號一個重量十六匁毎ニ(十六匁未滿亦同シ) 二號又ハ二個以上一束重量十六匁毎ニ(十六匁未滿亦同シ)

第四種郵便物 重量三十匁毎ニ(三十匁未滿亦同シ) 一錢 五厘 二錢

第十八條 郵便税ハ郵便物ノ種類ニ從ヒ其額ヲ定ム 紙ハ切手ヲ貼付シタルト同股ナリトス但驛遞總監ト約定アルモノハ此限ニアラス

第十九條 納税ニ用ヒタル郵便物ノ種類ニ從ヒ其額ヲ定ム 紙ハ切手ヲ貼付シタルト同股ナリトス但驛遞總監ト約定アルモノハ此限ニアラス

第二十條 郵便税ニ過納アルモモ己ニ其税額印面ニ消印シタル後ハ之ヲ還付セス

第二十一條 未納税又ハ不足税ノ郵便物ハ受取人ヨリ其額ノ二倍ヲ徴收スヘシ

受取人其郵便物ヲ受取リタルトキハ其納税ヲ拒ムヘカラス

第二十二條 未納税又ハ不足税ノ郵便物配達シ能ハス差出人ニ還付スルトキハ其額ノ二倍ヲ徴收スヘシ差出人ニ係ル未納税又ハ不足税ノ郵便物ヲ差出人ニ還付スルトキ亦同シ

第二十三條 第十三條第十四條第十五條ニ背反スル郵便物ヲ差出人ニ還付スルトキハ未納税又ハ不足税ノ二倍ヲ徴收スヘシ

第二十四條 人民ヨリ官廳ニ差出ス郵便物ハ郵便税完納ニ限ルヘシ未納税又ハ不足税ノモノハ差出人ニ還付シ其額ノ二倍ヲ徴收スヘシ

第二十五條 未納税又ハ不足税ヲ徴收スルトキハ郵便局ニ於テ郵便物ヲ貼付シ其切手ニ捺印ス

ハ不足ノ印ヲ捺シ其證トナスヘシ

第三章 郵便切手封皮葉書往復葉書帶紙 (略之)

第四章 免稅郵便 (略之)

第五章 書留郵便

第四十四條 書留郵便物ハ郵便局ノ帳簿ニ登記シ運送配達ノ受授ヲ證スルモノトス

第四十五條 書留手數料ハ郵便物ノ何種ニ拘ハラス六錢トス

第四十六條 書留郵便物ハ郵便税手數料共前納ニ限ルヘシ

第四十七條 書留手數料ハ郵便物ノ種類ニ從ヒ其額ヲ定ム 紙ハ切手ヲ貼付シタルトキハ其額ノ二倍ヲ徴收スヘシ

第四十八條 書留郵便物ヲ差出ストキハ其表面ニ書留ト記載シ郵便局若クハ郵便受取所ニ於テ之ヲ主務者ニ交付シ印刷シタル式紙ニ郵便局若クハ郵便受取所ノ印及主務者ノ印ヲ捺セル受取證書ヲ受領スヘシ

第四十九條 書留郵便物ノ配達ヲ受ケタルモノハ其差出人及受取人ノ氏名配達ノ年月日ヲ記シタル受取證書ニ調印スヘシ本人不在ナルトキハ其代人記名調印スヘシ

第五十條 免稅郵便物ハ書留手數料ヲ納ムルニ及バズ

第六章 郵便物遞送配達 (略之)

第七章 別配達郵便

第七十四條 別配達郵便物ハ書留郵便ニ限ルモノニシテ通常配達ノ例ニ拘ハラズ別ニ急速ノ配達ヲナスモノトス

第七十五條 別配達別テ二類ト爲ス

一 市内(郵便局所左地)別配達

一 市外(郵便局未設地)別配達

第七十六條 市内別配達料ハ東京京都及大阪ハ十錢其他ノ市内ハ六錢トス

第七十七條 市外別配達料ハ配達ノ郵便局ヨリ受取人ノ住所ニ至ル路程ニ應シ十八町毎ニ六錢トス十八町未滿亦同シ

第七十八條 別配達ハ郵便稅並別配達料共前納ニ限ルヘシ

第七十九條 別配達料ハ郵便切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス

第八十條 市外別配達ハ配達地ニ到リ路程ノ差違ニ因テ其料ニ不足ヲ生スルモ其料六錢以上納濟ノモノハ仍ホ別配達トシテ取扱ヒ受取人ヨリ其不足額ヲ徵收スヘシ

第八十一條 市外別配達料不足額ヲ徵收スルトキハ郵便局ニ於テ郵便切手ヲ郵便物ニ貼付シ其切手ニ不足ノ印ヲ捺シ其證トナスヘシ

第八十二條 船舶ニ達スル別配達ハ其船舶ノ碇泊所ニ從ヒ別配達料ノ外相當ノ舢艫料ヲ受取人ヨリ徵收スヘシ

第八十三條 市外別配達料不足額又ハ舢艫料ヲ受取人ニ於テ納メサルトキハ其郵便物ヲ受取ルヲ得ス其郵便物ハ差出人ニ還付シ其額ヲ徵收スヘシ

第八十四條 別配達郵便物ヲ受取リタルモノハ市外別配達料不足額又ハ舢艫料ノ納付ヲ拒ムヘカラス

第八十五條 別配達ハ各郵便局ノ配達區域ニ拘ハラサルモノトス

第八十六條 甲郵便局所在地ニ達スルモノヲ乙郵便局ヨリ配達スルトキハ市外別配達トナスヘシ

第八十七條 市内別配達ハ其郵便物ノ表面ニ別配達ト記載スヘシ

第八十八條 市外別配達ハ其郵便物ノ表面ニ何地郵便局ヨリ別配達ト記載スヘシ若シ其郵便局ヲ定メ難キトキハ單ニ別配達トシ記載スヘシ

第八十九條 別配達トシ記載セルモノハ各郵便局ノ配達區域ニ從ヒ其地ノ郵便局ヨリ配達スヘシ

第九十條 別配達郵便物受取人移轉シ其移轉先ニ達スルトキハ別配達トセスシテ配達スヘシ

第九十一條 免稅郵便物ハ別配達料舢艫料ヲ納ムルニ及バズ

第八章 郵便私書函 (略之)

第九章 留置郵便

第九十九條 留置郵便物ハ表記地名ノ郵便局ニ留置キ受取人ヲ待テ交付スルモノトス

第一百條 留置郵便物ハ其表面ニ何地郵便局留置ト記載スヘシ

第一百一條 留置郵便物ヲ受取ルモノハ其受取人タルヲ書面或ハ口頭ヲ以テ證スヘシ

第一百二條 留置郵便物ハ郵便稅完納ニ限ルヘシ

第一百三條 未納稅又ハ不足稅ノ郵便物ヲ留置トナストキハ之ヲ差出人ニ還付シ其額ノ二倍ヲ徵收スヘシ

第一百四條 留置期限ハ九十日ニ限ルヘシ

留置期限内ニ郵便物ヲ受取ラサルトキハ之ヲ差出人ニ還付スヘシ

第十章 貨幣封入郵便 (略之)

第十一章 郵便爲替 (略之)

第十二章 郵便爲替

第一百二十九條 郵便爲替ハ驛選總官ノ指定スル郵便局ニ於テ取扱フモノトス

第一百三十條 爲替ヲ取扱フ郵便局ハ驛選總官新聞紙ヲ以テ公告スヘシ

第三百三十一條 爲替證書一枚ノ金額ハ三拾圓以下トシ端數ハ厘位ヲ限リトス

第三百三十二條 爲替料ハ驛遞總官之ヲ定メ新聞紙ヲ以テ公告シ及爲替ヲ取扱フ郵便局ニ揭示スヘシ

第三百三十三條 同一ノ差出人ヨリ同一ノ受取人ニ宛テ同一ノ郵便局ニ於テ拂渡スヘキ爲替ノ振出ハ一日金額三拾圓ニ超過スヘカラス

第三百三十四條 爲替差出人ハ郵便局ニ設ケアル爲替願書用紙ニ式ノ如ク記載調印シ爲替金及爲替料ト共ニ先ツ之ヲ主務者ニ交付シ後ニ爲替證書ヲ受領スヘシ

第三百三十五條 爲替證書ハ其差出人ヨリ受取人ニ送付スヘシ

第三百三十六條 爲替差出人ハ其振出局ニ爲替金ノ返戻ヲ請求スルヲ得但爲替料ハ返付セス

第三百三十七條 爲替受取人其爲替證書ニ記載シタル拂渡局ニテ爲替金ヲ受取ルニ不便ナルトキ又爲替差出人其振出局ニ爲替金ノ返戻ヲ請求スルニ不便ナルトキハ驛遞局ニ其證書ヲ納付シテ書換ヲ請求シ更ニ爲替金ヲ受取ルニ便ナル局ニ宛テタル證書ヲ受クルヲ得

第三百三十八條 爲替金ノ拂渡及返戻ハ其爲替證書ト引替ニ限ルヘシ但郵便局ニ於テ證人ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムヘカラス

第三百三十九條 爲替受取人ハ其爲替證書ニ式ノ如ク記名調印スヘシ爲替差出人爲替金ノ返戻ヲ受ルトキ亦同シ

第四百十條 爲替報知書ニ記載セル諸件ヲ明瞭ニ答ヘ能ハサルモノハ其爲替金ヲ受取ルヲ得ス

第四百十一條 代人ヲ以テ爲替金ヲ受取ル者ハ其爲替證書ノ裏面ニ委任文ヲ記載シ記名調印シ且代人ハ第百二十九條ノ手續ヲナスヘシ

第四百十二條 官衙社寺會社ニ宛テタル爲替金ヲ受取ルトキハ其爲替證書ノ裏面ニ官衙社寺會社ノ名稱ヲ記シ其印ヲ捺シ且之ヲ受取ル所屬人ハ第百三十九條ノ手續ヲナスヘシ

第四百十三條 官衙社寺會社ノ受取ルヘキ爲替金ニシテ其官衙社寺會社ノ名稱ヲ附記シ其所屬人ニ宛テタルトキ宛名人自ラ受取ル能ハス又第百四十一條ニ依ル能ハサルトキハ第百四十二條ニ依ルヲ得

第四百十四條 官衙社寺會社若クハ其所屬人ノ名ヲ以テ差出シタル爲替金ノ返戻ヲ受クルトキモ第百四十二條第百四十三條ノ手續ニ依ルヘシ

第四百十五條 爲替證書ノ効用ハ其證書ノ日附ヨリ百二十日ヲ限リトス

第四百十六條 効用ヲ失ヒタル爲替證書ハ差出人又ハ受取人ヨリ驛遞局ニ納付シ其書換ヲ請求スヘシ

第四百十七條 爲替證書ノ効用ヲ失ヒタル日ヨリ二ケ年以内ニ其書換ヲ請求セザルトキハ驛遞總官新聞紙ヲ以テ公告スベシ

其公告ノ日ヨリ三ケ年以内ニ爲替證書ノ書換ヲ請求スルトキハ其爲替金十分ノ一ヲ手数料トシテ徵收スヘシ其公告ノ日ヨリ三ケ年ヲ過ルモ尚ホ其爲替證書ノ書換ヲ請求セザルトキハ其爲替金ヲ没入スヘシ

第四百十八條 爲替證書ヲ失ヒタルトキ又ハ汚損毀損シ判明ナラザルトキハ差出人ニ於テ證人ヲ立テ驛遞局ニ其事由ヲ證明シ更ニ再度ノ證書ヲ請求スヘシ

第四百十九條 爲替金ヲ返戻シ又ハ證書ヲ書換ヘ或ハ再度ノ證書ヲ交付スルハ其原證書ニ對スル報知書ヲ取戻シタル後ニ限ルヘシ

第四百二十條 爲替證書ノ書換又ハ再度ノ證書ヲ請求スルトキハ更ニ相當ノ爲替料ヲ納ムヘシ但郵便遞送中ニ生シタル事故ニ因ルモノハ更ニ爲替料ヲ納ムルニ及ハス

第四百二十一條 再度ノ爲替證書ヲ受領シ後前キニ失ヒタル爲替證書ヲ見出シタルトキハ之ヲ驛遞局ニ納付スヘシ

第四百二十二條 爲替資金ノ都合ニ因リ爲替金ノ渡方順延スルコトアルヘシ

第四百二十三條 爲替證書又ハ報知書ニ失誤アルカ或ハ其報知書未達ノトキハ爲替金ノ拂渡ヲ延引スヘシ

第四百二十四條 爲替金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印稅ヲ納ムルニ及ハス

第四百二十五條 郵便爲替ニ事故ヲ生シ損失ヲ受クルモノアルモ驛遞局ハ之ヲ償フノ責ニ任ヒス

第四百二十六條 此章ノ規則ニ從ヒ爲替金ヲ渡シタル後ハ其渡方ニ就キ異議ヲ唱フルモ驛遞局ハ其責ニ任セス

第十三章 郵便局貯金 (削除)

第十四章 外國郵便 (略之)

第十五章 罰則

- 第二百二十七條 第十六條第三十三條第三十四條第六十九條第七十條第二百十四條ヲ犯シタルモノハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二百二十八條 第五十四條第六十三條第六十四條ヲ犯シタルモノハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第二百二十九條 第五十七條第五十八條ヲ犯シタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二百三十條 第六十七條ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 遞送配達ヲ以テ營業トナスモノハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二百三十一條 第六十八條第二百二十三條ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二百三十二條 懈怠故意ヲ問ハス第七十一條第七十二條ヲ犯シタルモノハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二百三十三條 郵便封皮策書往復策書帶紙ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタルモノハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二百三十四條 已レニ屬セサル郵便物ヲ開封シ又ハ毀損汚穢シ或ハ私用賣却押留隱匿拋棄シ若クハ之ヲ受取人ニアラサルモノニ交付シ及其情ヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲナシタルモノハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 郵便事務ヲ奉スルモノ自ラ犯シタルトキハ官吏傭人約定人ヲ論セス本刑ニ一等ヲ加フ
- 第二百三十五條 郵便事務ヲ奉スルモノ自己若クハ他人ノ爲メニスルヲ問ハス郵便物ヲ不當ノ方位ニ運送シタルトキハ第二百三十四條第一項ノ刑ニ一等ヲ加フ
- 第二百三十六條 踰度懈怠ニ因テ郵便物ヲ失ヒタルモノハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 書留郵便ニ係ルキハ二圓以上五圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二百三十七條 有稅ヲ以テ免稅トシ其他詐偽ヲ以テ郵便稅ヲ免レタルモノハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ

- 處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 郵便事務ヲ奉スルモノ自ラ犯シ又ハ情ヲ知テ其郵便物ヲ遞送配達シ或ハ自己ノ受ケタル郵便物ノ未納稅又ハ不足稅ヲ免レタルトキハ本刑ニ一等ヲ加フ
- 第二百三十八條 不良ノ事ヲ行ハンカ爲ノ郵便ヲ用ヒタルモノハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 行フ所不良ノ罪重キモノハ重キニ從テ論ス
- 第二百三十九條 驛遞總官ノ認可ヲ得ズシテ郵便物ニ驛遞局認可ノ文字ヲ用ヒタルモノハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 郵便物運送ニ使用セサル船車ニ郵便ノ記章又ハ郵便ノ文字ヲ用ヒタルモノ亦同シ
- 第二百四十條 未納稅又ハ不足稅及別配運料貯給料貨幣遞送配達貨私書函貸與料ヲ五日內ニ納メサルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 郵便事務ヲ奉スルモノ徵收スヘキ郵便稅別配運料貯給料貨幣遞送配達貨私書函貸與料ヲ徵收セサルトキ亦同シ
- 第二百四十一條 郵便事務ヲ奉スルモノ郵便物ニ貼用セル郵便切手ヲ剝取ルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 其未タ消印ヲナサ、ル切手ヲ剝取ルモノハ刑法竊盜ノ本條ニ照シテ處斷ス
- 第二百四十二條 郵便爲替事務ヲ奉スルモノ郵便爲替金及爲替料ヲ領收セズシテ爲替證書ヲ振出シ又ハ爲替證書ヲ受取ラスシテ爲替金ヲ渡シタルトキハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二百四十三條 郵便事務ヲ奉スルモノ諸般ノ計數ヲ偽ルトキハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二百四十四條 郵便物ニ押用セル印面ヲ變換シタルモノハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十五條 郵便配達人配達先ニ於テ謝儀ヲ要求シタルトキハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二百四十六條 郵便函郵便行囊其他郵便ノ器械ヲ毀損汚穢シタルモノハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十七條 渡船人郵便物ノ渡津ヲ怠慢遅緩シタルトキハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二百四十八條 第二百三十三條第二百三十七條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサルモノハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百四十九條 第二百三十條第二百三十三條第二百三十七條第二百四十一條第二百四十二條第二百四十三條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スルモノハ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス

第二百五十條 本章罰則ノ外刑法ニ正條アル者ハ刑法ニ據テ處斷ス

第二節 小包郵便

法律 明治二十五年六月 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル小包郵便法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小包郵便法

第一條 何等ノ物品ヲ問ハス左ニ記載スルモノヲ除ク外ハ小包郵便物トシテ之ヲ郵便ニ差出スコトヲ得

第一 郵便條例第十六條第一項乃至第三項ノ物品但シ第二項ノ物品ハ郵便局ノ承認ヲ受ケテ郵便ニ差出スコトヲ得

第二 信書又ハ信書ノ性質ヲ有スルモノ若ハ音信文記入ノ物品

第二條 小包郵便物ハ郵便料ノ外ニ保險料ヲ納付シテ之ヲ價額登記ノ小包郵便物ト爲スコトヲ得但シ其價額ハ實價ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條 小包郵便物ヲ其ノ受取人ニ交付セス又ハ差出人ニ還付セサル前ニ生シタル損害ニ付テハ政府其ノ賠償ノ責ニ任ス

第四條 小包郵便料、保險料、賠償金額並ニ小包郵便物ノ容積重量及價額登記ノ制限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 左ノ場合ニ係ル損害ハ政府其ノ賠償ノ責ニ任セス

第一 天災其ノ他避クヘカラサル事變ニ因ルトキ

第二 物品自己ノ性質ニ因ルトキ

第三 差出人ノ過誤怠慢ニ因ルトキ

第四 本法郵便條例及其ノ施行ニ關スル命令ヲ遵守セスシテ郵便ニ差出シタルトキ

第六條 小包郵便物配達ノ際其ノ外部ニ破損ノ痕迹ナク且重量ニ變更ナキトキハ政府損害賠償ノ責ニ任セス受取人若ハ差出人ニ於テ異議ナク該郵便物ヲ受領シタルトキ亦同シ

第七條 小包郵便物損害ニ對スル賠償ノ請求ハ其ノ郵便物ノ差出人ヨリ逕信大臣ノ指定スル郵便局ニ之ヲ爲スヘシ此ノ場合ニ於テハ郵便料ノ返付ヲ請求スルコトヲ得但シ其ノ請求期限ハ郵便物差出ノ日ヨリ三箇月トス此ノ期限ヲ經過スルトキハ政府其ノ責ヲ免ル

第八條 賠償又ハ郵便料ノ返付ニ關シ郵便局ノ通知ヲ受ケ之ニ不服アル者ハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ二箇月以内ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條 政府賠償ヲ爲シタルトキハ其ノ郵便物若ハ損害ニ付賠償受領者ノ有スル所有權若ハ第三者ニ對スル請求權ヲ當然承継ス但シ亡失シタル郵便物ヲ發見シタル場合ニ於テ差出人ハ受領シタル賠償金及郵便料ヲ返納シテ其ノ物品ノ還付ヲ請求スルコトヲ得其ノ請求期限ハ亡失郵便物發見ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ二箇月トス

第十條 郵便事務ニ關シ郵便官署ノ間相互遞送スル小包郵便物ノ郵便料ヲ免除ス

第十一條 小包郵便物ノ轉送又ハ還付ニ對スル郵便料ヲ納メサル者及之ヲ徵收セサル者ハ郵便條例第二百四十條ノ例ニ據リ之ヲ處斷ス

第十二條 第一條第二項掲グルモノヲ小包郵便物トシテ差出シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六章 交通 郵便 小包郵便

第十三條 本法ノ施行細則ハ逓信大臣之ヲ定ム

第十四條 本法及其ノ施行ニ關スル命令ニ明文ナキ事項ハ郵便條例ヲ準用ス

附則

第十五條 此ノ法律ハ明治二十五年十月一日ヨリ施行ス

逓信省令 明治二十五年九月二十七日第十三號 小包郵便法施行細則左ノ通相定メ明治二十五年十月一日ヨリ施行ス

小包郵便法施行細則

第一章 總則

第一條 小包郵便物ノ取扱ハ特ニ指定シタル郵便局郵便受取所ニ限ルヘシ

第二條 小包郵便物ハ差出人ノ望ニ依リ配達證明又ハ別配達又ハ留置トナスコトヲ得

但小包郵便ヲ取扱ハサル郵便局ノ區内ニ向テ別配達ヲ請求スルコトヲ得ス

配達證明又ハ別配達ハ一般ノ規則ニ依リ別ニ相當ノ手数料ヲ徴收ス

第三條 小包郵便物ヲ取扱ハサル郵便局ノ區内ニ向テ小包郵便物ヲ送ラントスルトキハ最寄取扱局特別留

置トナシテ之ヲ差立ルコトヲ得

第二章 差出

第四條 小包郵便物ハ表面ニ小包ト記載シ小包郵便取扱局所ニ差出シ其受取證書ヲ受クヘシ

郵便函ニ投入シタルモノハ小包ノ文字ヲ記シタルモノト雖モ之ヲ小包郵便物ト爲サスニテ通常郵便物ト

シテ取扱フヘシ

第五條 小包郵便物ハ送票(甲號)ニ式ノ如ク記入シ其ノ郵便料並ニ手数料ニ對スル相當郵便切手ヲ貼付

シ之ヲ添フヘシ其ノ送票ニハ定式外ノ事項ヲ記載スルコトヲ得ス

但送票紙ハ郵便局所ヨリ之ヲ交付ス

第六條 小包郵便物ハ其ノ品價形狀ニ應シ適當ニ包裝封緘シ外包ヲ破却スルニアラサレハ内品ニ損傷ヲ被

ラシムルコト無キ様充分ノ手當ヲ爲スヘシ

價額登記ノ小包郵便物ハ其ノ外部ヨリ容易ニ内品ヲ察知シ能ハサル様堅固ニ包裝シ之ニ三箇所以上封印

ヲ施スヘシ

第七條 貨幣、舊貨幣、古錢、金銀地金、金銀細工物及寶玉、寶玉細工物ヲ類テ蓋付蓋蓋又ハ堅固ナル蓋

付ノ箱類ニ納メ内品ノ動搖セサル様詰込シ其ノ蓋ノ合セ目ニ錫箔等ヲ注キ若ハ蓋ヲ釘著トナシ麻繩若ハ

絲等ニテ嚴重ニ之ヲ縛リ更ニ之ヲ封緘スヘシ

郵便切手、葉書、封皮、帯紙其ノ他諸印紙類及有價證券、手形類モ亦前項同様ニ包裝封緘スヘシ

郵便局ノ承認ヲ經テ差出スヘキモノ又ハ惡臭ヲ發スヘキモノハ其ノ品質ニ應シ蓋又ハ箱其ノ他適當ノ包

裝ニ依リ充分ニ自他ノ損害ヲ防キ得ヘキ様手當ヲナシ其ノ品名ヲ表面ニ明記スヘシ

第八條 小包郵便物ノ包裝不充分ナリト認ムルモノハ差出人ヲシテ更ニ之ヲ改裝セシムヘシ

第九條 小包郵便物ノ表書ハ明瞭正確ニ記載スヘシ

但包裝ノ都合ニ依リ直ニ其ノ郵便物ニ記載シ難キモノハ厚紙若ハ木札等ヲ附着シテ之ニ記載スヘシ

第十條 小包郵便物ノ表書ハ差出人受取人ノ住所氏名、職業家號、符號、商標及年月日ニ限ルヘシ

但特ニ表書スヘキ規定アルモノハ此限ニアラス

第十一條 郵便局所ニ於テ小包郵便物ニ郵送禁止ノ物件ヲ包入シタリト思料スルトキ又ハ表記品名ト包中物

品ト相違セリト思料スルトキハ何時ニモ其ノ差出人又ハ受取人ヲ立會ハシ之ヲ開封検査スルコトヲ得

第十二條 小包郵便物差出人其ノ差出ノ際ニ於テ受取人ノ住所ニ關シ或ハ異動アルヘシト掛念スルトキハ

豫メ之ヲ差付ヲ差立局所ニ請求シ置クコトヲ得

第三章 料金

第十三條 小包郵便料及保險料ハ之ヲ前納スヘシ

但差出人ニ還付ノ場合ハ此限ニアラス

第十四條 小包郵便料ニ關スル里程ハ逓信省ニ於テ定メタル里程表ニ依ル

差立配達トモ郵便局ヲ同シクスルモノハ最近里程ノ率ニ依ル

第十五條 小包郵便物ノ重量ハ總テ郵便局所ノ秤量ニ依ルヘシ

第十六條 小包郵便物ヲ轉送又ハ還付スルトキハ其ノ轉送又ハ還付ノ里程ニ從ヒ更ニ郵便料ヲ徵收ス

但シノ轉送者ハ還付ニシテ同一郵便区内ニ止リ其ノ料金ニ異動ヲ生セサルモノハ此限ニアラス

第十七條 轉送又ハ還付ノ郵便料ハ之ヲ差出人ヨリ徵收ス

第二十七條ニ依リ受取人ヨリ配達又ハ轉送ヲ請求シタルモノハ之ヲ受取人ヨリ徵收ス

第十八條 小包郵便物ノ受取人別配達料若ハ秤量料ノ納付ヲ拒ムトキハ該小包郵便物ハ差出人ニ還付シ本

條ノ料金ヲ併徵スヘシ

但留置小包郵便物ノ受取人自ラ其ノ轉送又ハ配達ヲ請求シタル場合ニ於テハ本條料金ノ納付ヲ拒ムコ

トヲ得ス若シ其ノ郵便物ノ受取ヲ拒ムトキハ更ニ原留置局マテ回送スル郵便料及本條ノ料金ヲ併納スヘシ

第十九條 未納料金又ハ不足料金ヲ徵收スルトキハ郵便局ニ於テ郵便切手ヲ送票ニ加貼シ未納又ハ不足ノ

印ヲ捺スヘシ

第二十條 價額登記小包郵便物ハ轉送還付ニ對シテハ別ニ其ノ保險料ヲ徵收セス

第四章 留置

第二十一條 小包郵便物ヲ留置トナサントスルトキハ差出人ノ差立局ニ請求シ其ノ留置證ヲ申受クヘシ

小包留置證ハ差出人ヨリ之ヲ受取人ニ送付スヘシ

第二十二條 留置小包郵便物到着シタルトキハ其ノ留置局ヨリ直ニ其ノ通知書ヲ受取人ニ發スヘシ

但受取人ノ住所ヲ記載セサルモノハ此限ニアラス

第二十三條 小包郵便物ノ留置期限ハ其ノ到達ノ日ヨリ起算シテ十五日以内トス

其ノ期限ヲ經過シタルトキハ直ニ之ヲ差出人ニ還付ス

第二十四條 留置小包郵便物ヲ受取ラントスルトキハ小包留置證ニ記名調印シテ之ヲ差出し受取人タルコ

トヲ證スヘシ

第二十五條 留置小包郵便物ノ受取人其ノ留置證ヲ失ヒタルトキ又ハ通知書到達ノ後尚留置證ノ送達ヲ受

ケサルトキハ其ノ旨ヲ差出人ニ報スヘシ

差出人前項ノ報知ヲ受ケタルトキ又ハ自ラ留置證ヲ失ヒタルトキハ最初小包郵便物ヲ差出シタル局所ニ

就キ其ノ受取證書ヲ監トシテ留置證ノ原本ヲ申受ク之ヲ受取人ニ送付スヘシ

本條ノ場合ニ於テハ留置期限ノ相當猶豫ヲ留置局ニ請フコトヲ得

第二十六條 留置小包郵便物ノ受取人其ノ代人ヲ以テ該小包ヲ受取ラントスルトキハ其ノ留置證ノ裏面ニ

代人ノ氏名及之ニ委任スル旨ヲ記シテ署名捺印スヘシ其ノ代人該小包ヲ受取ル手續ハ第二十四條ニ依ル

第二十七條 留置小包郵便物ノ差出人又ハ受取人ハ其ノ小包郵便物ノ配達還付若ハ轉送ヲ其ノ留置局ニ請

求スルコトヲ得此場合ニ於テ轉送ノ上更ニ留置ヲ請求スルモノ、外其ノ留置證ハ總テ無効トス

第二十八條 此章ノ規定ハ總テ特別留置ノ小包郵便物ニ適用ス

第五章 送達

第二十九條 郵便局ニ於テ小包郵便物取扱中包装損傷シタルトキハ相當ノ手當ヲ施シ其ノ旨ヲ記シ取扱者

ノ捺印ヲ捺スヘシ

第三十條 小包郵便物ノ配達又ハ還付ヲ受クルモノハ其ノ配達證書ニ調印シテ之ヲ受取ルヘシ

同居ノ家族雇人ノ受取ルトキハ其ノ旨ヲ記載シ本人ニ代リテ記名調印スヘシ

肩書ノ家ニ於テ之ヲ受取ルトキハ其ノ家主記名調印スヘシ

官衙、公署、社寺、學校、病院、會社、協會、船舶等ニ於テ之ヲ受取ルトキハ相當ノ資格アルモノ其ノ

配達證書ニ記名調印スヘシ

第二項第三項第四項ノ場合ハ之ヲ正當受取人ニ交付シタルモノトス

第三十一條 小包郵便物ノ配達又ハ還付ヲ受クルモノハ未タ配達證書ニ調印セサル前ニ於テ其ノ小包郵便

物ヲ開封スルコトヲ得ス

若シ之ヲ開封シタルトキハ異議ナク其ノ郵便物ヲ受取リタルモノトスヘシ

第三十二條 小包郵便物受取人不在等ノ事故ニ依リ初度配達ノ際之カ配達ヲ遂ケル能ハサルトキハ一週間

内便宜配達ヲ試シ尚之ヲ配達シ能ハサルトキハ差出人ニ還付スヘシ
但別配達ノモノト雖モ爾後ノ試配達ハ總テ通常配達便ニ依ル

第三十三條 小包郵便物ノ受取人移轉シタルトキハ郵便局ハ速ニ差出人ニ向ケ送票(乙號)ヲ發シ之ヲ轉送スヘキカ又ハ之ヲ還付スヘキカヲ問合スヘシ差出人此問合ヲ受ケタルトキハ送票(乙號)中希望ノ欄ヲ存シ不用ノ欄ハ總テ之ヲ塗抹シ相當郵便切手ヲ貼付シ速ニ之ヲ該郵便局ニ回送スヘシ
但第十二條ニ依リ豫メ還付ヲ請求シタルモノハ直ニ之ヲ還付ス

其ノ轉送スヘキ地同一郵便區内ニシテ轉送料ヲ増徴スルコトヲ要セサルモノハ直ニ之ヲ配達スヘシ
第三十四條 前條ニ依リ差出人ニ問合セタル後普通郵便往復日限ヲ經過スルコト五日ニ至ルモ尚何等ノ申出ヲナサ、ルトキハ轉送ヲ希望セサルモノト看做シテ還付ノ取扱ヲナスヘシ

第三十五條 小包郵便物配達ノ際其ノ外部ニ破損ノ痕迹ナク且重量ニ變異ナキトキハ受取人ノ力受取方ヲ拒ムコトヲ得ス
但破損ノ痕迹トハ之ニ依リテ其ノ内品ヲ損傷シタルヘシト認ムル程ノ著大ナルモノニ限ル又遞送中ニ於ケル普通ノ磨擦若ハ濡濕乾燥等ノ故ニ依リテ増減シタル重量ノ異動ハ本條ノ限ニアラス

前項ニ依リ小包郵便物ノ受取ヲ拒ムトキハ其ノ事由書ヲ認メ之ヲ配達人ニ交付スヘシ
第三十六條 受取人前條ニ依リ小包郵便物ハ受取方ヲ拒ミタルトキハ郵便局ニ於テ之ヲ調査シ相當理由アリト認ムルモノハ直ニ之ヲ差出人ニ還付スヘシ
若シ郵便局ニ於テ相當理由ナキモノト認ムルトキハ受取人ヲ召喚シ立會ノ上之ヲ調査スヘシ
受取人召喚ニ應セサルトキ又ハ立會調査ノ上之ヲ拒ムヘキ理由ナキコトヲ示シタルトキハ再ヒ之カ受取方ヲ拒ムコトヲ得ス

第三十七條 小包郵便物ヲ差出人ニ還付スヘキ場合ニ於テ其ノ差出人小包郵便取扱局ノ郵便區外ニ在ルトキハ最寄小包郵便取扱局ニ留置キ其ノ首ヲ通知スヘシ
差出人其ノ通知ヲ受ケタルトキハ最初受領シタル受取證書ヲ差出し其ノ差出人タルコトヲ證シテ之ヲ受取

ルヘシ

代人ヲ以テ該小包ヲ受取ラントスルトキハ代人某ニ受取方委任スル旨ヲ記載シタル書面ヲ差出スヘシ
第三十八條 通知書ヲ發シテ十五日以内ニ尚其ノ受取方ヲ請求セサルトキハ配達還付シ能ハサル郵便物トシテ處分スヘシ

第三十九條 第三十五條及第三十六條ノ規定ハ差出人カ其ノ小包郵便物ノ還付ヲ受ル場合ニモ亦之ヲ適用ス但受取人カ第三十五條第二項ニ依リ事由書ヲ附シタル小包郵便物ニ對シテモ差出人ハ更ニ還付ヲ受ケサル事由書ヲ配達人ニ交付スルヲ要ス
第四十條 差出人前條ノ事由書ヲ郵便物配達人ニ交付シタルトキハ速ニ郵便局ニ出頭シ若ハ相當代人ヲ差出し尚其ノ事由ヲ陳述スヘシ

第四十一條 差出人前條ノ手續ヲナストキハ郵便局ハ其ノ出頭人ヲ立會ハシメ郵便物ヲ開封シテ損害ノ有無ヲ検査シ果シテ損害アルコトヲ認ムルトキハ損害證明書二通ヲ作り其ノ一通ヲ出頭人ニ交付スヘシ
第四十二條 差出人還付ヲ受ケサル事由書ヲ郵便物配達人ニ交付シタルノミニテ第四十條ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ郵便局ヨリ其ノ差出人ヲ召喚スヘシ若シ其ノ召喚ニ應セサルトキハ異議ヲ取消シタルモノト看做シ其ノ郵便物ハ之ヲ還付スヘシ此場合ニ於テ差出人ハ之カ受取ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十三條 第四十一條ニ依リ損害證明書ヲ作りタル小包郵便物ハ其ノ賠償處分ノ終了ニ至ル迄之ヲ郵便局ニ留置カヘシ
其ノ賠償ヲ請求セサルモノハ速ニ之ヲ差出人ニ還付スヘシ

第四十四條 配達還付シ能ハサル小包郵便物ハ郵便取扱局ノ例ニ準ス
前項ノ取扱ニ附シタル小包郵便物ヲ更ニ還送スルトキハ第十六條ニ依リ料金ヲ徴收ス
第六章 賠償(略之)
勅令 明治二十五年六月二號 小包郵便物ノ郵便料、保険料、賠償金額、容積、重量及價額登記制限ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 小包郵便料ハ小包郵便物ノ重量及其差立郵便局ヨリ配達郵便局マテノ里程ニ從ヒ別表ニ依リ之ヲ徵收ス

第二條 郵便局市外ニ送達スル小包郵便物ハ其重量ニ從ヒ別ニ左ノ郵便料ヲ加徴ス
 小包郵便物一箇重量六百匁マテ 一貫匁マテ 貳錢
 同 一貫匁マテ 四錢
 同 一貫五百匁マテ 六錢

第三條 小包郵便物ノ容積及重量ハ左ノ制限ヲ超過スルコトヲ得ス
 長 曲尺二尺
 幅 曲尺二尺
 厚 曲尺二尺
 重量 一貫五百匁

第四條 小包郵便物ノ登記價額ハ金百五十圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第五條 價額登記小包郵便物ノ保險料ハ登記金額壹圓マテ金七錢トシ壹圓以上ハ壹圓マテ毎ニ金壹錢ヲ加フ

第六條 通常小包郵便物ノ損害ニ對シテハ重量百匁ニ付金拾錢ノ割合ヲ以テ之ヲ賠償シ其一部分ノ損害ニ對シテハ此制限内ニ於テ其損害ノ多少ニ從ヒ之ヲ賠償ス

第七條 價額登記小包郵便物ノ損害ニ對シテハ其登記金額マテ之ヲ賠償シ其一部分ノ損害ニ對シテハ登記金額内ニ於テ其損害ノ多少ニ從ヒ之ヲ賠償ス
 附則

第八條 小包郵便物ヲ取扱フ郵便局ハ遞信大臣隨時之ヲ告示ス

(別表)

小包郵便料

二百匁マテ	四百匁マテ	六百匁マテ	八百匁マテ	一貫匁マテ	一貫二百五十匁マテ	一貫五百匁マテ
二十里マテ	八錢	拾錢	拾貳錢	拾四錢	拾七錢	貳拾錢
四十里マテ	七錢	拾錢	拾參錢	拾九錢	貳拾參錢	貳拾七錢
六十里マテ	八錢	拾貳錢	拾六錢	貳拾錢	貳拾九錢	參拾四錢
八十里マテ	九錢	拾四錢	拾九錢	貳拾四錢	參拾六錢	四拾參錢
百里マテ	拾錢	拾六錢	貳拾貳錢	貳拾八錢	參拾四錢	四拾貳錢
百五十里マテ	拾貳錢	拾九錢	貳拾六錢	參拾參錢	四拾錢	四拾九錢
二百里マテ	拾四錢	貳拾貳錢	參拾錢	參拾八錢	四拾六錢	五拾六錢
二百五十里マテ	拾六錢	貳拾五錢	參拾四錢	四拾參錢	五拾貳錢	六拾四錢
三百里マテ	拾八錢	貳拾八錢	參拾八錢	四拾八錢	五拾八錢	七拾壹錢
三百里以外	貳拾壹錢	參拾貳錢	四拾參錢	五拾四錢	六拾五錢	七拾九錢
						九拾參錢

第三節 配達證明

遞信省令 明治二十五年三月二十五日第八號 配達證明郵便規則

- 第一條 配達證明郵便ハ配達局ノ證明書ヲ以テ其郵便物ノ正ニ配達シタルコトヲ證明スルモノトス
- 第二條 郵便差出人其郵便物配達ノ證明ヲ得ントスルトキハ之ヲ差出局所ニ請求スルコトヲ得
- 第三條 配達證明書ハ配達局ヨリ之ヲ差出人ニ送付ス可シ
- 第四條 配達證明郵便ハ書留郵便物ニ限ルモノトス
- 第五條 配達證明手数料ハ郵便物ノ何種ニ拘ハラズ參錢トス
其手数料ハ前納ニ限ルヘシ
- 第六條 配達證明手数料ハ郵便物切手ヲ其郵便物ニ貼付シタルヲ以テ之ヲ納メタルモノトス
- 第七條 配達證明郵便物ハ其表面ニ配達證明ト記載スヘシ
- 第八條 此規則ハ外國郵便ニ適用セス

第四節 郵便貯金

法律 明治二十三年八月 郵便貯金條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

- 第一條 郵便貯金ノ事務ハ逓信大臣之ヲ管理ス
- 第二條 郵便貯金ハ逓信大臣ノ指定スル郵便電信局郵便局ニ於テ其預入拂戻ヲ取扱フモノトス
逓信大臣ニ於テ必要ト認ムル場所ニハ特ニ郵便貯金預所ヲ設置シ郵便貯金ノ預入ヲ取扱ハシムルコトヲルヘシ

第三條 郵便貯金ノ預入ハ貯金通帳ヲ以テ證明シ其拂戻ハ拂戻證書ヲ以テ證明トス

第四條 郵便貯金一人ノ預金總額ハ元利合セテ五百圓ニ超過スルコトヲ得ス

第五條 郵便貯金ノ利息ハ毎年三月三十一日ヲ期トシ之ヲ計算シ元金ニ加ヘ四月ヨリ翌年利子ヲ付スヘシ

第六條 郵便貯金ノ利息ハ毎年三月三十一日ヲ期トシ之ヲ計算シ元金ニ加ヘ四月ヨリ翌年利子ヲ付スヘシ

第七條 郵便貯金預金人ハ何時ニテモ郵便貯金ノ全額又ハ其幾分ノ拂戻ヲ請求スルコトヲ得但幾分拂戻ノ場合ニハ其未タ元金ニ加ヘサル利子ハ拂戻ヲ請求スルコトヲ得ス

第八條 郵便貯金預金人ハ其貯金ノ幾分ヲ以テ公債證書ノ購入保管ヲ請求スルコトヲ得但其公債證書ハ額面五拾圓又ハ五拾圓ヲ超過シタルモノニ限ル

第九條 郵便貯金預金人ハ何時ニテモ前項保管ニ係ル公債證書ノ下渡ヲ請求スルコトヲ得

第十條 郵便貯金預金人貯金全額ノ拂戻ヲ請求スルトキハ保管ニ係ル公債證書モ同時ニ其下渡ヲ請求スヘシ

第十一條 郵便貯金ノ預金金額第四條ノ制限ニ超過シタルトキハ其旨ヲ貯金預金人ニ通知シ預金金額ヲ制限以テ引直サシムヘシ

第十二條 前項ノ通知ヲ發シタル後六十日以内ニ引直ヲ爲ササルトキハ貯金預金人ノ爲メ其貯金ヲ以テ公債證書ヲ購入スルモノトス但此場合ニ於テ購入スル公債證書ハ額面五拾圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第十三條 郵便貯金通帳ハ一人ニ冊ヲ限リトス若シ二冊以上ノ通帳ヲ受領シテ貯金預入ヲ爲シタル者アリタルトキハ最初受領セシ通帳ニ記載セル貯金ノ外利子ヲ付セシテ拂戻ヲ爲サシム若シ二冊以上通帳ノ日附同一ナルトキハ其貯金最多額ノモノニ利子ヲ付シ其他ノモノニハ總テ利子ヲ付セシテ拂戻ヲ爲サシム

第十條 郵便貯金預ケ人ハ最初貯金ノ預入ヲ爲シタル月ヨリ滿一年毎ニ其通帳ヲ逓信省ニ差出シ前期間利子ノ記入ヲ受クヘシ但一年ノ終期四月又ハ五月ニ當ルモノハ之ヲ六月ニ差出スヘシ

第十一條 郵便貯金ハ其預ケ人最後ニ貯金預入ヲ爲シタル日又ハ通帳ヲ逓信省ニ差出シ其書換又ハ利子ノ記入ヲ受ケタル日又ハ拂戻ヲ請求シタル日ヨリ起算シ十年間預入ヲ爲サス又ハ拂戻ヲ請求セス又ハ通帳ヲ逓信省ニ差出ササルトキハ滿期ノ翌月ヨリ利子ヲ付セス但保管ニ係ル公債證書ノ利子ハ此限ニアラズ尚二十年間貯金ノ預入ヲ爲サス又ハ拂戻ヲ請求セス又ハ通帳ヲ逓信省ニ差出ササルトキハ其貯金ハ政府ノ所得トス

前項貯金ヲ政府ノ所得トスル場合ニ於テ保管ニ係ル公債證書又ルトキハ其公債證書モ併テ政府ノ所得トス

若シ第二項ノ期限内ニ貯金ノ預入ヲ爲シ又ハ拂戻ヲ請求シ又ハ通帳ヲ逓信省ニ差出シタルトキハ其翌月ヨリ利子ヲ付ス

第十二條 郵便貯金ノ拂戻金又ハ下波ヲ請求シタル公債證書ハ拂戻證書又ハ下波證書ノ日附ヨリ一箇年以内ニ受取ルヘシ若シ此期限内ニ受取ラサルトキハ之ヲ供託所ニ寄託スヘシ

第十三條 郵便貯金預ケ人ハ郵便貯金ヲ家督相續人ニ讓與スル場合ヲ除クノ外其名前書換ヲ請求スルコトヲ得ス

第十四條 郵便貯金預ケ人ニ損害ヲ蒙ラシメ政府其賠償ノ責ニ任スヘキ場合ニ於テハ郵便貯金預ケ人ハ其事故ノアリタルコトヲ知リタル日又之ヲ知リ能ハサルトキハ次期ノ利子記入期限ヨリ一箇年以内ニ其賠償ノ請求ヲ爲スヘシ若シ其期限内ニ請求ヲ爲ササルトキハ政府其責ヲ免カルモノトス

第十五條 郵便貯金事務ニ關スル郵便物ハ郵便稅ヲ免除ス

第十六條 郵便貯金ノ受渡ニ關スル書類ハ證券印紙ヲ免除ス

第十七條 本條例施行ノ細則ハ逓信大臣之ヲ定ム

附則

明治十五年十二月第五十九號布告郵便條例第五百十七條乃至第二百二條及第二百四十二條第二項ハ本條例施行ノ日ヨリ廢止ス

第二款 電信

布告 明治十八年五月電信條例別冊ノ逓改定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但明治七年(九月)第九十八號布告十二年(五月)工部省第九號布告其他本條例ニ抵触スル從前ノ布告布達ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

電信條例

第一章 電報

第一條 凡電報別テ三種トス

一 官報

二 局報

三 私報

第二條 官報局報私報各別テ七種ト爲ス

一 通常電報

二 至急電報

三 追尾電報

四 同文電報

五 照校電報

六 受信電報

七 返信料前納電報

第三條 電報ヲ傳送スル順序ハ官報ヲ先トシ局報之ニ次キ私報又之ニ次ケモノトス

第十四條 電信局長ニ於テ法律規則ニ違背シ又ハ治安ヲ妨害シ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル私報ハ其傳送ヲ止ムヘシ

第十五條 政府ハ時機ニ依リ線路又ハ地方又ハ語辭ヲ限リ私報ヲ停止スルコトアルヘシ

第二章 電報書法

第十六條 凡電報ヲ發送スルニハ普通辭又ハ秘辭隱語ヲ問ハズ和文ハ片假名及數字ヲ用ヒ歐文ハ羅馬字及亞利比亞數字ヲ用フヘシ

第十七條 電信局長ニ於テ私報ニ用フル秘辭隱語ノ解譯又ハ其合符原本ヲ要スルトキハ之ヲ差出スヘシ

第三章 電報料

第十八條 凡電報料ハ國內ヲ通シテ同一ト爲ス但一市內及壹岐對馬(壹岐對馬ハ廿三年法律第十六號ニ依リ内閣ト同一ニナレリ)ニ發着スルモノハ此限ニアラス

第十九條 電報料及手数料ノ金額ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 電報料及手数料ハ電信切手ヲ以テ納ムルモノトス其切手ハ額信紙ニ貼付スヘシ

但通信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ハ貼付スルノ限ニアラス

第二十一條 電信中央局及分局並電信切手賣下所ノ設ケアラサル地ヨリ郵便ニ付シテ電報ヲ發出スルトキハ郵便切手ヲ以テ電信切手ニ代用スルコトヲ得其郵便切手ハ額信紙ニ貼付セサルモノトス

第二十二條 電報料及手数料ニ用ヒタル電信切手ハ電信中央局及分局ニ於テ消印スヘシ

第二十三條 電報料及手数料ハ過納アルモノ已ニ消印シタル後ハ之ヲ還付セス

未タ消印セサル電報ヲ返還スルトキ已ニ消印シタルモノ亦同シ

第二十四條 第四條ニ依リ私報ノ傳送ヲ止ムルトキハ其既ニ納メタル料金を還付セス

第二十五條 電報發送ノ過失ニ因テ甚シク遲延シ若クハ到達セサルモノハ其料金を還付ス照復電報ニシテ傳送ノ遅延ヲ生シテ其用納メ爾キタルコト判然タルモノ亦同シ

第二十六條 料金を還付ノ請求ハ發信ノ日附ヨリ六十日以内ニ電信局長ニ申出ヘシ此期限ヲ過クルトキハ一切之ヲ受理セス

第十七條 電報料及手数料ニ不足アルトキハ電信中央局及分局ニ於テ其電報ヲ傳送スルモ其不足ノ料金を二倍ヲ發信人ヨリ追納セシムヘシ

第十八條 發信人又ハ受信人ヨリ納ムヘキ料金を七日以内ニ徵收シ難キトキハ發信人ノ納メサルモノハ受信人ヨリ受信人ノ納メサルモノハ發信人ヨリ徵收スヘシ

第四章 電信切手

第十九條 電信切手ハ日本政府ニ於テ發行セシモノタルヘシ

第二十條 電信切手ハ電報料及手数料納濟ノ證トナスモノトス

第二十一條 電信切手ヲ賣ル者ハ電信局長ノ免許ヲ受ケ電信切手賣下所ノ標札ヲ掲ケヘシ

第二十二條 電信切手ハ電信中央局及分局並電信切手賣下所ノ外ニ於テ賣買スヘカラス

第二十三條 電信切手ハ其額面ヨリ低價ヲ以テ賣ルヘカラス

第二十四條 返信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ニ充ツル電信切手並電信切手ニ代用スル郵便切手ノ額信紙ニ貼付シタルモノハ各其効用ヲ失フ

第二十五條 電信切手ノ汚損毀損又ハ不明瞭ナルモノハ其効用ヲ失フ但其未タ使用セサルモノニ限リ二人以上ノ證人ヲ立テ其原由ヲ證明シタルトキハ電信中央局及工部卿ノ告示ヲ以テ定メタル分局ニ於テ定價十分ニ減ニテ買戻スヘシ

第二十六條 電信中央局及工部卿ノ告示ヲ以テ定メタル分局ニ於テハ四枚以上連續シタル電信切手ヲ其所持人ノ請求ニ依リ定價十分一減ニテ買戻スヘシ

第五章 電報發送(略之)

第六章 尋問改正(略之)

第七章 開覽正寫(略之)

第八章 電機私設(略之)

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第十六章 交通 電信

第九章 海外電報(略之)

第十章 罰則

- 第五十二條 第七條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十三條 第二十二條第二十三條ヲ犯シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十四條 第三十五條第三十六條ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第五十五條 第四十六條ヲ犯シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其機器ヲ沒收ス
- 第五十六條 第四十八條第四十九條ヲ犯シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其情狀ニ依リ電線私設ヲ禁止ス
- 第五十七條 第五十條ヲ犯シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加シ其機器ヲ沒收ス
- 第五十八條 電線ヲ切斷セスト雖モ電氣ヲ吸引シ易キ物ヲ纏繞シテ不通ニ致シ若クハ其効力ヲ妨害シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第五十九條 疏虞懈怠ニ因リ電信ノ機械柱木條線ヲ損壞切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シ或ハ其効力ヲ妨害シタル者ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 其水底電信線ニ係ルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第六十條 電信ノ柱木條線ニ紙屑ヲ懸ケ若クハ瓦礫其他ノ雜物ヲ擲チ又ハ柱木及測量標木ニ獸畜ヲ繫キ若クハ貼紙シ戲書シ又ハ柱木ノ記號及測量標木ヲ毀棄汚穢シタル者ハ五錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第六十一條 政府ノ指定シタル水底電信線路内ニ於テ鐵絲ヲ繫泊シ又ハ漁業採藻ヲ爲シ土砂ヲ掘鑿シ又ハ電信線ノ號標ニ舟筏ヲ繫キ又ハ其號標ヲ毀棄シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 政府ノ指定シタル電信船ノ號標距離内ニ於テ前項ノ所爲ヲ行ヒ又ハ航行シタル者亦同シ
- 第六十二條 偽計又ハ威力ヲ以テ電報ノ傳送配達及架線其他ノ工事ヲ妨害シ若クハ之ヲ阻止シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

- 第六十三條 已レニ屬セサル電報ヲ開封シ若クハ私用シ或ハ毀棄汚穢留隱匿シ若クハ受取人ニ非サル者ニ交付シ及其情ヲ知テ之ヲ收受シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第六十四條 電信切手ヲ偽造變造シ又ハ其情ヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第六十五條 已ニ貼用シタル電信切手ヲ再ヒ貼用シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第六十六條 電信事務ヲ奉スル者前數條ノ罪ヲ犯シタルトキハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ
- 第六十七條 電信局長ノ許可ヲ得シテ通信室ニ入りタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス之ヲ入レタル者ハ一等ヲ加フ
- 第六十八條 電信事務ヲ奉スル者私報ノ旨意ヲ漏泄シタルトキハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但法律規則ニ從ヒ開披證明スルハ此限ニアラス
- 官報及局報ノ旨意ヲ漏泄シタル者ハ一等ヲ加フ
- 第六十九條 電信事務ヲ奉スル者賴信紙ニ貼用シタル切手ヲ剝取タルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 其未タ消印ヲナサル切手ヲ剝取タル者ハ刑法竊盜ノ本條ニ照シテ處斷ス
- 第七十條 電信事務ヲ奉スル者故ナクシテ通信ノ依托ヲ拒ミタルトキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第七十一條 疏虞懈怠ニ因リ電報ヲ遺失シ又ハ傳送配達ヲ延滞シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第七十二條 配達人謝儀若クハ不當ノ貸錢ヲ要求シタルトキハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第七十三條 第五十八條第六十二條第六十四條第六十五條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス
- 第七十四條 第六十四條第六十九條ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處シタル者ハ六月以上二年以下ノ監

視二附ス

勅令

明治十九年四月二日 朕軍用電信ニ係ル妨害者處分ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治十八年(五月)第八號布告

電信條例第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十一條ハ軍用電信ニ亦之ヲ適用ス

軍用電信事務ヲ奉スル者電信條例第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條ニ記

載シタル罪ヲ犯シタルトキハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ又電報ノ旨意ヲ漏泄シタルトキハ電信條例第六十

八條第二項ニ依リ處斷ス

電信條例第五十八條第六十二條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ普通刑法未遂犯罪ノ例

ニ照シテ處斷ス

第三款 電話

逓信省令 明治二十三年四月 電話交換規則左ノ通之ヲ定ム

月十九日第七號 電話交換規則

第一條 逓信省ハ必要ト認ムル市町ニ電話交換局及電話所ヲ置キ電話交換加入者ノ使用ニ供スル電話線及

電話所ノ電話線ヲ電話交換局ニ接合シ又甲乙地間ニ電話線ヲ架設シテ電話交換ノ媒介ヲ爲スヘシ但加入

者ノ請求ニ依リ其市町接近ノ地ニ電話線ヲ延長スルコトアルヘシ

第二條 加入者ノ使用ニ供スル電話線及電話器ノ設置並其維持ハ逓信省之ヲ負擔スルモノトス但加入者ノ

過失ニ由リ毀損シタルトキハ逓信省之ヲ修補シ其費用ハ加入者ヲシテ辨償セシムヘシ

第三條 加入者ハ左ノ電話通信ヲ爲スコトヲ得

一 市町ノ内外ヲ問ハズ晝夜ノ別ナク加入者相互直接ノ電話通信

二 市町ノ内外ヲ問ハズ規定ノ時間ニ於テ電話所ニ到ルモノト直接ノ電話通信

三 規定ノ時間ニ於テ和文電報送受ノ爲メ郵便電信局又ハ電信局ト直接ノ電話通信

第四條 何人ト雖規定ノ時間ニ於テ電話所ニ到リ左ノ電話通信ヲ爲スコトヲ得但其時間ハ逓信省ニ於テ之ヲ定メ時々廣告スヘシ

一 加入者ト直接ノ電話通信

二 他ノ電話所ニ到ル者ト直接ノ電話通信

第五條 左ノ電話通信ハ總テ五分時間迄ヲ以テ一通信時トス

一 甲乙市町間相互直接ノ電話通信

二 電話所ニ到ル者相互及電話所ニ到ル者ト加入者ト直接ノ電話通信

第六條 加入者ハ報酬ヲ受ケテ其使用ニ屬スル電話器ヲ他人ニ貸與シ又ハ之ヲ自家所用外ノ目的ニ使用ス

コトヲ得ス

第七條 電話交換局ハ時々加入者ノ住居ニ技術員ヲ派遣シテ電話器故障ノ有無ヲ點檢セシムヘシ

第八條 加入者ハ其使用ニ屬スル電話線又ハ電話器ニ障害アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ電話交換局ニ報告スヘシ

第九條 加入者ノ加入約定期限ハ其使用ニ屬スル電話線及電話器ヲ交付シタル日ヨリ起算シ滿二箇年トシ

爾後ノ繼續ハ滿一箇年以上トス(一箇年未滿ノ端數ヲ加フルヲ得ス)但左ニ掲ケル一期ノ中途ニ於テ之

ヲ交付シタルトキハ尚該期ノ末日ニ至ルマテノ日數ヲ加ヘタルモノヲ以テ約定期限ノ一箇年ト看做スヘシ

第一期 一月ヨリ三月マテ

第二期 四月ヨリ六月マテ

第三期 七月ヨリ九月マテ

第四期 十月ヨリ十二月マテ

第十條 加入者其加入約束ノ繼續ヲ望マサルトキハ約定期三箇月以前ニ其旨ヲ電話交換局ニ通知スヘシ

若シ此通知ヲナサ、ルトキハ更ニ一箇年繼續スルモノト看做スヘシ

第十一條 加入者ハ逓信省ニ於テ別ニ定ムル電話線及電話器ノ使用料ヲ左ノ規定ニ據リテ納付スヘシ

但特ニ納期ヲ定ムル者ハ此限ニアラス

一 使用料ハ第九條ニ掲クル四期ノ別ニ從ヒ年額ヲ四分シ毎年一月四月七月十月ノ四回ニ通貨ヲ以テ其期ノ分ヲ電話交換局ニ納付スヘシ

二 一期ノ中途ニ於テ加入シタルトキハ其期ノ分ハ年額金ノ日割ヲ以テ電話線及電話器ノ交附ヲ受ケタル日ヨリ一週日以内ニ通貨ヲ以テ電話交換局ニ納付スヘシ

第十二條 加入者納期ニ至リ使用料、電話料又ハ電話ニ由リ發送シタル電報料ヲ納付セサルトキハ其電話通信ヲ停止シ若クハ加入ヲ除クコトアルヘシ但加入ヲ除キタルトキハ其既納ノ料金ヲ還付セス

第十三條 電話交換局アル市町外ニ電話器ヲ設置スルモ一人ニシテ同一ノ家屋又ハ地所内ニ於テ同一ノ回線中ニ二箇以上ノ電話器又ハ電話器ノ外ニ電鈴ヲ設置スルモノハ第十一條使用料ノ外左ノ料金ヲ増加スヘシ

一 市町外ノ地ニ電話器ヲ設置スルトキハ其市町ノ境界ヲ去ル三町迄毎ニ一箇年料金三圓

二 二箇以上ノ電話器ヲ設置スルトキハ一箇ヲ除キ其他一箇毎ニ一箇年料金八圓

三 別ニ電鈴ヲ設置スルトキハ一箇毎ニ一箇年料金八圓

第十四條 加入者ニ於テ其使用ニ屬スル電話線ヲ他ニ轉架シ若クハ其電話器ヲ同一ノ家屋又ハ地所内ニ轉置セントコトヲ望ムトキハ之ヲ電話交換局ニ請求スヘシ其轉架ニ要スル費用ハ(線條柱木其他器械物品ノ代價ヲ除ク)請求者ノ支辨トス但電話線ノ轉架ニ依リ使用料額ニ異動ヲ生スルトキハ轉架工事竣工ノ日ヨリ其料額ヲ改定スヘシ

第十五條 電話所ニ到リテ電話通信ヲ爲スモノ及加入者ニシテ他ノ市町ノ加入者又ハ其電話所ニ到ル者ト電話通信ヲナス者ハ逕信省ニ於テ別ニ定ムル電話料ヲ左ノ規定ニ據リテ納付スヘシ但加入者ニシテ其市町内ノ電話所ニ到ルモノハ郵便切手ヲ以テ電話料ヲ其電話所ニ納付スヘシ

一 電話所ニ到ルモノハ郵便切手ヲ以テ電話料ヲ其電話所ニ納付スヘシ

二 加入者ハ通貨ヲ以テ其月分ノ電話料ヲ翌月十日迄ニ電話交換局ニ納付スヘシ

第十六條 加入者ニシテ第三條第三項ニ據リ電報ヲ各地ニ發送スル爲メ郵便電信局又ハ電信局ニ電話通信ヲナシタルトキハ其月分ノ電報料ヲ通貨ヲ以テ翌月十日迄ニ其郵便電信局又電信局ニ納付スヘシ

第十七條 加入者ノ使用ニ屬スル電話線又ハ電話器ニ障害ヲ生シ三日以上電話通信ヲ休止シタルトキハ第四日ヨリ電話通信休止ノ日數ニ應シ年額金ノ日割ヲ以テ使用料ヲ還付スヘシ但第二條但書ノ場合ニ於テハ此限ニアラス

第十八條 凡ソ加入者タラントコトヲ望ムモノハ左ノ書式(略之)ノ申込書ヲ差出スヘシ

但他人所有ノ家屋又ハ地所内ニ電話器ノ設置ヲ要スルモノハ其所有者ノ承諾書ヲ添付スヘシ

第四款 鐵道

布告 明治五年五月四日第六十一號布告鐵道略則別紙ノ通改正條條此旨相違候事

但開局日限ノ儀ハ治定ノ上追テ可相違候事

鐵道略則

第一條 賃金ノ事

何人ニ不限鐵道ノ列車ニテ旅行セント欲スル者ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ルヘシ然ラサレハ決シテ列車ニ乗ル可ラス

第二條 手形検査及渡方ノ事

手形検査ノ節ハ改テ受ケ取集ノ節ハ渡スヘシ若シ検査ノ節手形ヲ出サス或ハ取集ノ節手形ヲ渡サ、ル者ハ更ニ最初發車ノ「ステーション」(ステーショントハ列車ノ立場ニテ旅客ノ乗リ下リ荷物ノ積ミ下口シヲ爲ス所ヲ云フ)ヨリノ賃金ヲ拂ハシムヘシ尤途中ヨリ乗來リシ者ニテ其確證判然タル時ハ其乘リタル場所ヨリノ賃金ヲ拂ハシムヘシ

第三條 途中(ステーション)ニテ乗組並手形ノ事

途中「ステーション」ニ於テハ列車中餘地ノ有無ニ應シテ乘リ組ムコトヲ得ヘシ若シ其手形ヲ買取リシ

總人數ヲ容ルヘキ餘地ナキ時ハ其中ニテ最遠キ地ニ赴ク手形所持ノ人丈ク先ツ乗込ムコトヲ得ヘシ若シ又同里程ノ地ニ赴ク客數人アル時ハ其手形ノ番號ノ順序ヲ以テ乗ルコトヲ得ヘシ

第四條 偽欺ノ者扱方ノ事

何人ニ不限賃金ヲ拂ハス列車ニテ旅行セント計リ或ハ遂ニ旅行シ又ハ拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乘テスシテ更ニ上等ノ車ニ乘リ組又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ至リ遂ニ其賃金ヲ免レント計リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルヘキ場所ニ到リナカラ車ヨリ下リ去ルコトヲ肯セス其外如何ナル仕方ニテモ賃金拂方ヲ逃ントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシ

第五條 列車運轉中出入禁止ノ事

總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルコト又ハ車内旅客ノ居ルヘキ場所ノ外ニ乗ルコトヲ禁ス

第六條 抱瘡等ノ病人ヲ禁止スル事

抱瘡及諸傳染病ヲ煩フ者ハ乘車ヲ禁ス若シ此等ノ病人車中ニ在ラハ見當リ次第鐵道掛リノ者ヨリ車外竝ニ鐵道構外ヘ退去セシムヘシ

第七條 吸烟茹婦人部屋男子出入禁止ノ事

何人ニ限ラス「ステーション」構内吸烟ヲ禁セシ場所竝ニ吸烟ヲ禁セシ車内ニテ吸烟スルコトヲ許サス且婦人ノ爲ニ設アル車及部屋等ニ男子妄リニ立入ルヲ許サス若右等ノ禁ヲ犯シ掛リノ者ノ戒ヲ用ヒサル者ハ車外竝ニ鐵道構外ニ直ニ退去セシムヘシ

第八條 醉人及不行狀人扱方ノ事

何人ニ不限總テ列車乘組中又ハ「ステーション」竝鐵道構内ニテ醉ニ乘シ忘狀ヲ現ハス者又ハ不良ノ行狀ヲ爲ス者ハ鐵道掛ノ者ヨリ車外及鐵道構外ヘ直ニ退去セシムヘシ

第九條 鐵道ニ屬スル物品ヲ毀損スル時ノ事

何人ニ不限限リニ「ステーション」其他鐵道構内ニ標識揭示セル書附等ヲ割シ或ハ破リ又ハ列車ノ番號札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建築柵欄其他鐵道一切ノ附屬品ヲ毀損スル者ハ都テ法ニ隨テ

處置スヘシ

第十條 機關車等へ乗込ヲ禁スル事

機關方竝火夫ノ外ハ其筋ノ許シヲ得スシテ機關車又ハ炭水車ニ乘リ或ハ乘ラント爲ス可ラス且車長及車掛ノ者ノ外其筋ノ許シヲ得スシテハ荷物車又ハ旅客ノ爲ニ設サル車ニ乘リ又ハ乘ラント爲スヘカラス若シ此禁ヲ犯鐵道掛ノ者ノ制止ヲ用ヒサル者ハ直ニ其場ヨリ退去セシムヘシ

第十一條 鐵道地所へ妄リニ立入者取扱方ノ事

何人ニ不限「ステーション」又ハ鐵道構内へ妄リニ立入者ハ鐵道掛ノ者ヨリ即刻構外ヘ立去ラシム

第十二條 旅客ノ荷物紛失毀損取扱方ノ事

旅客手廻リ荷物其外所持ノ品タリト總テ之カ爲ノニ別段ニ賃金ヲ拂ヒ其受取證書ヲ取置カサレハ若シ紛失毀損等アルトモ政府ニ於テ關係セサルヘシタトヒ賃金ヲ拂ヒ證書ヲ取置トモ其毀損紛失等ノ償ハ只旅客自用衣服ノミニ止リ且償金モ五拾圓ニ過ルコトナシ

第十三條 高金及大切ノ物品紛失毀損ニ関不開アル事

金銀紙貨幣便切手(爲替會社通用券)爲替手形約定證書金銀請掛證書地所建築家活券諸繪圖書古器金銀玉石鍍金及諸彫錫細工物時計類其餘衣類或ハ玩物ノ粧飾ニ混作品類及硝子器類陶器漆器酒類醬醃類繭絹布生熟糸等ノ品物運送方ニ付テハ其品柄竝價高等ヲ明白ニ其掛へ申立テ増賃金ヲ拂ヒ紛失毀損等請合シ分ノ外ハ總テ政府ニ於テ之ヲ償ハス

第十四條 牛馬獸類運送ノ事

牛馬及其他ノ獸類ヲ運送スルニ其持主或ハ送り人ヨリ其獸類ノ價ヲ運送掛へ申出相當ノ増賃金ヲ拂ヒ請合證書ヲ取置クヘシ若シ増賃金ヲ拂ハス請合ヲ爲サル分ハ如何程高價ノ獸類紛失損害アルトモ牛一疋金二十圓以上馬一疋或ハ乳牛一疋ニ金五十圓以上羊或ハ豚一疋ニ金五圓以上ヲ政府ニ於テ償フコトナシ

第十五條 砲發ヲ禁スル事

何人ニ不限車内ハ勿論鐵道線及其他構内ニテ砲發スルヲ禁ス

第十六條 爆發質アル危害物運輸ヲ禁スル事

鐵道資ヨリ追テ公告スルマテハ火藥及「ヒトローリヤム」「ケロシン、マイル」「トルベンタイ」(石

炭油等ヲ云)硝性並ニ爆發質燃燒質等ノ物品ハ運輸セサルヘシ

第十七條 荷物目錄ヲ渡スヘキ事

運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛ノ者ヘ引渡シ又ハ請取ノ度毎ニハ右荷主或ハ宰領人ヨリ其品概數量及姓名ヲ記シテ掛リノ者ヘ差出スヘシ

第十八條 物品並畜類損害方定限ノ事

鐵道ニテ運送スル物品並畜類紛失損害アリトモ鐵道掛ノ怠惰疎漏ヨリ起リシニ非レハ政府ニ於テ之ヲ償フコトナシ

第十九條 荷物運送賃金ノ事

何人ニ不限荷物運賃ノ催促ヲ受テ尚拂ハサル時ハ其荷物ノ全部又ハ部分ヲ留置キ若又其荷物既ニ他所ニ運送セシ時ハ其後同人附屬ノ荷物鐵道掛ヘ送來ルコトアル時ハ之ヲ留置キ同人ヘ告知ラセタル上ニテ金高程ノ品ヲハ私公賣シ其滞金ト諸入費トヲ引取殘金殘品ヲ同人ヘ返スヘシ又時宜ニヨリ右ノ取計ヒヲ爲サス法官ニ訴ヘテ賃金並入費等ヲ取立ルコトモアルヘシ

第二十條 規則ニ從ハサル者ノ事

何人ニ不限諸事前條ノ規則ニ隨ハズンハ乘車及荷物ノ運送ヲ許サルヘシ

第二十一條 規則等ノ變革布達ノ事

此規則中變革及加除アルトキハ逕グ告達スヘシ

第二十二條 荷物運送引請方ノ事

諸荷物ノ運送ヲ引請ルコトハ列車中餘地イ有無ニ應スヘシ

第二十三條 此規則ヲ施行スルカ爲メニ夫々法官ニ訴ヘ犯罪人罰シ方等ノ裁判ヲセテ手順ハ鐵道頭或ハ鐵道支配人間ニテ其取扱アルヘシ

第二十四條 旅客並荷物ノ運賃ハ時宜ニ隨ヒ變革アルト雖トモ其變革毎ニハ二週日前ニ告達スヘシ尤鐵道頭鐵道支配方及運輸頭取ノ間ニ於テ前條ノ如キ告達ナク臨時ニ常例ヨリ下等ノ運賃ヲ以テ別ニ列車ヲ仕立ルコトモアルヘシ

第二十五條 此規則來ル五月七日ヨリ施行スヘシ

布告 明治六年三月十日 壬申第四百四十七號布告鐵道犯罪罰例別紙ノ運改正相成候條此旨相違候事

鐵道犯罪罰例

第一條 鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ關カル事務取扱中醉ニ乘シ無狀ヲ現ハスニ於テハ二十五圓以内ノ罰金ニ處シ若シ其職業怠惰輕忽ニヨリ鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱アルトキハ其事情ニ依リ五百圓以内ノ罰金又ハ三月以内ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス

第二條 規則第四條ニ記スル處ノ不法ヲ爲ス者ハ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス

第三條 規則第五條ノ禁ヲ犯ス者ハ十圓以内ノ罰金ニ處ス

第四條 規則第六條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ没シ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第五條 規則第七條ノ禁ヲ犯ス者ハ拂ヒタル賃金ヲ没シ十圓以内ノ罰金ニ處ス

第六條 規則第八條ニ記セル所行ヲ爲ス者ハ拂タル賃金ヲ没シ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス

第七條 規則第九條ニ記スル所ノ不法ヲ爲ス者ハ五十圓以内ノ罰金又ハ六週間以内ノ懲役或ハ禁獄ニ處ス

第八條 規則第十條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第九條 規則第十一條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁獄ニ處ス

第十條 規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス

第十一條 規則第十七條ニ記スル處ノ諸荷物品書其外ヲ故ラニ出サス或ハ故ラニ欺偽ノ品物書ヲ出ス者ハ三箇月以内ノ懲役又ハ禁獄或ハ其物品壹噸(千七百斤ヲ云)毎ニ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス壹噸以下ハ拾圓以内尤一罰ノ贖金高五百圓ニ過キス

第十二條 鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照シ罰ヲ科スルノ外其毀損物ノ代價ヲ償ハシムルコトアルヘシ
 但其償金ノ追徴モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フトキハ法官ニ於テ追徴スヘシ
 勅令^{明治二十年五月}朕私設鐵道條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム(條例略之)
 布告^{明治十六年七月}明治五年(五月)第四百四十六號布告鐵道略則及同六年(三月)第一百號布告鐵道犯罪
 罰例ハ私設鐵道ニモ適用ス

第十七章 狩獵

勅令^{明治二十五年十月}朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ狩獵規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 狩獵規則

第一章 獵具獵法

- 第一條 此規則ニ於テ狩獵ト稱スルハ銃器、各種ノ網、放鷹、粘繩又ハ撲ヲ以テ鳥獸ヲ捕獲スルヲ謂フ
 前項各獵具ノ種類及制限ハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 第二條 爆發物、掘銃若クハ危險ナル民及陷奔ヲ以テ狩獵ヲ爲スコトヲ得ス
 前項ノ外ノ獵具獵法ニシテ第一條ニ掲ケサルモノニ就テハ地方長官(東京府下ハ警視總監以下倣之)ハ
 農商務大臣ノ認可ヲ經テ便宜取締規則ヲ設クルコトヲ得
- 第三條 日出前、日没後又ハ市街、人家稠密ノ場所、衆人群集ノ場所ニ於テ若クハ銃丸ノ達スヘキ處アル
 建物船舶、流車ニ向テ銃獵ヲ爲スコトヲ得ス
- 第四條 左ニ掲ケル所ノ場所ニ於テハ狩獵ヲ爲スコトヲ得ス
 - 一 御獵場
 - 二 禁獵制札アル場所
 - 三 公道
 - 四 公園

五 社寺境内

六 墓地

七 柵、柵、圍障ヲ設ケ又作物植付アル他人ノ所有地但所有者又ハ管理人ノ承諾ヲ得タルトキハ此限ニ
 在ラス

第五條 地方長官ハ土地所有者ノ出願又ハ其他ノ理由ニ因リ必要ト認ムル場合ニ於テハ禁獵制札ヲ建ツル
 コトヲ得

第二章 狩獵免許

第六條 狩獵ヲ爲サント欲スル者ハ地方長官ニ願出テ免許ヲ受クヘシ但柵、柵、圍障アル宅地内ニ於テ銃
 器ヲ使用セスシテ狩獵ヲ爲ス者ハ此限ニ在ラス

第三十條ノ處罰ヲ受ケタル者ハ滿一箇年ヲ經過セサレハ再ヒ免許ヲ受タルコトヲ得ス

第七條 免許ヲ分チテ職獵免許、遊獵免許トシ更ニ分チテ各甲乙ノ二種トス

職獵免許ハ生計ノ爲ニ狩獵ヲ爲ス者ニ下付シ遊獵免許ハ遊樂ノ爲ニ狩獵ヲ爲ス者ニ下付スルモノトス
 甲種免許ハ銃器ヲ使用セスシテ狩獵ヲ爲ス者ニ下付シ乙種免許ハ銃器ヲ以テ狩獵ヲ爲ス者ニ下付スルモ
 ノトス

第八條 左ニ掲ケル者ハ職獵免許ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 判任以上ノ官吏及其待遇ヲ受クル者
- 二 所得稅ヲ納ムル者
- 三 地租拾五圓以上ヲ納ムル者
- 四 所得稅拾五圓以上ヲ納ムル者ノ家族

第九條 免許ヲ受クル者ハ左ノ區別ニ從ヒ免許料ヲ納ムヘシ

職獵免許	甲種	金五拾錢	乙種	金壹圓
遊獵免許	甲種	金五圓	乙種	金拾圓

第十條 甲種免狀ノ有効期限ハ十月十五日ヨリ滿一箇年トシ乙種免狀ノ有効期限ハ十月十五日ヨリ翌年四月十五日マデトス

第十一條 免狀ノ使用ハ免許本人ニ限ルモノトス但甲種職獵免狀ヲ有スル者ハ助手トシテ無免狀ノ者三人以下ヲ同伴スルコトヲ得

第十二條 獵者ハ出獵ノ際必ス免狀ヲ携帶スヘシ

警察官、憲兵、森林官及市町村長ハ獵者ノ免狀ヲ検査スルコトヲ得獵區管理人其管理スル獵區内ニ於テモ亦同シ

前項ノ場合ニ於テ獵者ハ免狀ノ検査ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 免狀ヲ亡失シタルトキハ其地ノ所轄警察署及當所之ヲ下付シタル官廳ニ届出ツヘシ

免狀ヲ亡失シ若クハ毀損シタルトキハ其再渡又ハ書換ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ手数料金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第十四條 十六歳未滿ノ者ハ乙種ノ免狀ヲ受クルコトヲ得ス

第十五條 免狀ハ其效カヲ失ヒタル日ヨリ三十日以内ニ當初之ヲ下付シタル官廳ニ返納スヘシ

第三章 獵區設定

第十六條 日本臣民ニシテ獵區ヲ設定セント欲スル者ハ十箇年以内ノ期限ヲ定メ地方長官ヲ經由シテ農商務大臣ニ願出テ免許ヲ受クヘシ

獵區ノ設定ニ關スル制限農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 官有ノ森林、原野、水面ヲ借用シテ獵區ト爲サント欲スル者ハ管轄官廳ニ願出テ許可ヲ受クヘシ

獵區設定ノ場所他人ノ所有ニ係ルトキハ先ツ其所有者又ハ管理人ノ承諾ヲ受クヘシ

第十八條 一獵區ノ面積ハ千五百町歩ヲ以テ最大限トシ一箇年金拾圓ノ割ヲ以テ免許料ヲ納ムヘシ連續ノ面積最大限ヲ越ユルトキハ其越ユル所百町歩マテ每一箇年金壹圓ノ割ヲ以テ免許料ヲ増納スヘシ

農商務大臣ハ土地ノ情况ニ因リ前項ノ免許料ヲ低減スルコトヲ得

第十九條 獵區内ニ於テハ免許本人及其承諾ヲ受ケタル者ノ外狩獵ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條 獵區内ト雖モ免狀ヲ有スル者ニ非サレハ狩獵ヲ爲スコトヲ得ス

第二十一條 獵區ヲ廢シ又ハ其區域ヲ減縮スルトキハ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ届出ツヘシ

第二十二條 農商務大臣ハ免許本人此規則ニ違背シタルトキ若クハ第十六條第二項ノ制限ニ從ハサルトキ又ハ公益ニ害アリト認ムルトキハ其獵區ノ全部若クハ一部ニ對シテ免許ヲ取消スコトヲ得

第二十三條 第二十一條及第二十二條ノ場合ニ於テ既納ノ免許料ハ還付セサルモノトス

第四章 鳥獸保護

第二十四條 左ニ掲グル鳥獸ハ捕獲スルコトヲ禁ス

- 鶴 各種
- 燕 各種
- 雲雀
- 鶉 各種
- 四雀
- 日雀
- 五十雀
- 草雀
- 鶉 各種
- 杜鵑
- 啄木鳥
- 鶉 各種
- 椋鳥
- 田鶉

一 一歲以下ノ鹿

第二十五條 左ニ掲グル鳥獸ハ三月十五日ヨリ十月十四日マテヲ保護期トシ其期間捕獲スルコトヲ禁ス

- 一 雉
- 二 鶉
- 三 鶉
- 四 鶉
- 五 鶉
- 六 鶉
- 七 鶉
- 八 鶉
- 九 鶉
- 十 鶉
- 十一 鶉
- 十二 鶉
- 十三 鶉
- 十四 鶉
- 十五 鶉
- 十六 鶉
- 十七 鶉
- 十八 鶉
- 十九 鶉
- 二十 鶉
- 二十一 鶉
- 二十二 鶉
- 二十三 鶉
- 二十四 鶉
- 二十五 鶉
- 二十六 鶉
- 二十七 鶉
- 二十八 鶉
- 二十九 鶉
- 三十 鶉
- 三十一 鶉
- 三十二 鶉
- 三十三 鶉
- 三十四 鶉
- 三十五 鶉
- 三十六 鶉
- 三十七 鶉
- 三十八 鶉
- 三十九 鶉
- 四十 鶉
- 四十一 鶉
- 四十二 鶉
- 四十三 鶉
- 四十四 鶉
- 四十五 鶉
- 四十六 鶉
- 四十七 鶉
- 四十八 鶉
- 四十九 鶉
- 五十 鶉

地方長官ハ土地ノ情況ニ因リ農商務大臣ノ認可ヲ經テ適宜三十日以内前項ノ期限ヲ紳縮スルコトヲ得

第二十六條 第二十四條及第二十五條ニ掲グル鳥獸ト雖モ野獵飼養ノ保護學術研究其他特別ノ理由ニ因リ驅除スルハ要スルトキハ地方長官ハ特ニ其許可ヲ與フルコトヲ得

第二十七條 捕獲ヲ禁セサル鳥獸ト雖モ特ニ保護ヲ要スルトキハ農商務大臣ハ此規則ニ拘ハラズ其捕獲ヲ停止スルコトヲ得

第二十八條 第二十四條及第二十五條ニ掲グル鳥類ノ卵又ハ雛ヲ取り若クハ之ヲ買置スルコトヲ禁ス

第二十九條 第六條第一項及第二十條ニ違背シテ狩獵ヲ爲シ又ハ第十四條ニ違背シテ乙種免許ヲ受ケタル者三回以上三十圓以下ノ罰金ニ處シ第八條ニ違背シテ獵獵免許ヲ受ケタル者ハ七圓以上七十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 第二條第一項、第三條、第四條第一乃至第六ニ違背シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 第四條第七、第十二條第一項第三項、第二十四條、第二十五條第一項、第二十八條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但第四條第七ニ付テハ土地所有者又ハ管理人ノ告訴ヲ待テ處斷ス

第三十二條 第十三條第一項、第十五條、第二十一條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

附則 第三十三條 此規則ハ明治二十五年十月十五日ヨリ施行ス但銃器ヲ使用セサル狩獵ノ免許ハ明治二十六年十月十五日ヨリ施行ス

第三十四條 明治十年(一月)第十一號布告鳥獸獵規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十八章 訴訟

第一款 出訴期限

布告明治六年十一月五號金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ビ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所ヘ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ適合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタシ候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉任又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ專柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ビタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料

- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
- 一 明女藝者ノ場代金
- 右ハ六ヶ月限

第二條

- 一 醫師ノ診診及ヒ藥料
- 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
- 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
- 一 一ヶ年期マテノ奉養人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
- 一 小作米金
- 一 證據金
- 一 敷金
- 一 物品ノ借賃又ハ損料
- 一 養育料
- 一 七ヶ年期マテノ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及一生涯ノ年金
- 右ハ五ヶ年限

第四條

一 條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカテサル事

第五條

一 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事
但明治五年壬午第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

第二款 利息制限

布告 明治十年九月十日利息制限法左之通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息ハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニノ元金百圓以下ハ一年ニ付百分ノ二十(二割)百圓以上千圓以下百分ノ十五(一割五分)千圓以上百分ノ十二(一割二分)以下トス若シ此制限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息ハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサル所ニ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アル所ニ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フル所ハ債權主ヨリ債主ニ對シ若干ノ罰金罰金違約金料料等差出スルキヲ約定スルコトアル所概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害補償ニ不當ナリト思置スル所ハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

第十九章 勸業

第四回内國勸業博覽會事務告示 明治二十六年九月八日第一號 第四回内國勸業博覽會規則左ノ通相定ム

第一章 總則

第一條 第四回内國勸業博覽會ハ明治二十六年勸令第十六號ニ依リ明治二十八年四月一日ヨリ七月三十一日マテ京都市上京區岡崎町ニ開設ス

第二條 本會ノ出品ハ内國産ニシテ別ニ所定ノ部類目錄ニ適合スルモノニ限ル但左ニ掲ケルモノハ出品スルヲ許サズ

一 内外國博覽會若クハ共進會ニ出品シ審査ヲ受ケタルモノ

二 明治二十二年十二月以前ノ採取、産出又ハ製造ニ係ルモノ但牛馬ニ限り明治二十二年一月以後産出ノモノヲ出陳スルコトヲ得

三 明治二十三年一月以後ノモノト雖モ死亡シタル者ノ採取、産出又ハ製造ニ係ルモノ

四 發火及爆發性ノモノ、他ノ出品ニ損害ヲ與フルノ虞アルモノ、衛生ニ害アルモノ及汚穢醜體ノモノ

第三條 第二條ノ規程ニ抵触セサル物品ト雖モ其性質、種類ニ依リ地方長官又ハ事務局ハ其出品ヲ許可セサルコトアルヘシ

第四條 外國品ト雖モ參考ニ必要アルモノハ本出品ニ添へ出陳スルコトヲ得但形體巨大ノモノ及多數多量ヲ出陳スルコトヲ得ス

第五條 各種ノ專門ニ屬スル學校ノ製作物ハ出品スルコトヲ得ルト雖モ學生ノ成績物ハ出品スルコトヲ許サズ

第六條 出品ヲ大別シテ左ノ七部ト爲ス部中ノ類別ハ部類目錄ヲ以テ之ヲ定ム

- 第一部 工業
- 第二部 美術及美術工藝
- 第三部 農業、森林及園藝
- 第四部 水産
- 第五部 教育及學術
- 第六部 鑛業及冶金術
- 第七部 機械

第七條 出品陳列ノ爲メ左ノ六館ヲ設ケ毎館府縣別ヲ以テ陳列ス但美術館及動物館ハ部類別ヲ以テ陳列ス

工業館 (第一部、第五部及第六部)

美術館 (第二部)

農林館 (第三部)

動物館 (第三部ノ内)

水産館 (第四部)

機械館 (第七部)

第八條 動物館ハ明治二十八年五月一日ヨリ同十五日マテ及五月二十六日ヨリ六月九日マテ兩度ニ之ヲ開ク

第九條 出品陳列ノ面積ハ事務局ニ於テ之ヲ定メ道廳府縣ニ配付スヘシ其割合ハ追テ告示ス

第十條 事務局ハ出品陳列ノ都合ニ依リ前條ノ面積ヲ増減變更シ又ハ出品ノ部類ヲ變更セシムルコトアルヘシ

第十一條 本會ニ出品セント欲スルモノハ地方長官ニ願出ヘシ地方長官ハ本會ノ諸規則ニ照シ適當ト認ムルトキハ之ヲ許可シ甲號書式ニ依リ出品目錄ニ通テ作り明治二十七年八月二十日限り其廳ヲ發シ事務局ニ差出スヘシ

第十二條 第二部ノ出品ハ事務局ニ於テ鑑別許否ヲ但鑑別許否ニ對シテハ總テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第二部出品ハ事務局ニ於テ鑑別ノ上其部類ヲ變更シ出品セシムルコトアルヘシ

第三部出品ハ乙號書式ノ願書ニ通テ地方長官ニ差出スヘシ地方長官ハ其願書ヲ取極メ明治二十八年一月

三十一日限り其廳ヲ發シ事務局ニ差出シ且出品人ヲシテ同期限内ニ其現品ヲ發送セシムヘシ

前項現品發着其他ノ事務ハ其管屬委員又ハ出品人代理人ニ於テ取扱フヘシ

第十三條 出品ノ許可ヲ受ケタル者ハ丙號書式ニ依リ出品解説書一通ヲ作り地方長官ニ差出スヘシ地方長

官ハ之ヲ取極メ明治二十八年三月十五日限り其廳ヲ發シ事務局ニ差出スヘシ

第十四條 地方長官ノ許可ヲ經タル出品ト雖モ事務局ニ於テ第二條及第四條ノ規程ニ抵触スルト認ムルト

キハ陳列ヲ拒ミ又ハ陳列後撤去セシノ其過量ト認ムルモノハ減少セシムルコトアルヘシ

第十五條 左ニ掲ケルモノハ事務局ニ於テ其數ヲ限り之ヲ設備ス

- 一 飾臺、飾箱
- 二 陳列用階子、踏臺
- 三 府縣別ノ標札
- 四 機械運轉ニ要スル電氣力
- 五 鉅重ノ物品陳列ニ要スル基礎ノ構造
- 六 長大ノ物品陳列ニ要スル雨覆ノ類
- 七 在場中動物ノ飼料及之ニ要スル器具
- 第十六條 左ニ掲ケルモノハ出品人ニ於テ之ヲ自辦スヘシ
 - 一 出品ノ荷造及運送費
 - 二 事務局配付ノ數以外ニ要スル飾臺、飾箱並ニ自己ノ望ニ依リ調製スル分ノ製造費
 - 三 飾臺及飾箱ニ用フル桐板及鋪布其他陳列品ノ粧飾費

四 陳列品及其周圍掃除ニ要スル諸費、
 五 各種ノ付札及機械用付屬品、
 六 前數項ノ外第十五條ニ掲ケサル諸費、
 第十七條 機械館所要ノ外各館内ニ於テ用火ヲ禁ス、
 第十八條 陳列品ハ事務局ニ於テ相當ノ保護ヲ爲スト雖モ萬一天災火災盜難其他ノ事故ニ依リ破損紛失スルトキハ事務局其責ニ任セス、
 第十九條 陳列品ハ賣買約定ヲナスコトヲ得但機械ノ効用ヲ示スカ爲メ製出スル物品ノ外ハ開會中ニ之ヲ場外ニ搬出スルコトヲ許サス、
 第二十條 看守人ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ陳列品ニ觸ル、コトヲ許サス、
 第二十一條 出品人ノ承諾ヲ得事務局ノ許可ヲ得ルニアラサレハ陳列品ヲ寫眞シ又ハ模寫スルコトヲ許サス但會場内ノ景狀ヲ寫眞シ又ハ模寫セント欲スル者ハ事務局ノ許可ヲ受クヘシ、
 第二章 出品
 第二十二條 左ニ掲グル出品ハ目方、面積及需用ノ馬力等各其要領ヲ記シ明治二十七年三月三十一日マテニ地方廳ヲ經テ事務局ニ届出ヘシ、
 一 機械ノ運轉ヲ示ス爲メニ電氣力ヲ要スルモノ、
 二 鉅重ノ物品ニシテ特ニ基礎ノ構造ヲ要スルモノ、
 第二十三條 出品ノ搬入及陳列ハ明治二十八年二月一日ヨリ同三月二十五日マテトシ其搬出ハ開場後三十日以内トス但植物及生果物類ハ其季節ニ隨ヒ出陳シ一週間ノ後搬出スルコトヲ得、
 第二十四條 馬匹ハ明治二十八年四月二十五日ヨリ同三十日マテニ搬入五月十六日ヨリ同二十日マテニ搬出セシメ其他ノ動物ハ五月二十一日ヨリ同二十五日マテニ搬入六月十日ヨリ同十四日マテニ搬出セシムヘシ但傳染病ノ虞アリト認ムルトキハ搬入ヲ差止メ若クハ搬出セシムヘシ、
 第二十五條 出品人ハ出品人心得ノ規程ニ依リ毎品ニ各種ノ付札ヲナスヘシ

第二十六條 陳列品ノ價格ハ一旦掲示シタル後事務局ノ許可ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス、
 第二十七條 出品中現品ノミニテ其性腐効用ヲ示シ難キモノハ便宜說明書ヲ添フヘシ、
 第二十八條 陳列品ノ位置ヲ變更シ陳列場所ヲ轉換、改造シ又ハ土工ヲ要スルトキハ事務局ノ許可ヲ受クヘシ、
 第二十九條 陳列中腐敗又ハ融解等ノ爲メ他ニ妨害アリト認ムルモノハ搬出セシムヘシ、
 本條ニ依リ搬出ヲ命セラレタルモノニ限リ更ニ同種ノ物品ヲ出陳スルコトヲ得、
 第三十條 陳列品ハ各出品人ニ於テ便宜之ヲ看守スヘシ、
 第三章 來觀
 第三十一條 來觀時間ハ毎日午前八時ヨリ午後五時マテトス但都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ來觀ヲ停止スルコトアルヘシ、
 第三十二條 來觀人ハ入場券ヲ携フヘシ入場券ハ一人一枚ニ限ル但滿五年以下ノ者ハ之ヲ要セス、
 第三十三條 入場券ハ左ノ三種トス、
 一 日曜日入場券 紅色 壹枚代價金拾錢
 一 土曜日同 白色 同 金三錢
 一 平日同 青色 同 金五錢
 入場券ハ入場ノ際門衛ニ渡スヘシ、
 第三十四條 瘋癲又ハ醉狂者ト認ムルトキハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムヘシ、
 第四章 審査
 第三十五條 出品ハ左ニ掲グルモノ、外總テ審査ヲ爲スモノトス其審査ハ開會當日ヨリ始メ六月二十日ニ終ル、
 一 添出品
 二 第二十三條但書ノ出品ニシテ六月二十日以後ニ係ルモノ

三 官廳出品

第三十六條 出品ノ再審査ヲ請ヒ又ハ授與ノ褒賞ヲ拒ムコトヲ許サズ又審査ノ決定ニ對シテハ總テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第五章 褒賞

第三十七條 出品中優等ノモノニ對シ其出品人ニ褒賞ヲ授與ス出品人ト異ニシ若クハ協贊人アルトキハ其一人又ハ各人ニ授與スルコトアルヘシ
褒賞ハ左ノ七種トナス
但一人ニテ數部類ニ出品シ其出品各優等ニシテ同種ノ褒賞數箇ヲ受クヘキトキハ證據數枚ヲ授與シ賞牌ハ一箇ヲ授與ス

一 名譽賞牌 金製

全國ニ冠絶シ名譽ヲ海外ニ輝カスニ足ルヘキ出品ヲナシタル者ニ與フ

一 同 銀製

全國ニ冠絶シ衆人ノ模範トスルニ足ルヘキ出品ヲナシタル者ニ與フ

一 進歩賞牌 銅製 自一等至三等

發明改良等ニ因リ進歩ノ著キ出品ヲナシタル者ニ與フ

一 妙技賞牌 銅製 自一等至三等

美術ノ優等ナル出品ヲナシタル者ニ與フ

一 有功賞牌 銅製 自一等至三等

物産ヲ増シ販路ヲ弘メ估價ヲ低クシ便益ノ機械、器具ヲ適用シ又ハ模造務植セシ等ニ因テ功勞アル出品ヲナシタル者ニ與フ

一 協贊賞牌 銅製 自一等至三等

物品ノ採集考索ノ指示又ハ出品ノ製産ニ與カリ協贊ノ功アル者ニ與フ

一 褒狀

前記ノ諸項ニ次クヘキ出品ヲナシタル者ニ與フ
第三十八條 褒賞授與式ハ明治二十八年七月十一日トス

第四回内國勸業博覽會事務局告示
第四回内國勸業博覽會賣店規則

第一條 本會用地内ニ賣店ヲ設ケント欲スル者ハ本會出品人ニ限リ之ヲ許可ス

第二條 賣店ヲ設ケント欲スル者ハ販賣品ノ種類及所要ノ地坪家作設計等ヲ取調圖面ヲ添ヘ明治二十七年十二月三十一日限リ地方廳ヲ經テ事務局ヘ願出ヘシ

第三條 賣店ノ地所ハ無税ニテ貸與スヘシ

第四條 賣店開設出願多數ナルトキハ事務局ニ於テ其地坪ヲ道廳府縣ニ割當テ之ヲ配付スヘシ

第五條 賣店ノ建築造作及一切ノ裝飾ハ事務局ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 賣品ニハ定價札ヲ付スヘシ之ヲ付シ難キトキハ店前見易キ所ニ定價表ヲ掲クヘシ

第七條 賣品ハ自己ノ出品物ト同種類ノモノニ限ル

第八條 烟草其他成規アルモノ、販賣ハ總テ其成規ニ遵フヘシ

第九條 賣店開設人若クハ雇人ハ強テ物品ヲ購買ヲ促スコトヲ得ス

第十條 賣店及其通路竝ニ周圍ハ常に清潔ニ掃除スヘシ

第十一條 賣店ニハ晝夜相當ノ看守人ヲ置キ火ノ元其他嚴密ニ取締ヲ爲スヘシ但看守人ノ外宿泊セシムヘカラス

第十二條 賣店ノ開店時間ハ毎日午前六時ヨリ午後十時マテトス

第十三條 賣店一週間以上休店スルトキハ其敷地ヲ返還セシムルコトアルヘシ

第十四條 賣店ハ本會開場當日ヨリ閉場後十五日マテ開店スルコトヲ許ス但閉店ノ後十五日以内ニ取拂ヒ

事務局ノ検査ヲ受テ敷地ヲ返還スヘシ
 第十五條 營業ニ關スル諸般ノ成規又ハ本規則ニ背戻スルトキハ賣店ノ開設ヲ停止シ若クハ開店セシムルコトアルヘシ
 第十六條 賣店ノ賣上取置及金高ハ一種類毎ニ調査シ閉會後一週日以内ニ事務局ニ届出ヘシ
 第十七條 賣店開設人ノ諸顧問等ハ所轄管廳委員ヲ經由シテ事務局ニ差出スヘシ但至急ヲ要スルモノハ此限ニアラス

第二十章 鑛業

法律明治二十三年九月二日朕鑛業條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 鑛業條例

第一章 總則

第一條 鑛業トハ鑛物ノ試掘採掘及之ニ附屬スル事業ヲ謂フ
 第二條 鑛物ノ未タ採掘セサルモノハ國ノ所有トス
 此ノ條例ニ於テ鑛物トハ金鑛(砂金ヲ除ク)銀鑛、銅鑛、鉛鑛、錫鑛(砂錫ヲ除ク)安質母尾鑛、水銀鑛、鉍鑛、鐵鑛(砂鐵ヲ除ク)硫化鐵鑛、滿銻鑛、砒鑛、黑鉛、石炭、石油及硫黃ヲ謂フ
 第三條 帝國臣民ニ非サレハ鑛業人トナリ又ハ鑛業ニ關スル組合員又ハ會社ノ株主トナルコトヲ得ス
 鑛業人未成年瘋癲白痴又ハ瘡癩ナルトキハ後見人ヲ立ツヘシ
 第四條 農商務省鑛山局及鑛山監督署ノ官吏ハ在職中鑛業人トナリ又ハ鑛業ニ關スル組合員又ハ會社ノ株主若ハ役員トナルコトヲ得ス
 第五條 此ノ條例ニ依リ鑛業特許取消ノ處分ヲ受ケタル鑛業人ハ同鑛區ニ付一箇年間採掘ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス
 第六條 二人以上共同シテ鑛業ヲ爲ストキハ總代一名ヲ選定シ豫メ所轄鑛山監督署ニ届出ツヘシ

總代ハ鑛業上ニ關シ政府ニ對シテ共同鑛業人ヲ代表スルモノトス

第七條 共同鑛業人ノ變更、採掘權ノ賣買、讓與、書入及廢業區等ニハ總代ノ外少クモ共同鑛業人過半数ノ連署ヲ要ス

第二章 試掘及採掘

第八條 試掘ヲ爲サント欲スル者ハ其ノ願書ニ試掘地ノ圖面ヲ添へ所轄鑛山監督署長ニ差出シ其ノ認可ヲ受クヘシ

第九條 試掘ハ認可ノ日ヨリ一箇年ヲ限トス

試掘人前項ノ期限内ニ於テ其ノ事業ヲ竣へ難キ事實アルトキハ所轄鑛山監督署長ニ延期ヲ出願スルコトヲ得
 所轄鑛山監督署長ハ其ノ事實ヲ調査シ已ムヲ得サルモノト認ムルトキハ一箇年以内ノ延期ヲ認可スルコトヲ得

第十條 試掘ニ依リ採取シタル鑛物ハ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ得テ之ヲ販賣スルコトヲ得

第十一條 前條ニ依リ鑛物ヲ販賣シタルトキハ三十日以内ニ其ノ販賣代價百分ノ一ヲ所轄鑛山監督署ニ納ムヘシ

前項ノ金額ヲ其ノ期限内ニ納メサル者ハ國稅滯納處分法ニ依リ處分ス

第十二條 採掘ノ特許ヲ得ント欲スル者ハ採掘願書ニ鑛區圖ヲ添へ農商務大臣宛ニテ所轄鑛山監督署ニ差出スヘシ

採掘願書及鑛區圖ヲ同時ニ差出シ難キトキハ願書ノミヲ差出シ置キ鑛區圖ハ願書ノ日附ヨリ五十日以内ニ之ヲ差出スコトヲ得此ノ期限内ニ差出サルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第十三條 採掘ヲ出願スル者ハ出願地ニ其ノ採掘セントスル鑛物ノ存在スルコトヲ證明スヘシ

第十四條 鑛山監督署長ハ鑛物ノ存在ヲ認定スル爲ニ吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト認ムルトキハ採掘出願人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ旅費日當ヲ前納セシムヘシ

採掘出願人前項旅費日當納付ノ通知ヲ受ケ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ納メサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第十五條 鑛山監督署ニ於テハ試掘及採掘出願登錄簿ヲ備ヘ置キ出願日時ノ先後ニ依リ之ヲ登錄ス

第十六條 試掘又ハ採掘ノ出願同一ノ地ニ付二人以上アルトキハ出願日時ノ先後ニ依リ其ノ許否ヲ定ム
出願ノ日時同一ナルトキハ鑛山監督署長ハ其ノ旨ヲ各出願人ニ通知スヘシ各出願人ハ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ協議ヲ遂ゲ出願人ヲ定ムヘシ若シ協議調ハサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス
出願ノ日時同一ニシテ試掘ト採掘トニ係ルトキハ先ツ採掘ノ出願ニ付其許否ヲ定ム

第十七條 農商務大臣採掘ノ特許ヲ與フヘキモノト認メタルトキハ鑛業特許證ヲ下付スヘシ

第十八條 試掘若ハ採掘ノ事業公益ヲ害スト認ムルトキハ試掘ニ就テハ所轄鑛山監督署長、採掘ニ就テハ農商務大臣其ノ出願ヲ許可セス

第十九條 試掘若ハ採掘ノ事業公益ヲ害アルトキハ試掘ニ就テハ所轄鑛山監督署長採掘ニ就テハ農商務大臣既ニ與ヘタル認可若ハ特許ヲ取消スコトヲ得

鑛業人前項取消ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ違フ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但損害ノ賠償ヲ學求スルコトヲ得ス

第二十條 特許ヲ得タル鑛物ノ採掘權ハ賣買、讓與又ハ畜入ヲ爲スコトヲ得

採掘權ヲ賣買、讓與スルトキハ雙方連署シ所轄鑛山監督署ヲ經農商務大臣ニ出願シ鑛業特許證ノ書換ヲ受クヘシ此ノ手續ニ依ラサル賣買、讓與ハ法律上其ノ効ナキモノトス

採掘權ノ書入ハ雙方連署シ所轄鑛山監督署ノ登錄ヲ受クヘシ其ノ登錄ヲ受ケサルモノハ法律上其ノ効ナキモノトス

第二十一條 他人試掘ノ年限中ハ其ノ試掘地内ニ於テ同一ノ鑛物ニ付採掘ノ出願ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條 他人ノ認可ヲ得タル試掘地内ニ於テ其ノ試掘人ノ未タ認可ヲ得サル鑛物ノ試掘又ハ採掘ヲ出願セント欲スル者ハ試掘人ノ承諾ヲ經ヘシ

試掘人自ラ試掘又ハ採掘ヲ出願セント欲スルカ若ハ其ノ認可ヲ得タル鑛物ノ試掘ニ妨害アルトキノ外ハ試掘人ハ前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十三條 他人所屬ノ鑛區内ニ於テ其ノ鑛業人ノ未タ試掘ノ認可又ハ採掘ノ特許ヲ得サル鑛物ニ付試掘若ハ採掘ヲ出願セント欲スル者ハ鑛業人ノ承諾ヲ經ヘシ

鑛業人自ラ試掘又ハ採掘ヲ出願セント欲スルカ若ハ其ノ試掘又ハ採掘ノ爲ニ鑛業ニ妨害アルトキノ外ハ鑛業人ハ前項ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十四條 宮城、障宮、神宮、皇陵、陸海軍所轄城堡、軍港、要港、火藥製造所、火藥庫及彈藥庫ノ周圍三百間以内ノ場所ハ試掘又ハ採掘若ハ鑛業上使用スルコトヲ得ス但軍港、要港ハ其ノ鎮守府司令長官ノ許可ヲ得タル場合ニ於テハ此ノ限ニテラス

第二十五條 鐵道、馬車鐵道、公道、河湖、堤防、沼池、社寺、墓地、公園地及建物ヨリ地表地下トモ其周圍三十間以内ノ場所ニ於テハ所轄官廳若ハ所有者ノ承諾ヲ經ルニアラサレハ試掘又ハ採掘ヲ爲スコトヲ得ス但危險ノ虞ナキモノハ其ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十六條 鑛業人ハ毎年ノ鑛業施業案ヲ調製シ其ノ前年十月三十日限其ノ初年ニ係ルモノハ採掘特許ノ日ヨリ三箇月以内ニ所轄鑛山監督署長ニ差出シ認可ヲ受クヘシ

前項ノ施業案ニシテ坑内ノ保安ニ害アリ又ハ其ノ鑛區ニ相當スル鑛業ヲ爲サ、ルモノト認メタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ理由ヲ鑛業人ニ示シ期限ヲ定メ之ヲ改正セシムヘシ

第二十七條 鑛業人ハ所轄鑛山監督署長ノ認可ヲ受ケタル鑛業施業案ニ依ルニアラサレハ採掘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十八條 鑛業人鑛業施業案又ハ其ノ改正案ヲ期限内ニ差出サ、ルトキハ農商務大臣ハ其ノ採掘ノ特許ヲ取消スコトヲ得

第二十九條 鑛業人一箇年以上休業シ又ハ採掘ノ特許ヲ得タル日ヨリ一箇年以内ニ鑛業ニ著手セサルトキハ農商務大臣ハ其ノ特許ヲ取消スコトヲ得

第三十條 前二條ノ場合ニシテ其ノ自己ノ過失ニ由ラサルモノハ特許取消ノ達ヲ受ケタル日ヨリ十四日以内ニ其ノ理由ヲ農商務大臣ニ申立テ再願ヲ爲スコトヲ得若シ農商務大臣ニ於テ之ヲ拒ムトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十一條 鑛業人ハ坑内實測圖ニ禁ヲ調製シ一葉ハ所轄鑛山監督署ニ差出シ一葉ハ鑛業事務所ニ備ヘ置クヘシ
前項坑内實測圖ハ事業ノ進歩ニ從ヒ六箇月毎ニ追補スヘシ
鑛業人若シ他人ノ所屬ニ係ル隣接鑛區ノ坑内實測圖ニ付證明ヲ必要ト認ムルトキハ之ヲ所轄鑛山監督署長ニ請求スルコトヲ得

所轄鑛山監督署長ニ於テ右證明ノ爲ニ吏員ノ實地臨檢ヲ必要ト認ムルトキハ鑛業人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ放貸日當ヲ前納セシムヘシ

第三十二條 鑛業人鑛業特許證ヲ毀損若ハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ所轄鑛山監督署ヲ經其ノ再下付ヲ農商務大臣ヲ出願スヘシ

第三十三條 詐偽又ハ錯誤ニ由リ試掘ノ認可ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ其ノ認可ヲ取消スヘシ若シ其ノ認可ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ其ノ關係ヲ有スル者ハ認可ノ日ヨリ三箇月以内ニ試掘認可ノ取消ヲ所轄鑛山監督署長ニ訴願スルコトヲ得
前項所轄鑛山監督署長ノ判定ニ不服アル者ハ其ノ判定ノ日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十四條 詐偽又ハ錯誤ニ由リ採掘ノ特許ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ農商務大臣ハ其ノ特許ヲ取消スヘシ若シ其ノ特許ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ其ノ關係ヲ有スル者ハ特許ノ日ヨリ三十日以内ニ採掘特許ノ取消ヲ農商務大臣ニ訴願スルコトヲ得
前項農務大臣ノ規定ニ不服アル者ハ其ノ規定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十五條 第三十二條第二項及第三十三條第二項ノ場合ニ於テ理由ナクシテ承諾ヲ拒ミタルトキハ關係人又第二十五條但書ノ場合ニ於テ危險ノ虞ナクシテ承諾ヲ拒ミタルトキハ鑛業人ハ所轄鑛山監督署長ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

第三十六條 前條ノ判定ニ不服アル者ハ其ノ判定ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ農商務大臣ノ裁定ヲ請求スルコトヲ得

第三十七條 鑛業人廢業シタルトキハ其ノ旨ヲ所轄鑛山監督署ニ届出テ鑛業特許證ヲ返納スヘシ

第三十八條 第十九條第二十八條第二十九條第三十四條第四十三條及第七十六條ニ依リ農商務大臣ニ於テ採掘ノ特許ヲ取消シ又ハ第三十七條ニ依リ廢業ノ届出ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ特許ヲ得タル鑛物ノ採掘權ニ對シ抵當權ヲ有スル債主ハ其ノ抵當權ヲ失フモノトス但第十九條及第三十四條ノ場合ヲ除クノ外債主ニ於テ六十日以内ニ其ノ鑛區ノ採掘ヲ願出ルトキハ出願ノ先後ニ拘ハラズ特許ヲ與フヘシ

第三十九條 鑛業人ハ毎年一月前年ニ採取シタル鑛物ノ量數、製産物、其ノ販賣高、販賣代價、行業日數及工數ヲ所轄鑛山監督署ニ届出ツヘシ

第三章 鑛區

第四十條 鑛業人ハ農商務大臣定ムル所ノ書式ニ依リ帳簿ヲ調製シ製産物ノ量數及販賣代價等ヲ記載スヘシ

第四十一條 鑛區トハ鑛物ノ採掘ヲ爲ス土地ノ區域ヲ謂フ
鑛區ノ境界ハ直線ヲ以テ之ヲ定メ地表境界線ノ直下ヲ限トス其ノ一鑛區ノ面積ハ石炭ハ一萬坪以上其ノ他ノ鑛物ハ三千坪以上トシ共ニ六十萬坪ヲ超ユルコトヲ得ス

第四十二條 出願ニ係ル鑛區ノ位置形狀、鑛床ノ位置形狀ト相違シ鑛利ヲ損スヘキモノト認メタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ之ヲ出願人ニ通知シ訂正セシムヘシ
出願人前項ノ通知ヲ受ケ其ノ通知書到達ノ日ヨリ三十日以内ニ訂正シテ差出サ、ルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第四十三條 特許ヲ得タル鑛區ノ位置形狀、鑛床ノ位置形狀ト相違シ鑛利ヲ損スヘキモノト認メタルトキ

ハ所轄鑛山監督署長ハ農商務大臣ノ認可ヲ經六十日以内ノ期限ヲ定メ訂正セシムヘシ若シ訂正セサルトキハ農商務大臣ハ既ニ與ヘタル特許ヲ取消スコトヲ得
鑛業人ハ前項特許取消ノ處分ニ不服アルトキハ其ノ違フ處ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第四十四條 鑛業人鑛床ノ形狀ニ由リ鑛區ノ境界若ハ位置ノ訂正ヲ要スルトキハ其ノ願書ニ理由書、訂正鑛區圖及鑛業特許證ヲ添ヘ農商務大臣宛ニテ所轄鑛山監督署ニ差出スヘシ
農商務大臣ニ於テ訂正ヲ必要ト認メタルトキハ更ニ鑛業特許證ヲ下付スヘシ

第四十五條 鑛業人鑛區ノ訂正ヲ出願シタル場合ニ於テ所轄鑛山監督署長吏員ノ實地踏査ヲ必要ト認ムルトキハ鑛業人ヲシテ出張吏員ノ爲ニ制規ノ放費日當ヲ前納セシムヘシ
鑛業人前項放費日當納付ノ通知ヲ受ケ其ノ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ納メサルトキハ其ノ出願ヲ無効トス

第四十六條 鑛區ヲ合併シ又ハ分割セント欲スル者ハ合併又ハ分割鑛區圖及鑛業特許證ヲ添ヘ所轄鑛山監督署ヲ經テ農商務大臣ニ出願スヘシ其ノ採掘權ヲ他當ニ取りタル債主アルトキハ其ノ承諾書ヲ添フヘシ
鑛區ノ分割ハ第四十一條ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス

第四章 土地使用

第四十七條 試掘又ハ採掘ヲ出願スル爲他人ノ土地ヲ測量スルコトヲ必要トスルトキハ所轄鑛山監督署ノ認可ヲ受ケヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ土地ノ所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス若シ測量ノ爲ニ損害ヲ生シタルトキハ其ノ測量ヲ請求シタル者ニ於テ之ヲ賠償スヘシ
測量請求者他人ノ所有地ニ入ルトキハ濫メ其ノ土地所有者ニ通知シ且測量認可證ヲ携帶スヘシ

第四十八條 左ノ場合ニ於テ鑛業上他人ノ土地ヲ使用スルコトヲ必要トシ鑛業人其ノ貸渡ヲ請求シタルトキハ其ノ土地ノ所有者又ハ關係人ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス
一 坑口ヲ開穿スル爲

一 鑛物及土石ノ堆積場ヲ設置スル爲

一 坑道、道路、鐵道、馬車鐵道、運河、溝渠及溜池ヲ開設スル爲

一 鑛業上必要ノ製鍊場及建物ヲ建設スル爲

第四十九條 左ノ場合ニ於テハ土地所有者又ハ關係人ハ土地貸渡ノ請求ヲ拒ムコトヲ得

一 貸渡請求ノ土地第二十五條ニ記載シタル場所ニ係ルトキ

第五十條 土地借受人ハ貸渡ヲ受ケタル土地ニ對シ其ノ土地貸渡人ニ相當ノ借地料ヲ仕拂フヘシ

土地貸渡人ハ借地料ノ保證金トシテ土地借受人ニ豫メ土地臺帳ニ記載シタル地價以内ノ金額ヲ差出サシムルコトヲ得
其ノ賣入トナリタル土地ニ對スル借地料及保證金ハ質取主ニ於テ之ヲ受領スルモノトス

土地使用ニ依リ所有者又ハ關係人ニ損害ヲ與フルトキハ鑛業人ハ之ニ對シ相當ノ賠償ノ爲スヘシ
土地借受人土地ノ使用ヲ終リ其ノ使用中ノ借地料ヲ完納シタルトキハ土地貸渡人又ハ質取主ハ土地引換ニ保證金ヲ返還スヘシ

第五十一條 土地借受人貸渡ヲ受ケタル土地ノ使用ヲ終リタルトキハ土地貸渡人ノ要求ニ應ジ其ノ土地ヲ原形ニ復シ返還スヘシ若シ原形ニ復シ難キトキハ土地借受人ニ於テ其ノ損害ヲ賠償スヘシ

第五十二條 土地借受人借地料ノ仕拂ヲ延滞シタルトキハ土地貸渡人ハ其ノ延滞借地料ニ相當スル金額ヲ保證金中ヨリ差引キ土地ヲ取戻スコトヲ得
前項土地ヲ取戻スニ當リ地上ニ建物等アルトキハ六十日以上ノ期限ヲ定メテ土地借受人ニ其ノ取除ヲ請求スヘシ若シ土地借受人ノ所在不分明ナルトキハ其ノ地方ノ新聞紙ヲ以テ其ノ旨ヲ公告スヘシ

土地借受人右期限内ニ取除ヲナサ、ルトキハ其ノ建物等ハ土地貸渡人ノ所有ニ歸スヘシ

第五十三條 鑛業人ノ請求ニ依リ土地ヲ分割シテ賣渡シ又ハ貸渡シタルカ爲殘地ノ利用ヲ害スルトキハ鑛業人ニ對シ其ノ土地全部ノ買取若ハ借受ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ之ヲ拒ムコトヲ得

第五十四條 鑛業人ニ於テ貸渡ヲ受ケタル土地ヲ三箇年以上使用スル目的アルカ又ハ三箇年以上之ヲ使用スルトキハ土地貸渡人ハ鑛業人ニ其ノ土地ノ買取ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ其ノ買取ヲ拒ムコトヲ得ス

第五十五條 土地ノ所有者及關係人ト測量請求人又ハ鑛業人トノ間ニ於テ土地貸渡、借地料、保證金、損害賠償金又ハ土地賣買代價ニ付協議議ハサルトキハ所轄鑛山監督署長ニ其ノ判定ヲ請求スルコトヲ得所轄鑛山監督署長ノ判定ニ不服アルトキハ其ノ判定ノ違ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ土地貸渡ニ就テハ農商務大臣ニ其ノ裁定ヲ請求シ借地料、保證金、損害賠償金若ハ土地賣買代金ニ就テハ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

前項農商務大臣ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得ス

第五十六條 所轄鑛山監督署長ノ判定又ハ農商務大臣ノ裁定請求ノ爲ニ要スル費用ハ民事訴訟入費ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第五十七條 鑛業人ハ土地所有者又ハ關係人ニ於テ所轄鑛山監督署長ノ判定シタル借地料、保證金、損害賠償金又ハ賣買代金ニ不服アルモ其ノ金額ヲ土地所有者又ハ關係人ニ渡シ若シ之ヲ受ケサルトキハ其ノ金額ヲ供託所ニ預ケ置キ土地ヲ使用スルコトヲ得

第五章 鑛業警察

第五十八條 鑛業ニ關スル警察事務ニシテ左ニ掲ゲルモノハ農商務大臣之ヲ監督シ鑛山監督署長之ヲ行フ

- 一 坑内及鑛業ニ關スル建築物ノ保安
- 一 鑛夫ノ生命及衛生上ノ保護
- 一 地表ノ安全及公益ノ保護

第五十九條 鑛業上ニ危險ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ所轄鑛山監督署長ハ鑛業人ニ其ノ豫防ヲ命ジ又ハ鑛業ヲ停止スヘシ

所轄鑛山監督署長ニ於テ鑛業ヲ停止セントスルトキハ其ノ豫防シ難キ場合ヲ除クノ外ハ農商務大臣ノ認可ヲ經ヘシ

第六十條 前條第一項ノ場合ニ於テ鑛業人直ニ其ノ豫防ニ著手セサルトキハ所轄鑛山監督署長ハ鑛業人ノ使用スル役員及鑛夫ヲ指揮シ其ノ豫防ヲ執行スヘシ

此ノ場合ニ於テ鑛業人ハ其ノ使用スル役員及鑛夫ヲ豫防ノ用ニ供シ且一切ノ費用ヲ負擔スルノ義務アルモノトス

第六十一條 第五十九條ニ依リ鑛業ヲ停止シタル後其ノ事故止ミタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ直ニ鑛業ノ停止ヲ解キ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ具申スヘシ

第六十二條 農商務大臣ニ於テ此ノ條例ニ依リ採掘ノ特許ヲ取消シタルトキ又ハ鑛業人廢業シタルトキハ所轄鑛山監督署長ハ六十日以上ノ期限ヲ定メ鑛業ノ爲建設シタル家屋及其ノ他ノ建物等ヲ除去セシムヘシ若シ右期限内ニ除去セサルトキハ其ノ建物等ハ土地所有者ノ所有ニ歸ス但所轄鑛山監督署長ニ於テ坑内保安ノ爲ニ必要ト認ムル坑内及坑口ノ構造物ハ之ヲ除去スルコトヲ得ス

前項ノ場合ニ於テ鑛業人ノ所在不分明ナルトキハ第五十二條第二項ノ手續ニ依ルヘシ

第六十三條 農商務大臣ハ此ノ條例ノ範圍内ニ於テ法令ヲ以テ鑛業警察規則ヲ定ムルコトヲ得

第六章 鑛夫

第六十四條 鑛夫トハ鑛物ノ採掘及之ニ附屬スル業務ニ従事スル男女ノ職工ヲ謂フ

鑛業人ハ其ノ使役スル鑛夫ノ使役規則ヲ定メ所轄鑛山監督署ノ認可ヲ受クヘシ

第六十五條 鑛業人ト鑛夫トノ間ニ特別ノ約定ナキ場合ニ於テ雙方トモ十四日以前ニ通知スルトキハ雇役ノ解約ヲナスコトヲ得

第六十六條 左ノ場合ニ於テハ鑛業人ハ何時タリトモ鑛夫ヲ解雇スルコトヲ得

- 一 輕罪以上ノ刑ニ處セラレタルカ又ハ不行狀ノ所爲アルカ若ハ命令ヲ遵守セサルトキ
- 一 鑛業人又ハ其ノ使用スル役員ニ對シ粗暴ノ所爲アリタルトキ

- 一 身體虛弱ニシテ業務ニ堪ヘサルトキ
- 一 鑛業ヲ禁止セテ又ハ廢業シタルトキ
- 第六十七條 左ノ場合ニ於テハ鑛夫ハ何時タリトモ其ノ雇後ヲ罷ムルコトヲ得
 - 一 身體虛弱ニシテ業務ニ堪ヘサルトキ
 - 一 鑛業ハ又ハ其ノ使用スル役員ニ於テ虐待シタルトキ
 - 一 約定ノ賃銀又ハ報酬ヲ給與セサルトキ
- 第六十八條 鑛業人又ハ其ノ代理人ハ解雇スル鑛夫ノ請求ニ依リ從來ノ業務年限、本人ノ技能、賃銀及解雇ノ事由ヲ記載シタル證明書ヲ與フヘシ
- 鑛業人證明書ヲ與フルコトヲ拒ムカ又ハ鑛夫ニ於テ證明書中不實ト認ムル事項アルトキハ所轄鑛山監督署員若ハ警察官ニ申告スルコトヲ得
- 第六十九條 鑛業人ハ鑛夫ノ賃銀ヲ通貨ニテ仕拂フヘシ鑛夫ノ請求アルニアラサレハ物品ヲ以テ仕拂フ爲スコトヲ得ス
- 第七十條 鑛業人ハ鑛夫名簿ヲ備ヘ置キ氏名、年齢、本籍、職業、雇入及解雇ノ年月日ヲ記スヘシ
- 第七十一條 農商務大臣ハ左ニ記載スル制限内ニ於テ省令ヲ以テ鑛夫工役規則ヲ定ムルコトヲ得
 - 一 一日十二時間以上ノ就業時間ヲ制限スルコト
 - 一 女工ノ工役ノ種類ヲ制限スルコト
 - 一 十四年以下ノ男女職工ノ就業時間及工役ノ種類ヲ制限スルコト
- 第七十二條 鑛業人ハ左ノ場合ニ於テ其ノ雇入鑛夫ヲ救恤スヘシ其ノ救恤規則ハ所轄鑛山監督署ノ認可ヲ受クヘシ
 - 一 鑛夫自己ノ過失ニ非スシテ就業中負傷シタル場合ニ於テ診察費及療養費ヲ補給スルコト
 - 一 前項ノ場合ニ於テ鑛夫ニ療養休業中相當ノ日當ヲ支給スルコト
 - 一 前項ノ負傷ニ由リ鑛夫ノ死亡シタルトキ埋葬料ヲ補給シ及遺族ニ手當ヲ支給スルコト

- 一 前項ノ負傷ニ由リ廢疾トナリタル鑛夫ニ期限ヲ定メ補助金ヲ支給スルコト
- 第七章 鑛業税及鑛區税
- 第七十三條 鑛業人ハ鑛業税トシテ鑛業製産物ノ價格百分ノ一鑛區税トシテ鑛區一千坪毎ニ一箇年金三十錢ヲ納ムヘシ但一千坪未満ノ端數ニ對スル鑛區税ハ之ヲ免除ス
- 鑛業ヲ採掘スル者ニハ鑛業税ヲ課セス
- 第七十四條 前條鑛業製産物ノ價格ハ主要ナル市場ノ平均相場ヲ標準トシ農商務大臣ノ告示スル所ニ依ル但市場ノ相場ナキモハ其ノ販賣代價ニ依ル
- 第七十五條 鑛業税ハ前年分ヨ毎分三月三十一日限ニ及廢業ノ年ニ係ルモノハ廢業ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ
- 鑛區税ハ一箇年分ヨ其ノ前年十二月十五日限ニ又初年ニ係ルモノハ月割ヲ以テ採掘出願特許ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ其ノ廢業ノ年ニ係ルモノハ之ヲ返付セス
- 第七十六條 鑛業人納税期限内ニ鑛業税及鑛區税ヲ納メサルトキハ農商務大臣ハ採掘ノ特許ヲ取消スコトヲ得其ノ取消不服アルトキハ其ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得
- 第八章 罰則
- 第七十七條 第二十四條第二十五條ヲ犯シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第七十八條 特許ヲ得スシテ採掘ヲ爲シタル者又ハ詐偽ニ由リテ特許ヲ得タル者ハ十五圓以上百五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第七十九條 認可ヲ得スシテ試掘ヲ爲シタル者又ハ詐偽ニ由リテ認可ヲ得タル者又ハ認可ノ期限ヲ過キ尚ホ試掘ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第八十條 第二十七條ヲ犯シタル者及第五十九條ノ豫防ニ著手セサル者又ハ第六十二條但書ノ規定ヲ犯シタル者ハ十五圓以上百五十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第三十一條第一項及第二項ヲ犯シタル者ハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十一條 第十條ヲ犯シタル者ハ其ノ實得金ノ半額ニ相當スル罰金ニ處ス
 第八十二條 第十一條ノ販賣代價ヲ隱匿シタル者ハ其ノ隱匿シタル金額ノ半額ニ相當スル罰金ニ處ス
 第八十三條 第三十九條ニ依リ届出ツヘキ事項ヲ詐テ遁脱シタル者ハ其ノ遁脱金額ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處シ其ノ遁脱ニ關セサル事項ニ係ルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第八十四條 第四十條ノ帳簿ヲ調製セス若ハ記載ヲ怠リ若ハ詐テ記載シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第八十五條 第六十四條第二項第六十九條及第七十二條ヲ犯シタル者八十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 第八十六條 第六條第三十七條第六十八條及第七十條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ料料ニ處ス
 第八十七條 第八十一條第八十二條及第八十三條ノ場合ニ於テ自首シタル者ハ其ノ納付スヘキ金額ヲ追徴シ其ノ罪ヲ問ハス
 第八十八條 此ノ條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及數罪併發ノ例ヲ用ヒス
 鑛業人未成年瘋癲白痴又ハ瘡癩ニシテ此ノ罰則ヲ犯シタルトキハ其ノ後見人ヲ處罰ス
 第九章 附則
 第八十九條 此ノ條例實施以前ニ許可ヲ得タル試掘人又ハ借區人ハ其ノ許可ヲ得タル年限中試掘又ハ鑛業ヲ爲スコトヲ得
 第九十條 此ノ條例實施以前ニ借區人ノ許可ヲ得借區年限滿期後尚ホ引續キ鑛業ヲ爲サントスル者ハ借區滿期以前ニ此ノ條例ニ依リ出願スヘシ
 第九十一條 此ノ條例ノ施行ニ關スル細則ハ農商務大臣之ヲ定ム
 第九十二條 此ノ條例ハ明治二十五年六月一日ヨリ施行ス明治六年太政官第二百五十九號布告日本坑法ハ同日限之ヲ廢止ス

第二十一章 度量衡

法律 明治二十三年三月 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル度量衡法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 第三號 度量衡法

度量衡法

第一條 度量ハ尺、衡ハ貫ヲ以テ基本トス
 第二條 度量衡ノ原器ハ白金、イリヂウム、合金製ノ棒及分銅トス其ノ棒ノ面ニ記シタル標線間ノ攝氏〇、一五度ニ於ケル長サ三十三分ノ十ヲ尺トシ分銅ノ質量四分ノ十五ヲ貫トス
 第三條 度量衡ノ名稱位ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 毛 尺ノ萬分ノ一
- 厘 尺ノ千分ノ一
- 分 尺ノ百分ノ一
- 寸 尺ノ十分ノ一
- 尺 十尺
- 丈 六尺
- 間 三百六十尺(六十間)
- 町 一萬二千九百六十尺(三十六町)
- 里 一萬二千九百六十尺(三十六町)
- 地積 歩ノ百分ノ一
- 合 歩ノ十分ノ一
- 步 或ハ坪 六尺平方

畝 三十歩
 段 三百歩
 町 三千歩

量
 勺 升ノ百分ノ一
 合 升ノ十分ノ一
 升 六萬四千八百二十七立方分
 斗 十升
 石 百升

衡
 毛 貫ノ百萬分ノ一
 厘 貫ノ十萬分ノ一
 分 貫ノ萬分ノ一
 匁 貫ノ千分ノ一
 斤 百六十匁

第四條 從來慣用ノ鯨尺ハ布帛ヲ度ルトキニ限り之ヲ用ヰルコトヲ得
 鯨尺一尺ハ一尺二寸五分トシ其ノ十倍ヲ鯨尺一丈、十分ノ一ヲ鯨尺一寸、百分ノ一ヲ鯨尺一分トス
 第五條 「メートル」法度量衡ハ左ニ掲グル比較ニ依リ之ヲ道法ノモノトシ本條以下ノ規定ヲ適用ス

度
 「メートル」
 〇、〇〇〇〇三
 (三萬三千分ノ一)

尺
 「ミリメートル」
 〇、〇〇三三〇

厘	〇、〇〇〇三〇 (三萬三千分ノ一)	「センチメートル」	〇、〇三三〇〇
分	〇、〇〇三〇三 (三萬三千分ノ一)	「デシメートル」	〇、三三〇〇〇
寸	〇、〇三〇三〇 (三萬三千分ノ一)	「メートル」	三、三〇〇〇〇
尺	〇、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)	「デカメートル」	三三、〇〇〇〇〇
丈	三、〇三〇三〇 (三萬三千分ノ一)	「ヘクトメートル」	三三〇、〇〇〇〇〇
間	三、〇三〇三〇 (三萬三千分ノ一)	「キロメートル」	三三〇〇、〇〇〇〇〇
町	三、〇三〇三〇 (三萬三千分ノ一)		
里	三、〇三〇三〇 (三萬三千分ノ一)		
地積			
勺	「アール」 〇、〇〇〇三三 (三萬三千分ノ一)	「センチアール」	〇、三〇二五〇
合	〇、〇〇三三一 (三萬三千分ノ一)	「アール」	三〇、二五〇〇〇
升	〇、〇三三〇六 (三萬三千分ノ一)	「ヘクタール」	三〇二五、〇〇〇〇〇
斗	〇、三三〇三〇 (三萬三千分ノ一)		
石	三、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)		
毛	三、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)		
厘	三、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)		
分	三、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)		
匁	三、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)		
斤	三、三〇三〇三 (三萬三千分ノ一)		

斤	貫	匁	分	厘	毛	衡	石	斗	升	合	勺	量
六〇〇、〇〇〇〇〇	三、七五〇〇〇	三、七五〇、〇〇〇〇〇	〇、三三五〇〇	〇、〇三三五〇	〇、〇〇三七五	「デグラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「ミリグラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「センテグラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「デシグラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「グラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「デカグラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「ヘクトグラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」
二六六、六六六六七	二六、六六六六七	二六六、六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	二、六六六六七	「キログラム」	「ヘクトリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「センチリットル」	「デシリットル」	「リットル」

第六條 度量衡ノ原器ハ農商務大臣之ヲ保管ス

農商務大臣ハ度量衡ノ原器ニ依リ副原器ニ組ヲ製作セシメ原器ノ代田ニ供ス

副原器ノ一組ハ農商務大臣之ヲ保管シ他ノ一組ハ文部大臣之ヲ保管ス

第七條 農商務大臣ハ副原器ニ依リ地方原器ヲ製作セシムヘシ

地方原器ハ地方長官之ヲ保管シ度量衡器檢定ノ標準ニ供スルモノトス

第八條 度量衡器ヲ製作シ修覆シ若ハ販賣セント欲スル者ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ願出免許ヲ受クヘシ

製作ノ免許ヲ得タル者ハ修覆及販賣ヲナスコトヲ得

販賣ノ免許ヲ得タル者ハ秤秤ノ取銷及縫糸ニシテ金屬ニアラサルモノニ限り修覆ヲ爲スコトヲ得

免許ニ關スル年限、身元保證金其ノ他必要ナル制限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 度量衡器ヲ製作シ修覆シ若ハ輸入シテ販賣シ又ハ營業ノ目的ニ使用スル者ハ豫メ其ノ檢定ヲ受クヘシ

營業ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ前項檢定ノ外之ヲ修覆シタルトキ及定期間ニ於テ檢定ヲ受クヘシ

製作者、修覆者及販賣者秤秤ノ取銷及縫糸ニシテ金屬ニアラサルモノ、修覆ヲ爲シタルトキハ其ノ檢定ヲ受クルコトヲ要セス

官廳、公署、官立、公立ノ諸建設場又ハ倉庫、病院其ノ他之ニ類スル建設場ニ於テ賣買、授受及證明ノ爲ニ使用スル度量衡器ハ營業ノ目的ニ使用スルモノニ準ス

第十條 度量衡器ノ種類、形状、物質、檢定ノ定期及公差、檢定スヘキ目盛及分銅ノ最小定限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 度量衡器ノ檢定及取締ハ地方長官之ヲ管理ス

地方長官ハ市長、町村長ヲシテ其ノ市町村内ニ於ケル度量衡器ノ取締ヲ行ハシメ及其ノ檢定ニ關スル事

務ヲ補助セシムルコトヲ得

第十二條 度量衡器ノ製作者、修繕者、販賣者及使用者ハ取締ノ爲ニ行フ當該吏員ノ臨檢ヲ拒ムコトヲ得
ス但シ吏員ハ主任タルノ證票ヲ携帶シテ之ヲ示スヘシ

第十三條 度量衡器ノ製作、修繕及販賣ノ免許ヲ受ケタル者ハ免許料ヲ、檢定ヲ受ケタル者ハ檢定料ヲ納ムヘ
シ

免許料及檢定料ノ金額ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 度量衡器ノ製作者、修繕者若ハ販賣者ニシテ度量衡ニ關スル法律命令ニ違背シタルトキハ農商
務大臣ハ其ノ營業免許ヲ取消スコトヲ得

第十五條 免許ヲ受ケスシテ度量衡器ヲ製作シ若ハ修繕シテ販賣シタル者ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金
ニ處ス

免許ヲ受ケスシテ度量衡器ヲ販賣シ又ハ檢定ヲ受ケサル度量衡器ヲ販賣シ若ハ之ヲ營業ノ目的ニ使用シ
及吏員ノ臨檢ヲ拒ミタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

差狂アル度量衡器ナルコトヲ知テ之ヲ販賣シ又ハ營業ノ目的ニ使用シタル者亦前項ニ同シ

第十六條 本法施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

第十七條 本法ハ明治二十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十八條 度量衡器ノ製作ニ限リ本法施行前六箇月以内ニ之ヲ免許スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法中
製作ニ關スル條項ハ之ヲ適用ス

第十九條 從來度量衡製作及賣捌ノ免許ヲ受ケタル者ハ更ニ免許ヲ受ケルコトヲ要セス本法ノ規定ニ從ヒ
其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得

第二十條 從來ノ度量衡器ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年以内ニ本法ノ規定ニ依リ其ノ檢定ヲ受クヘシ檢定ヲ
經サルモノハ其ノ期限ヲ過ケル後之ヲ販賣シ若ハ營業ノ目的ニ使用スルコトヲ得ス

第二十一條 從來ノ度量衡器ニシテ修繕シタルモノ、檢定ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年ヲ限リ從來ノ檢査規
則ニ依ル

第二十二條 明治八年太政官第三百三十五號達度量衡取締條例並檢査規則同九年第十七號布告度量衡改定規
則及西洋形權衡ニ條ル從來ノ法令ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス但シ度量衡取締條例附屬檢査規則ハ前
條ノ場合ニ限リ明治三十二年十二月三十一日マテ其ノ効力ヲ有ス

第二十二章 海外旅行

外務省布達明治十一年二月 從來當省ヨリ發行候海外行免狀之儀海外施券ト改稱別紙規則相定候條此旨布達
候事

海外旅券規則

旅券ハ日本國民タルヲ證明スルノ具ニテ海外各國ニアリテ要用少ナカラサルヲ以テ外務省ヨリ之ヲ發行ス
規則左ノ如シ

第一條 旅券ヲ請フ者ハ別紙雛形ノ書面ヲ以テ外務省又ハ開港場官廳へ願出之ヲ受取ルヘシ右郵便ヲ以テ
スルモ苦シカラス旅券ヲ受取テハ直ニ其示シアル所へ當人姓名ヲ自記スヘシ

第二條 旅券ヲ受ケルモノハ手数料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ但旅券ハ一人一枚ニ限ルヘシ若シ五歳以下
ノ小兒其父母同道ナルトキハ其父母ノ旅券ニ附記スルヲ以テ足レリトス

第三條 内地ニ於テ右旅券受取ル間合之ナキカ又ハ海外ニ於テ遺失シタルカノトキハ其國在留ノ日本公使館
又ハ領事館へ其趣ヲ記載セル書面ヲ出タシ自身出頭シテ願ヒ受クヘシ但其手数料トシテ金貳圓ヲ納ムヘ
シ

第四條 公用ヲ以テ旅行シ官費ヲ以テ留學スル者ハ内地ニアリテハ其官廳ヨリ直ニ外務省ニ掛合海外ニ在
リテハ前條ノ趣ニ從ヒ旅券ヲ受取ルヘシ但手数料ハ納ムルニ及ハス

第五條 旅券ハ其趣クヘキ國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ得ル儀其國ニヨリ要用少ナカラス其節ハ其節ニ就テ
直ニ之ヲ請フヘシ但其定規ニ隨ヒ手数料ヲ拂フヘキモノトス

第六條 海外ニアリテ所持ノ旅券我領事館ノ證明ヲ要用トスルコトアリ其節ハ之ヲ請ヒ得ヘシ但領事館ナキ地ニ於テハ公使館ニ到リテ之ヲ請フヘシ

第七條 旅券ハ歸朝ノ後三十日以内ニ其最初受取リタル官廳ヘ之ヲ返納スヘシ郵船等ノ海國常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニ在ラス但シ海外ニアリテ我公使又ハ領事館ヨリ受取タル者ハ外務省ニ返納スルヲ以テ足レリトス

旅券願書式

私儀何々ノ爲某國へ罷越或ハ往來致度ニツキ旅券御渡方奉願候也

明治 年 月 日

何府縣下

第何大區何小區

何國何郡何村何番地又ハ寄留

士族職業者

何姓 名 印

年何年何ヶ月

戸長 姓 名 印

府知事縣令 姓 名 印

上封

族 券 願

外務省或ハ某府縣

御 中

何府縣下

何國何郡何村何町

何 誰

旅券文言

官印

右

ス

年 月 日

ニ赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレンコトヲ其節ノ諸官ニ希望ス

日本皇帝陛下官位姓名自記

所持人姓名自記

右ハ官員及官費留學生ニ與フル式タリ

籍

管人姓名

餘

右ノ者故障ナク通行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其節ノ諸官ニ希望ス

日本帝國官位姓名自記

所持人手記

右ハ華士族平民ニ與フル者ナリ其ニ英佛獨清文ヲ譯付ス

第二十三章 特許

勅令明治二十一年十二月 朕特許條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令十八日第八十四號

特許條例

第一條 新規有益ナル工術、機械、製造品及合成物ヲ發明シ又ハ工術、機械、製造品及合成物ノ新規有益

ナル改良ヲ發明シタル者ハ此條例ニ依リ特許ヲ受クルコトヲ得
特許トハ發明者ニ他人ヲシテ其承諾ヲ經スシテ前項ノ發明ヲ製作、使用又ハ販賣セシメサル特種ヲ許ス
コトヲ謂フ

第二條 左ニ掲クル發明ハ特許ヲ受クルコトヲ得サルモノトス
一 飲食物嗜好物
二 醫藥並其調合法

三 特許出願以前公ニ用ヒラレタルモノ但試験ノ爲メ公ニ知ラレタルコト二年以内ノモノハ此限ニ在ラス
第三條 特許ヲ受ケント欲スル者ハ一發明毎ニ發明ノ明細書及必要ノ圖面ヲ添ヘ農商務大臣ニ出願スヘシ
但其願書明細書及圖面ハ特許局ニ差出スヘシ

第四條 特許ヲ出願スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ其發明ヲ審査セシメ特許ヲ與フヘシ
ト査定シタルモノハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ特許原簿ニ登錄シ特許證下付ノ手續ヲ爲スヘシ
第五條 特許證ハ農商務大臣之ニ署名シ特許局長之ニ副署シ明細書及必要ノ圖面ヲ添ヘ之ヲ下付スルモノ
トス

第六條 特許ノ年限ハ五年十年及十五年ノ三種ト爲シ原簿登錄ノ日ヨリ起算ス
第七條 公益ノ爲メ普及ヲ要スルモノ又ハ軍事上必要ナルモノ若クハ秘密ヲ要スルモノト認めタル發明ニ
ハ農商務大臣ハ特許ニ制限ヲ附シ若クハ特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタル特許ヲ制限シ若クハ之ヲ取消ス
コトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テ農商務大臣ハ相當ト認めル報酬ヲ發明者又ハ特許證主ニ與フルモノトス
第八條 他人ノ特許發明ヲ改良シ其改良發明ノ特許ヲ受ケント欲スル者ハ其特許證主ニ協議シ原發明ニ改
良發明ヲ合セテ使用スルノ承諾ヲ經第三條ニ依リ出願スヘシ

特許證主其承諾ヲ拒ミタルトキハ其旨ヲ願書ニ記載シテ出願スルコトヲ得此場合ニ於テハ農商務大臣
ハ原發明ヲ改良發明ニ合セテ使用スルノ特許ヲ改良發明者ニ與フルコトヲ得

改良發明者前項ノ特許ヲ受ケタルトキハ原特許證主ニ農商務大臣ノ相當ト認めル報酬ヲ與フル義務アルモノ
トス

第九條 特許ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相続者ニ歸スルモノトス
第十條 特許ヲ受ケタル發明ト雖トモ左ニ掲クルモノハ其特許ヲ無効トス

- 一 新規又ハ有益ナラザリシコトヲ發見セラレタルモノ
- 二 第二條ニ該ルコトヲ發見セラレタルモノ
- 三 發明ヲ實施スルニ必要ナル事實ヲ故意ニ明細書ニ記載セザリシコトヲ發見セラレタルモノ
- 四 發明ヲ實施スルニ必要ナラサル事實ヲ故意ニ明細書ニ記載セシコトヲ發見セラレタルモノ

第十一條 特許局審査官特許出願ノ發明ヲ審査シ特許ヲ與フヘカラスト査定シタルトキハ特許局長ハ其查
定書ヲ出願人ニ送付スヘシ

第十二條 前條ノ査定ニ服セサル者ハ特許局ニ不服理由書ヲ差出シ再審査ヲ請求スルコトヲ得
再審査ヲ請求スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ更ニ之ヲ審セシムヘシ審査官其不服理由
ヲ不當ト査定シタルトキハ其査定書ヲ不服者ニ送付スヘシ

第十三條 特許局審査官特許出願ノ發明他人ノ特許出願中ノ發明ト抵觸シ又ハ他人ノ特許發明ト抵觸スト
査定シタルトキハ特許局長ハ其抵觸ノ箇所ヲ關係人ニ告知シ其發明ニ關スル始末書ヲ差出サシムヘシ
關係人始末書ヲ差出シタルトキハ特許局長ハ之ヲ特許局審査官ニ付シテ發明ノ先後ヲ審査セシ其査定書
ヲ關係人ニ送付スヘシ

第十四條 前條ノ場合ニ於テ既ニ與ヘタル特許證ヲ取消シ出願ノ發明ニ特許ヲ與フルトキハ其特許年限ハ
前特許證登錄ノ日ヨリ起算シ其年限ニ超ルコトヲ得ス

第十五條 第十二條ノ再査定及第十三條ノ査定ニ服セサル者ハ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得
第十六條 特許證主其權利ノ他特許證主ノ權利ト撞著スルコトヲ發見シタルトキハ其權利ヲ確定スル爲メ特
許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第十七條 特許ヲ受ケタル發明第十條ニ該ルコトヲ發見シタル者ハ其特許ヲ無効トスル爲メ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第十八條 審判ヲ請求スル者アルトキハ特許局ニ於テ局長ハ審判長トナリ二人以上ノ審判官ト共ニ之ヲ審判スヘシ

第十九條 特許局ノ審判ニ對シテハ不服ヲ申立又ハ裁判所ニ訴アルコトヲ得ス

第二十條 第十三條ノ審査及特許局ノ審判ニ關シ關係人ニ於テ證據ヲ要スルトキハ其請求ニ依リ特許局長ハ其集取ヲ治安裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第二十一條 第十六條第十七條ニ係ル費用ハ民事訴訟入費ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第二十二條 特許ハ制限ヲ附シ若クハ附セスシテ實與讓與シ若クハ共有トナシ又ハ書入トナスコトヲ得此場合ニ於テハ特許局ニ請求シ契約ノ登錄ヲ受ケヘシ登錄ヲ受ケサル契約ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第二十三條 特許局ノ官吏ハ在職中特許ヲ出願シ又ハ特許ヲ新ニ有スルコトヲ得ス但相續ニ由リ特許ヲ新ニ有スルハ此限ニ在ラス

第二十四條 特許ハ左ノ場合ニ於テ其効ヲ失フモノトス

一 特許證主相當ノ事故ナクシテ特許證ノ日附ヨリ三年ヲ經テ其發明ヲ實施公行セサルトキ

二 特許證主相當ノ事故ナクシテ其發明ノ實施公行ヲ三年間中止シタルトキ

三 特許證主其特許品ヲ外國ヨリ輸入シテ之ヲ販賣シ又ハ自己ノ權利ヲ侵スヘキ物品ヲ外國ヨリ輸入シテ販賣スル者アルコトヲ知リテ之ヲ默許シタルトキ

第二十五條 特許證主特許證ヲ毀損若クハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ再下付ヲ出願スルコトヲ得

第二十六條 特許證主其明細書若クハ圖面ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ特許ノ効力ヲ全クスル爲メ改訂明細書若クハ圖面ヲ添ヘ特許證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其發明ノ要部ニ變更ヲ生スルモノハ此限ニ在ラス

第二十七條 特許證主其明細書中ニ自己ノ發明ニアラサル事項ヲ誤テ自己ノ發明トシテ記載セシコトヲ發見シタルトキハ其削除ヲ出願スルコトヲ得

第二十八條 第二十六條第二十七條ニ依リ出願スルモノアルトキハ特許局長ハ其願書ヲ特許局審査官ニ付シテ審査セシムヘシ

前項ノ場合ニ於テ特許局審査官ノ査定ニ服セサル者ハ第十二條ニ依リ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第二十九條 特許證主ハ其物品ニ農商務大臣ノ定メタル特許標記ヲ爲スヘシ

第三十條 特許ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

一 特許ヲ出願スルトキ 一 發明毎ニ 金五圓

二 特許ノ實與讓與共有又ハ書入契約ノ登録ヲ請求スルトキ 一 發明毎ニ 金三圓

三 特許證ノ再下付ヲ出願スルトキ 證書一枚毎ニ 金壹圓

四 特許證ノ改訂又ハ明細書中ノ削除ヲ出願スルトキ 一 發明毎ニ 金五圓

五 審判ヲ請求スルトキ 一 事件毎ニ 金七圓

第三十一條 特許證又ハ改訂特許證ヲ受クル者ハ一證書毎ニ左ノ區別ニ從ヒ特許料ヲ納ムヘシ

一 五年ノ特許 金拾圓

二 十年ノ特許 金拾五圓

三 十五年ノ特許 金貳拾圓

第三十二條 特許局ハ時々特許發明ノ明細書及特許公報ヲ印刷シ衆庶ノ縱覽ニ供スヘシ其請求者アルトキハ相當代價ヲ以テ之ヲ拂下クルコトヲ得

第三十三條 特許ニ關スル書類ノ謄本又ハ圖面ノ調製ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムヘシ

第三十四條 特許ヲ侵シタル者ハ其特許證主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第三十五條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ明滅免除ノ期トス

第三十六條 他人ノ特許品ヲ偽造シテ使用若クハ販賣シタル者又ハ情ヲ知り偽造品ヲ使用若クハ受託販賣シタル者又ハ他人ノ特許工術ヲ竊用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

特許證主ノ權利ヲ侵スヘキ物品ナルコトヲ知り之ヲ外國ヨリ輸入シテ使用若クハ販賣シタル者又ハ情ヲ知り其輸入シタル物品ヲ使用若クハ受託販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

第三十七條 前條ノ場合ニ於テハ其犯罪ノ物件ヲ沒收シテ特許證主ニ給付シ其既ニ賣却キタルモノハ代價ヲ追徴シテ之ヲ給付ス

第三十八條 詐欺ノ所爲ヲ以テ特許證ヲ受ケタル者又ハ特許ヲ受ケサル物品ニ特許標記若クハ之ニ類似シタル標記ヲ爲シテ販賣シタル者又ハ情ヲ知りテ其物品ヲ受託販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十九條 第三十六條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

前項ノ場合ニ於テ告訴人ノ請求ニ依リ裁判官ハ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ使用若クハ販賣ヲ差止ムルコトヲ得

第四十條 特許證主其特許品ニ第二十九條ノ特許標記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキハ告訴又ハ要價ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四十一條 被告人特許ノ無効タルコトヲ以テ答辯セント欲スルトキハ其旨ヲ裁判所ニ申告シ其日ヨリ三十日以内ニ特許局ニ第十七條ノ審判ヲ請求スヘシ此場合ニ於テ裁判所ハ特許局ノ審判終結マテ其裁判ヲ中止スヘシ

第四十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第四十三條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第四十四條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス

第四十五條 明治十八年即第七號布告專賣特許條例ハ此條例施行ノ日ヨリ廢止ス但專賣特許條例ニ依テ受

ケタル專賣特許ハ此條例ニ依テ受ケタル特許ト同一ノ効アルモノトス
專賣特許出願ノ此條例施行ノ日ニ於テ處分ヲ終ラサルモノハ此條例ニ依リ處分ス

第二十四章 意匠

勅令 明治二十一年十二月 朕意匠條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

意匠條例

第一條 工業上ノ物品ヲ應用スヘキ形狀模様若クハ色彩ニ係ル新規ノ意匠ヲ按出シタル者ハ此條例ニ依リ其意匠ハ登録ヲ受ケテ之ヲ專用スルコトヲ得

第二條 左ニ掲グル意匠ハ登録ヲ受ケルコトヲ得サルモノトス

一 風俗ヲ害スヘキモノ

二 登録出願以前公ニ知ラレ又ハ公ニ用ヒラレタルモノ

第三條 意匠ノ登録ヲ受ケント欲スル者ハ一 意匠毎ニ明細書及圖面ヲ添へ農商務大臣ニ出願スヘシ但其願書明細書及圖面ハ特許局ニ差出スヘシ

第四條 意匠ノ登録ヲ出願スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ其意匠ヲ審査セシメ登録ヲ許スヘシト査定シタルモノト農商務大臣ノ認可ヲ經テ意匠原簿ニ登録シ其登録證下付ノ手續ヲ爲スヘシ

第五條 登録證ハ農商務大臣之ニ署名シ特許局長之ニ副署シ明細書及圖面ヲ添へ之ヲ下付スルモノトス

第六條 意匠専用ノ年限ハ三年五年七年及十年ノ四種ト爲シ原簿登録ノ日ヨリ起算ス

第七條 意匠ノ専用ハ農商務大臣ノ定ムル物品類別ニ於テ出願人ノ指定シタル物品ニ限ルモノトス

第八條 二人以上同一又ハ類似意匠ノ登録ヲ出願スル者アルトキハ願書日付ノ先ナルモノヲ登録ス其日附同キモノハ其ニ之ヲ登録セサルモノトス但出願人協議ノ上連名ニテ其登録ヲ出願スルトキ又ハ其出願ヲ

取消ス者アリテ出願者一人トナリタルモ此限ニ在ラス

第九條 意匠ノ登録ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相續者ニ屬スルモノ

トス
 第十條 他人ノ委託又ハ雇主ノ費用ヲ以テ提出シタル意匠ノ登録出願ノ權利ハ其委託者若クハ雇主ニ屬ス
 但別ニ契約アル場合ニ於テハ此限ニ在ラス
 第十一條 登録ヲ受ケタル意匠ト雖モ第二條ニ該ルコトヲ發見セラレタルモノ又ハ第八條第十條ニ違ヒ登録ヲ受ケタルコトヲ發見セラレタルモノハ其登録ヲ無効トス
 第十二條 意匠ノ審査査定審判ニ關スル事項ハ總テ特許條例ヲ適用ス
 第十三條 意匠専用權ハ制限ヲ附シ若クハ附セスシテ賣與讓與シ若クハ共有トナシ又ハ書入ト爲スコトヲ得此場合ニ於テハ特許局ニ請求シ契約ノ登録ヲ受クヘシ登録ヲ受ケサル契約ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス
 第十四條 特許局ノ官吏ハ在職中意匠ノ登録ヲ出願シ又ハ意匠専用權ヲ新ニ有スルコトヲ得ス但相續ニ由リ意匠専用權ヲ新ニ有スルハ此限ニ在ラス
 第十五條 登録意匠主其登録證ヲ毀損若クハ亡失シタルキハ事由ヲ具シ再下付ヲ出願スルコトヲ得
 第十六條 登録意匠主其明細書若クハ圖面ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ登録ノ効力ヲ全クスル爲メ改訂明細書若クハ圖面ヲ添ヘ登録證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其意匠ニ變更ヲ生スルモノハ此限ニ在ラス
 第十七條 登録意匠主ハ其意匠ヲ應用シタル物品ニ農商務大臣ノ定メタル登録標記ヲ爲スヘシ
 第十八條 意匠ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ
 一 意匠ノ登録ヲ出願スル片 金五拾錢
 二 登録意匠ノ賣與讓與共有又ハ書入契約ノ登録ヲ請求スルトキ 一 意匠ニ付物品一類毎ニ 金三圓
 三 登録證ノ再下付ヲ出願スルトキ

證書一枚毎ニ 金壹圓
 四 登録證ノ改訂ヲ出願スルトキ 金貳圓
 一 意匠ニ付物品一類毎ニ 金貳圓
 五 審判ヲ請求スルトキ 金七圓
 一 事件毎ニ
 一 三年ノ専用 金壹圓
 二 五年ノ専用 金貳圓
 三 七年ノ専用 金四圓
 四 十年ノ専用 金八圓
 第二十條 登録意匠ニ關スル書類ノ謄本若クハ圖面ノ複製ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムヘシ
 第二十一條 登録意匠ノ専用權ヲ侵シタル者ハ其意匠主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ
 第二十二條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿免除ノ期トス
 第二十三條 他人ノ登録意匠ナルコトヲ知り之ヲ同一物品ニ應用シテ之ヲ販賣シタル者又ハ情ヲ知りテ其物品ヲ受託販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 登録意匠主ノ權利ヲ侵スヘキ物品ナルコトヲ知り之ヲ外國ヨリ輸入シテ販賣シタル者又ハ情ヲ知り其物品ヲ受託販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ
 詐欺ノ所爲ヲ以テ登録證ヲ受ケタル者又ハ登録ヲ受ケサル意匠ヲ應用シタル物品ニ登録標記若クハ類似ノ標記ヲ爲シテ販賣シタル者又ハ情ヲ知り其物品ヲ受託販賣シタル者ハ罰第一項ニ同シ
 第二十四條 前條第一項第二項ノ場合ニ於テハ其犯罪ノ物件ヲ沒收シテ登録意匠主ニ給付シ其既ニ賣捌キ

タルモノハ代價ヲ追徴シテ之ヲ給付ス

第二十五條 第二十三條第一項第二項ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

前項ノ場合ニ於テ告訴人ノ請求ニ依リ裁判官ハ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ販賣ヲ差止ムルコトヲ得

第二十六條 登録意匠主第十七條ノ登録標記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキハ告訴又ハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二十七條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十八條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十九條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス

第二十五章 商標

勅令 明治二十一年十二月 商標條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商標條例

第一條 自己ノ商品ヲ表彰スル爲メ商標ヲ使用セント欲スル者ハ此條例ニ依リ其商標ノ登録ヲ受ケ之ヲ專用スルコトヲ得

商標ハ特別著明ナル圖形字體又ハ其結合ヲ以テ要部ト爲スヘシ

第二條 左ニ掲ケル商標ハ登録ヲ受ケルコトヲ得サルモノトス

一 風俗ヲ害スヘキモノ

二 商品普通ノ名稱若クハ内外國ノ旗章ノミヲ以テ要部ト爲スモノ

三 他人ノ登録商標又ハ登録出願以前ヨリ他人ノ使用スル商標ト同一若クハ類似ニシテ同一商品ニ使用セントスルモノ

第三條 商標ノ登録ヲ受ケント欲スル者ハ一商標毎ニ明細書及見本ヲ添へ農商務大臣ニ出願スヘシ但其願書明細書及見本ハ特許局ニ差出スヘシ

第四條 商標ノ登録ヲ出願スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ其商標ヲ審査セシメ登録ヲ許スヘシト査定シタルモノハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ商標原簿ニ登録シ其登録證下付ノ手續ヲ爲スヘシ

第五條 登録證ハ農商務大臣之ニ署名シ特許局長之ニ副署シ明細書及見本ヲ添へ之ヲ下付スルモノトス

第六條 商標專用ノ年限ハ二十年ト爲シ原簿登録ノ日ヨリ起算ス

第七條 商標ノ専用ハ農商務大臣ノ定ムル商品類別ニ於テ出願人ノ指定シタル商品ニ限ルモノトス

第八條 二人以上同一又ハ類似ノ商標ヲ同一商品ニ使用セントシテ登録ヲ出願スル者アルトキハ願書日附ノ先ナルモノヲ登録ス其日附同キモノハ共ニ之ヲ登録セサルモトス但其出願ヲ取消ス者アリテ出願者一人トナリタルトキハ此限ニ在ラス

第九條 商標ノ登録ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相続者ニ屬スルモノトス

第十條 登録ヲ受ケタル商標ト雖モ第二條ニ該ルコトヲ發見セラレタルモノ又ハ第八條ニ違ヒ登録ヲ受ケタルコトヲ發見セラレタルモノハ其登録ヲ無効トス

第十一條 商標ノ審査査定審判ニ關スル事項ハ總テ特許條例ヲ適用ス

第十二條 登録商標主其營業ヲ賣與讓與シ又ハ他人ト其營業ヲ共ニスル場合ニ限り其商標專用權ヲ賣與讓與シ若クハ共有トナスコトヲ得此場合ニ於テハ特許局ニ請求シ契約ノ登録ヲ受ケヘシ登録ヲ受ケサル契約ハ第三條ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第十三條 登録ヲ受ケタル商標ト雖モ左ノ場合ニ於テハ登録ノ効ヲ失フモノトス

一 登録商標主相當ノ事故ナケシテ商標登録ノ日附ヨリ六箇月ヲ經テ其商標ヲ使用セサルトキ

二 登録商標主相當ノ事故ナケシテ其商標ノ使用ヲ一箇年間に止シタルトキ

三 登録商標主其商標ヲ使用スル營業ヲ廢止シタルトキ

四 登録商標主其商標ヲ使用スル商品ノ數量産地品質等ニ關シ不實ノ事項ヲ附記シタルトキ

五 登録商標主磨滅若クハ缺損シタル商標ヲ使用シタルトキ

第十四條 登錄商標主其專用年限滿期ノ後其商標ヲ續用セント欲スル者ハ更ニ其登錄ヲ出願スルコトヲ得
 第十五條 登錄商標主其登錄證ヲ毀損若クハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ再下付ヲ出願スルコトヲ得
 第十六條 登錄商標主其明細書若クハ見本ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ登錄ノ効力ヲ全クスル爲
 ×改訂明細書若クハ見本ヲ添ヘ登錄證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其商標ノ要部ニ變更ヲ生スルモノハ
 此限ニ在ラス

第十七條 商標ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

一 商標ノ登錄ヲ出願スルトキ

金壹圓

二 登錄商標ノ賣與讓與又ハ共有契約ノ登錄ヲ請求スルトキ

金參圓

三 登錄證ノ再下付ヲ出願スルトキ

金壹圓

四 登錄證ノ改訂ヲ出願スルトキ

金貳圓

五 審判ヲ請求スルトキ

金七圓

第十八條 商標登錄證又ハ其改訂登錄證又ハ其續用登錄證ヲ受ケル者ハ其商標ヲ使用スル物品一類毎ニ登
 録料金拾圓ヲ納ムヘシ

第十九條 特許局ハ時々商標公報ヲ印刷シ衆庶ノ縱覽ニ供スヘシ其請求者アルトキハ相當代價ヲ以テ之ヲ
 拂下ケルコトヲ得

第二十條 登錄商標ニ關スル書類ノ謄本ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ相當
 ノ手数料ヲ納ムヘシ

第二十一條 登錄商標ノ專用權ヲ侵シタル者ハ其商標主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第二十二條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿死除ノ期トス

第二十三條 他人ノ登錄商標ナルコトヲ知り之ト同一又ハ類似ノ商標ヲ同一商品ニ使用シテ之ヲ販賣シタ
 ル者又ハ情ヲ知り其商品ヲ受託販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰
 金ニ處ス

詐欺ノ所爲ヲ以テ登錄證ヲ受ケタル者又ハ登錄ヲ受ケサル商標ニ登錄ノ文字ヲ記シタル者又ハ情ヲ知り
 其商品ヲ受託販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

第二十四條 前條ノ場合ニ於テハ違犯ノ商標ヲ沒收ス其商品ト分離スヘカヲサルモノハ商品ヲ破毀セシム

第二十五條 第二十三條第一項ノ犯罪ノ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

前項ノ場合ニ於テ告訴人ノ請求ニ依リ裁判官ハ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ販賣ヲ差止ムルコトヲ得

第二十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十八條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス

第二十六章 寫真版權

勅令 明治二十年十二月二日 朕寫真版權條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 十八日第七十九號

寫真版權條例

第一條 凡ソ光線ト藥品トノ作用ニヨリ人物器物景包其他物象ノ眞形ヲ寫シタルモノヲ寫眞ト云ヒ寫眞ヲ
 發行シテ其利益ヲ專有スルノ權ヲ寫眞版權ト云フ

第二條 寫眞版權ハ寫眞師ニ屬シ寫眞師死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス但他人ノ囑托ニ係ルモ
 ノ、寫眞版權ハ囑托者ニ屬シ囑托者死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス

囑托ニ係ル寫眞ノ種族ニシテ現存スルモノハ版權所有者ニ於テ之ヲ寫眞師ヨリ受取ルコトヲ得ルモノト

第三條 寫真版權ノ保護ヲ受ケント欲スル者ハ發行前寫真一版ニ付見本二葉及六葉ノ定價ヲ添ヘ版權登録ヲ
 内務省ニ願出ヘシ但人物ノ寫真ハ登録ヲ待タズシテ其保護ヲ受ケルモノトス
 第四條 版權登録ノ寫真ニハ其保護年限間ハ版權所有者ノ氏名住所版權登録ノ年月ヲ記載スヘシ其記載セ
 サル者ハ登録ノ効ヲ失フモノトス
 第五條 内務省ニ於テハ寫真版權登録簿ヲ備ヘ置キ登録ノ願出アリタルトキハ之ヲ登録シ登録證書ヲ下付
 スヘシ
 寫真版權登録證書ノ取扱ハ總テ文書圖書ノ版權登録證書ニ準クルモノトス
 第六條 寫真版權保護ノ年限ハ登録ノ月ヨリ十年トス
 第七條 寫真版權ハ制限ヲ付シ若クハ付セスシテ賣渡シ讓渡スコトヲ得
 第八條 版權ノ保護ヲ受ル寫真ハ之ヲ複製シ若クハ機械又ハ含蓄ノ作用ニヨリ多數ヲ増製シ得ヘキ方法ヲ
 以テ寫真術ト類似ノ模寫ヲ爲シ及寫真師ニ於テ本人又ハ其相續者ノ承諾ヲ受スシテ囑托ニ係ル寫真ヲ増
 製スルコトヲ得ス
 第九條 第三條ノ手續ヲナサズシテ版權登録ヲ詐稱シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス
 第十條 第八條ニ違フ者ハ版權條例ニ據リ偽版ヲ以テ論シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ及損害賠償
 ハ責ニ任セシム
 損害賠償ノ責ハ其原寫真ノ版權年限終ルノ後一年ヲ以テ期滿得免ノ期トス
 第十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期限ハ一年トシ其犯罪ト認メテレタル寫真又ハ模寫物作爲ノ時ヨリ起算
 シ其發賣セルモノハ最後ニ發賣シタル時ヨリ起算ス
 第十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪併發ノ例ヲ用キス

第二十七章 脚本樂譜

勅令 明治二十年十二月二日 除脚本樂譜條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

脚本樂譜條例

第一條 演劇脚本及樂譜ハ出版條例及版權條例ニ據リ之ヲ出版シ及版權ヲ所有スルコトヲ得
 第二條 演劇脚本若クハ樂譜ヲ出版シテ版權ヲ所有スル者ハ版權年限中ハ其興行權(即チ利益ノ爲メ公衆
 ノ前ニ演スルノ權)ヲ併セ有スルコトヲ得但興行權ヲ有セントスルトキハ其脚本又ハ樂譜ニ興行權所有
 ノ五字ヲ記載スヘシ
 第三條 演劇脚本及樂譜ノ興行權ハ制限ヲ付シ若クハ付セスシテ之ヲ賣渡シ讓渡スコトヲ得
 第四條 演劇脚本若クハ樂譜ノ興行權ヲ犯シタル者ハ興行權所有者ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ著作
 者又ハ其相續者ノ承諾ヲ經スシテ未タ出版セサル脚本若クハ樂譜ヲ興行スル者亦同シ
 第五條 興行ニ關スル損害賠償ノ責ハ其興行權ヲ犯シタル最終ノ月ヨリ一年ヲ以テ期滿得免ノ期トナ
 ス

第二十八章 銀行

法律 明治二十三年八月二日 銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行
 十三日第七十二號
 スヘキコトヲ命ズ

銀行條例

第一條 公ニ開キタル店舗ニ於テ營業トシテ證券ノ割引ヲ爲シ又ハ爲替事業ヲ爲シ又ハ諸預リ及貸付ヲ併
 セ爲ス者ハ何等ノ名稱ヲ用キルニ均ラズ總テ銀行トス
 第二條 銀行ノ事業ヲ營マントスル者ハ其資本金額ヲ定メ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受ケヘシ
 第三條 銀行ハ毎半箇年營業ノ報告書ヲ製シ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ニ送付スヘシ
 第四條 銀行ハ毎半箇年財產目錄貸借對照表ヲ製シ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ
 第五條 銀行ハ一人又ハ一會社ニ對シ資本金高ノ十分一ヲ超過スル金額ヲ貸付又ハ割引ノ爲ニ使用スルコ
 トヲ得ス

トヲ得ス
 資本金總額ノ拂込ヲ了テサル銀行ニ於テハ一人又ハ一會社ニ對シ其拂込高ノ十分ノ一ヲ超過スル金額ヲ
 貸付又ハ割引ノ爲ニ使用スルコトヲ得ス
 第六條 銀行ノ營業時間ハ午前十時ヨリ午後第四時マテトス但營業ノ都合ニ依リ之ヲ增加スルコトヲ得
 第七條 銀行ノ休日ハ大祭日、祝日、日曜日及銀行營業地ニ行ハル、定例ノ休日トス但止ヲ得サル事故ヲ
 ルトキハ地方長官ニ届出テ豫メ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ公告シタル上休業スルコトヲ得
 第八條 大藏大臣ハ何時タリトモ地方長官又ハ其他ノ官吏ニ命シテ銀行ノ業務ヲ實況及財産ノ現況ヲ検査
 セシムルコトヲ得
 第九條 第二條ノ規定ニ違反シ大藏大臣ノ認可ヲ受ケスシテ銀行ノ事業ヲ營ミタル者ハ商法第二百五十六
 條ノ例ニ依テ處分ス
 第十條 銀行ニ於テ第三條ノ報告若ハ第四條ノ公告ヲ爲サス又ハ其報告中若ハ公告中ニ詐偽ノ陳述ヲ爲シ
 若ハ事實ヲ隱蔽シタルトキハ商法第二百六十二條ノ例ニ依テ處分ス
 第八條ノ検査ヲ受ルコトヲ拒ミタルトキハ商法第二百五十八條ノ例ニ依テ處分ス
 第十一條 此條例ハ日本銀行橫濱正金銀行國立銀行ニ適用セス

第二十九章 貯蓄銀行

法律 明治二十三年八月二日 朕貯蓄銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ
 施行スヘキコトヲ命ス

貯蓄銀行條例

第一條 複利ノ方法ヲ以テ公衆ノ爲ニ預金ノ事業ヲ營ム者ヲ貯蓄銀行トス
 銀行ニ於テ新ニ一口五圓未満ノ金額ヲ定期預リ若ハ當座預リトシテ引受ルトキハ貯蓄銀行ノ業ヲ營ム者
 ト爲シ此條例ニ依ラシム

第二條 資本金三萬圓以上ノ株式會社ニアラサレハ貯蓄銀行ノ業ヲ營ムコトヲ得ス

第三條 貯蓄銀行ノ取締役ハ銀行ノ義務ニ付連帶無限ノ責任ヲ負フモノトス

但其責任ハ退任後一箇年ノ満了ニ因リテ消滅ス

第四條 貯蓄銀行ハ貯蓄拂戻ノ保證トシテ資本入金ノ半額ヨリ少カラサル金額ヲ利付國債證券ニテ備ヘ置
 キ之ヲ供託所ニ預ケ入ルヘシ

第五條 貯蓄銀行ハ左ニ掲グル事項ノ外其資金ヲ運轉スルコトヲ得ス

第一 貸付

第二 證券ノ割引

第三 國債證券及地方債證券ノ買入

第六條 貯蓄銀行ニ於テ前條ニ依リ貸付ヲ爲スハ其期限六箇月以内ニシテ國債證券地方債證券ヲ質ト爲シ

タル場合ニ限ル其割引ヲ爲スハ支拂資力ニ付疑フヘキ理由ノ存セサル者ニ名以上ノ裏書アル爲替手形約

束手形ニ限ルベシ

貯蓄銀行ハ國債證券及地方債證券ノ定期買買ヲ爲スコトヲ得ス

第七條 貯蓄銀行ニ於テ其定款ヲ變更セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八條 銀行ニシテ貯蓄銀行ノ事業ヲ營マントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第九條 貯蓄銀行ニシテ此條例ノ規定ニ違反シタルトキハ其取締役ヲ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

貯蓄銀行ニアラスシテ貯蓄銀行ノ業ヲ營ミタルトキハ營業主又ハ會社ノ業務擔當社員若ハ取締役ヲ前項

ノ罰ニ處ス

第十條 此條例ニ特別ノ規定ヲ設ケザルモノハ總テ銀行條例ニ依ル

第三十章 取引所

法律 明治二十六年三月 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル取引所法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

取引所法

第一章 取引所ノ設立

- 第一條 賣買取引ノ繁盛ナル地區内ノ商人ハ政府ノ免許ヲ受ケテ一種若數種ノ物件ノ取引所ヲ設立スルコトヲ得
- 第二條 同種ノ物件ヲ賣買取引スル取引所ハ一地區一箇所ニ限り設立スルコトヲ得但シ其ノ地區ハ農商務大臣之ヲ定ム
- 第三條 取引所ノ免許年限ハ十箇年トス但シ土地商業ノ情況ニ依リ更ニ繼續ノ出願ヲ爲スコトヲ得
- 第四條 株式會社組織ノ取引所ハ營業保證金ヲ政府ニ納ムヘシ
- 第二章 取引所ノ組織
- 第五條 取引所ノ土地商業ノ情況及賣買取引スヘキ物件ノ種類ニ依リ會員組織又ハ株式會社組織ト爲スコトヲ得
- 第六條 會社組織ノ取引所ニ於テハ其ノ取引所ノ仲買人及會員ニ限り賣買取引ヲ爲スコトヲ得
- 株式會社組織ノ取引所ニ於テハ其ノ取引所ノ仲買人ニ限り賣買取引ヲ爲スコトヲ得
- 第七條 取引所ハ法人トシテ財産ヲ所有シ及之ヲ處分スルコトヲ得
- 取引所ノ責任ハ其ノ財産ニ限ルモノトス
- 第八條 取引所ハ政府ノ認可ヲ受ケ其ノ營業部類ニ屬スル商品ノ倉庫ヲ設置シ及指圖式ノ倉庫證書ヲ發行スルコトヲ得
- 取引所ハ其ノ倉庫證書ニ對シ前貸ヲ爲シ又ハ買受クルコトヲ得
- 第九條 取引所ノ定款ハ政府ノ認可ヲ受クベシ
- 第三章 取引所ノ會買主及仲買人
- 第十條 一箇年以上取引所ノ營業部類ニ屬スル商業ニ從事シタル商人ハ定款ノ規程ニ從ヒ其ノ取引所ノ會買トナルコトヲ得

二箇年以上其ノ取引所ノ營業部類ニ屬スル商業ニ從事シタル商人ニシテ年齢二十五歳以上ノ者ハ政府ノ免許ヲ受ケ其ノ取引所ノ仲買人トナルコトヲ得

一種ノ商業ニ付前項ノ資格ヲ有スル者ハ土地商業ノ情況ニ依リ二種以上ノ物件ヲ賣買取引スル取引所ノ仲買人タル免許ヲ受クルコトヲ得

第十一條 帝國臣民ニ非ラレハ取引所ノ會買 株主又ハ仲買人トナルコトヲ得

婦女、未成年者、公權剝奪及停止中ノ者、復讐セザル破産者及家督分取者並ニ取引所ニ於テ除名ノ處分ヲ受ケタル者ハ取引所ノ會買タルコトヲ得

重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ又ハ信用ヲ害スル罪、財産ニ對スル罪、商業及農工業ノ妨害スル罪ヲ犯シテ刑ニ處セラレ具ノ満期若ハ赦免後二箇年ヲ經サル者及前項ニ該當スル者ハ取引所ノ仲買人タルコトヲ得

第十二條 取引所ノ會買ハ自己ノ計算ヲ以テスルノ外取引所ニ於テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得

仲買人ハ自己ノ計算ヲ以テスルト他人ノ計算ヲ以テスルトヲ問ハス取引所ニ對シ其ノ賣買取引上一切ノ責任ヲ負フヘシ

第十三條 取引所ノ仲買人ハ其ノ免許ヲ受クルトキ免許料ヲ納ムヘシ

第十四條 取引所ノ會買及仲買人ハ身元保證金ヲ其ノ取引所ニ納ムヘシ

第十五條 取引所ハ其ノ秩序ヲ保持スルカ爲定款ノ規定ニ依リ會員又ハ仲買人ノ營業ヲ停止シ五百圓以内ノ過怠金ヲ課シ且政府ノ認可ヲ受ケ會買又ハ仲買人ヲ除名スルコトヲ得

第十六條 取引所ノ役員ハ定款ノ規定ニ依リ會買又ハ株主中ヨリ二箇年以内ノ任期ヲ以テ之ヲ選舉シ政府ノ認可ヲ受クヘシ

理事長 一人

理事 二人以上

監査役 若干人

理事長及理事ハ會員ニ非サル者ヲ選舉スルモ妨ケナシ

第十一條 第三項ニ該當スル者ハ取引所ノ役員ト爲スコトヲ得ス

第十二條 取引所ノ役員及雇人ハ其ノ取引所ニ於テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得ス但シ監査役ハ此ノ限ニ在ラ

第五章 取引所ノ賣買取引

第十八條 取引所ノ賣買取引ハ直取引、延取引及定期取引ノ三種トス

第十九條 取引所ノ賣買取引ノ方法ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 取引所ハ其ノ定款ニ依リ賣買取引ニ付證據金ヲ納メシムルコトヲ得

第二十一條 取引所ハ賣買取引ノ責任ヲ履行セサル者アルトキハ其ノ證據金及身元保證金ヲ以テ損害賠償

ノ用ニ供スルコトヲ得

第二十二條 株式會社組織ノ取引所ノ賣買取引ノ違約ヨリ生スル損害ニ付賠償ノ責ニ任スヘシ

前項ノ場合ニ於テ取引所ハ其ノ賠償シタル金額及之ニ關スル諸費ノ追償ヲ其ノ違約者ニ要求スルコトヲ

得

第二十三條 取引所ハ賣買取引高ニ應ジ賣買雙方ヨリ手数料ヲ徵收スルコトヲ得共ノ率ハ政府ノ認可ヲ受

クヘシ

第二十四條 取引所ハ證據金及身元保證金ニ付他ノ債主ニ對シ優先權ヲ有ス

第二十五條 取引所外ニ於テ取引所ノ定期取引ト同一又ハ類似ノ方法ヲ以テ賣買取引ヲ爲スコトヲ得ス

第二十六條 取引所ニ於テ賣買取引シタル物件ノ相場ハ公定相場トス

第六章 取引所ノ監督

第二十七條 農商務大臣ハ取引所ノ行爲法律命令ニ違反シ又ハ公益ヲ害シ若ハ公衆ノ安寧ニ妨害アリト認

ムルトキハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一 取引所ノ解散

二 取引所ノ停止

三 取引所一部ノ停止若ハ禁止

四 役員ノ解職

五 會員又ハ仲買人ノ營業停止若ハ除名

第二十八條 農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ官吏ヲシテ取引所ノ業務帳簿財産其ノ他一切ノ物件及會員

又ハ仲買人ノ帳簿ヲ檢査セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ取引所ノ役員會員及仲買人ハ其ノ物件ヲ提

供シ質問ニ應答スヘシ

第二十九條 農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ取引所ノ定款ヲ改正セシメ又ハ其ノ決議及處分ヲ停止シ禁

止シ若ハ取消スコトヲ得

第三十條 取引所任意ノ解散ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第七章 罰則

第三十一條 第十二條第一項及第十七條ノ規定ニ違背シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條 第二十五條ニ違背シタル者及公定相場ヲ偽リタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第三十三條 取引所ノ稅則ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第三十四條 取引所ノ資本金營業保證金株式手数料及積立金ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十五條 本法ハ明治二十六年十月一日ヨリ施行ス

明治九年布告第五號米商會所條例、明治十一年布告第八號株式取引所條例、明治二十年勅令第十一號

取引所條例、明治十三年布告第二十一號、明治十五年布告第四十六號、明治十六年布告第四號及同年布

告第二十九號ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十六條 本法發布以前ヨリ營業スル米商會所、株式取引所及取引所ハ本法ニ依リ更ニ免許ヲ受ケ其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得但シ本法施行ノ日ヨリ二箇月以前ニ於テ出願ノ手續ヲ爲サ、ルモノハ此ノ限ニ在ラス

法律明治二十六年三月 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル取引所稅法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

取引所稅法

第一條 取引所ハ定期賣買ニ付左ノ割合ニ從ヒ税金ヲ納ムヘシ

一 商品、有價證券 賣買各約定代金高萬分ノ六箇

一 國債及地方債證券 同 萬分ノ三箇

第二條 定期内ニ於ケル轉賣人ノ賣高及買戻人ノ買高ニ係ル税金ハ之ヲ免除ス

第三條 賣買ヲ解約スルコトアルモ其ノ税金ハ之ヲ免除セズ

第四條 取引所ハ每一箇月分賣買取引ヲ爲シタル各約定代金高ヲ翌月五日迄ニ官廳ニ届出ヘシ

取引所稅額ハ前項ノ届出ニヨリ地方長官之ヲ定ム

第五條 取引所稅金ハ每一箇月分ヲ翌月二十日迄ニ納ムヘシ

第六條 當該官吏ハ地方長官ノ命令ニ依リ隨時取引所並ニ會買仲買人ニ就キ其ノ賣買取引ニ關スル帳簿書類ヲ検査スルコトアルヘシ

第七條 第四條ノ届出ヲ詐リ脫稅ヲ圖リ又ハ脫稅シタルトキハ取引所理事長ヲ百圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ仍取引所ヨリ其ノ脫稅ニ係ル金額ヲ徵收スヘシ

第八條 第四條ノ届出ヲ怠リタルトキハ理事長ヲ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第九條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重、數罪俱發ノ例ヲ用キス

附則

第十條 本法ハ取引所法實施ノ日ヨリ施行ス

第十條 本法ハ取引所法實施ノ日ヨリ施行ス

第三十一章 公證人

法律明治十九年八月 朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公正證書類ヲ作ルコトヲ得ス

若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効ヲ有セズ

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スルガアル

モノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アル

トキハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ

住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セントスルトキハ管轄始審裁判所

ノ認可ヲ受ケ可シ

巴ムヲ得ザル事件ニ付テハ受持區内ニ限リ役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ親屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲ノニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲ニモ職

務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セズ

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求メアレハ其

理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所ニ差出スベシ

前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セ

第十一條 公證人ハ已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲナサシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及騰本ノ用紙ハ其始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル野紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ水紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式騰本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式騰本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ水書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ騰本ヲ渡ス可カラズ

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可カラズ

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 満二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大学卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲グル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公権制奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐偽罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官更懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二個月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訴訟法、商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人タラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大学卒業生ハ其卒業證書代官人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ズ

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格ヒサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試驗及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス
公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戸長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證シシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲グル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ學生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件ヲ記載スヘシ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戸長證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作りし場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス

捺印ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ

教員並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸柒捌玖拾陸萬ノ字ヲ用ユ可シ

第三十二條 廢置衝、貨幣ノ數量、名稱及廢法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ

既ニ廢シタル廢置衝、貨幣、廢法又ハ外國ノ廢置衝、貨幣、廢法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尚ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加、改正、消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作りタルトキハ關係人ニ詢問セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ某治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ

公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十五條 證書ノ紙目合目ニハ公證人並ニ囑託人並ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メニ訴訟代人若クハ代書人トナリ又ハ屬リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可ラス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セス又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サ、ルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連綴ス可シ其寫ニハ

本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ副印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連続スルコトヲ得之ヲ連続シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數部ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ヲ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セス

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス裁判官ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連続ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシムヘシ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經テ之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 事件ヲ列記シ各人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラス又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アル非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可キコトヲ命スルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及付屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應ジ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連続シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命セラレサル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ提出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキ目錄ニ依リ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印スヘシ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ提出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受ケルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受ケルコトヲ得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受ケルコトヲ得其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滞留スルトキハ日當七拾錢ヲ受ケルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ職務ヲ行フトキハ其手数料ハ總テ兼任者之ヲ受テ可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ郵紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受ケルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ

第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時
 第十一條ニ違ヒタル時
 第十三條ニ違ヒタル時
 第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時
 第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第三十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第三十五條ニ違ヒタル時
 第四十條ニ違ヒタル時
 第四十一條ニ違ヒタル時
 第四十二條ニ違ヒタル時
 第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十六條ニ違ヒタル時
 第五十二條ニ違ヒタル時
 第五十三條ニ違ヒタル時
 第五十四條ニ違ヒタル時
 第五十五條ニ違ヒタル時
 第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時
 第六十一條ニ違ヒタル時
 第六十三條ニ違ヒタル時
 第七十四條 左ノ違犯ハ二圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス
 第四十三條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス
 第二條ニ違ヒタル時
 第七條ニ違ヒタル時
 第十條ノ第二項ニ違ヒタル時
 第二十八條ニ違ヒタル時
 第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
 第三十三條ニ違ヒタル時
 第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
 第三十六條ニ違ヒタル時
 第三十七條ニ違ヒタル時
 第三十八條ニ違ヒタル時
 第三十九條ニ違ヒタル時
 第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス
 第四條 第一項ニ違ヒタル時
 第十五條ニ違ヒタル時
 第十六條ニ違ヒタル時
 第十七條ニ違ヒタル時
 第七十七條 公證人前條條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ控訴スルコトヲ得但所

告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス
 第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス
 第二十條ノ第一第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身元保證金ヲ差入レサルトキ又前項ニ同シ
 第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス可シ

第三十二章 辯護士

法律明治二十六年三月廿七號 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル辯護士法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 辯護士法

第一章 辯護士ノ資格及職務

第一條 辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス但シ特別法ニ因リ特別裁判所ニ於テ其職務ヲ行フコトヲ妨ケス
 第二條 辯護士タラムト欲スル者ハ左ノ條件ヲ具フルコトヲ要ス
 第一 日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト
 第二 辯護士試験規則ニ依リ試験ニ及第シタルコト
 第三條 辯護士試験ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム
 第四條 左ニ掲ケル者ハ試験ヲ要セスシテ辯護士タルコトヲ得
 第一 判事檢事タル資格ヲ有スル者又ハ辯護士ニシテ其請求ニ因リ登録ヲ取消シタル者
 第二 法律學ヲ修メタル法學博士帝國大學法律科卒業生舊東京大學法學部卒業生司法省舊法學校正則師卒業生及司法官候補生
 第五條 左ニ掲ケル者ハ辯護士タルコトヲ得ス
 第一 重罪ヲ犯シタル者但シ該事犯ニテ復權シタルトキハ此限ニ在ラス
 第二 不敬罪偽造罪賄賂罪誣告罪竊盜罪詐欺取罪賄賂罪廢物ニ關スル罪遺失物埋藏物ニ關スル罪家資分

散ニ關スル罪及刑法第百七十五條同第百六十條同第百八十二條同第百八十六條同第百八十七條同第百六十條ニ記載シタル定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 必據停止中ノ者

第四 破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者
 第六條 辯護士ハ報酬アル公務ヲ兼アルコトヲ得ス但シ帝國議會議員府縣會常置委員ト爲リ又ハ官廳ヨリ特ニ命ゼラレタル職務ヲ行フハ此ノ限ニ在ラス
 辯護士ハ商業ヲ營ムコトヲ得ス但シ辯護士會ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二章 辯護士名簿

第七條 辯護士ハ辯護士名簿ニ登録セラルコトヲ要ス
 第八條 各地方裁判所ニ辯護士名簿ヲ備フ

辯護士ハ其氏名ヲ登録シタル地方裁判所ノ所屬トス

刑事訴訟法第二百六十四條及第二百七十九條ノ所屬辯護士ハ受訴裁判所所在地ノ辯護士ヲ以テ之ニ充ツ
 第九條 辯護士名簿ニ登録ヲ請フ者ハ其所屬地方裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ司法大臣ニ請求書ヲ差出スヘシ
 登録名簿ニハ第二條乃至第六條ノ事項ニ關スル證明書ヲ添フ可シ

第十條 登録ヲ請フ者ハ登録手数料トシテ金二十圓ヲ納ムヘシ

他ノ地方裁判所ニ登録換フ爲ストキハ手数料トシテ金十圓ヲ納ム可シ

第十一條 登録ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第三章 辯護士ノ權利及義務

第十二條 辯護士ハ登録後三年ヲ經過スルニ非サレハ大審院ニ於テ其職務ヲ行フコトヲ得ス但シ三年以上判事檢事タリシ者ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 辯護士ハ正當ノ理由ヲ證明スルニ非サレハ裁判所ノ命シタル職務ヲ行フヲ辭スルコトヲ得ス

第十四條 辯護士ハ左ニ掲ケル訴訟事件ニ付キ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

第一 相手方ノ協議ヲ受ケテ之ヲ贊助シ又ハ委任ヲ受ケタル事件
 第二 刑事檢事審判中取扱ビタル事件
 第三 仲裁手續ニ依リ仲裁人ト爲リテ取扱ヒタル事件
 第十五條 辯護士ハ係事審判ヲ受ルコトヲ得ス
 第十六條 辯護士ハ訴訟事件ノ委任ヲ拒絶セサルトキハ其旨ヲ委任者ニ通告スヘシ若シ通告ヲ怠リテ
 ルトキハ之力爲メ生シテ損害ノ責ニ任ズ
 第十七條 辯護士ハ所屬地方裁判所又ハ其管内區裁判所所在地ニ事務所ヲ定メ之ヲ所屬地方裁判所檢事
 局ニ届出ヘシ

第四章 辯護士會

第十八條 辯護士ハ其ノ所屬地方裁判所毎ニ辯護士會ヲ設立ス可シ
 第十九條 辯護士會ハ所屬地方裁判所檢事正ノ監督ヲ受ケ
 第二十條 辯護士會ニ會長ヲ置ク又副會長ヲ置クコトヲ得
 第二十一條 辯護士會ハ毎年定期總會ヲ開ク又臨時總會ヲ開クコトヲ得
 第二十二條 辯護士會ハ便宜ニ依リ常議員ヲ選クコトヲ得
 第二十三條 辯護士會ハ其ノ會期ヲ定メ檢事正ヲ經由シテ司法大臣ノ認可ヲ受ケ可シ
 辯護士ハ所屬辯護士會ノ會則ヲ遵守スヘシ
 第二十四條 辯護士ハ辯護士會ニ加入シタル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス
 第二十五條 辯護士ハ其ノ所屬地方裁判所管轄外ニ事務所ヲ設ケ職務ヲ行ハムトスルトキハ其職務ヲ行フヘ
 キ地方裁判所所在地ニ辯護士會會則ヲ遵守スヘシ
 第二十六條 辯護士會會則ニハ會長副會長常議員ノ選舉及其ノ職務、總會、常議員會及其ノ議事ニ關スル
 規程
 辯護士ノ風紀ヲ保持スル規程並ニ謝金及手数料ニ關スル規程其ノ他會務ノ處理ニ必要ナル規程ヲ設ケ可シ

第二十七條 會長副會長及常議員選舉ノ結果、總會及常議員會開會ノ日時場所及議題ハ辯護士會ヨリ之ヲ
 檢事正ニ届出可シ
 第二十八條 辯護士會ニ於テハ左ノ事項ノ外議スルコトヲ得ス
 第一 法律命令又ハ辯護士會會則ニ規定シタル事項
 第二 司法大臣又ハ裁判所ヨリ諮問シタル事項
 第三 司法上若ハ辯護士ノ利害ニ關シ司法大臣又ハ裁判所ニ建議スル事項

第五章 懲戒

第二十九條 檢事正ハ辯護士會ノ會場ニ臨席スルコトヲ得又會議ノ結果ヲ報告セシムルコトヲ得
 第三十條 辯護士會ノ會議ニシテ法律命令及辯護士會會則ニ違フモノアルトキハ司法大臣ハ其ノ議決ヲ無
 効トシ又ハ其ノ議事ヲ停止スルコトヲ得

第一 懲責

第三十一條 辯護士ニシテ此ノ法律又ハ辯護士會會則ニ違背シタル所爲アルトキハ會長ハ常議員會又ハ總
 會ノ決議ニ依リ懲戒ヲ求ムル爲檢事正ニ申告スヘシ
 檢事正ハ會長ノ申告ニ依リ又ハ職權ヲ以テ懲戒訴訟ヲ檢事長ニ請求スヘシ
 第三十二條 辯護士ニ對スル懲戒事件ニ付テハ管轄控訴院ニ於テ懲戒裁判所ヲ開ク可シ
 第三十三條 懲戒罰ハ左ノ四種トス
 第一 懲責
 第二 百圓以下ノ過料
 第三 一年以下ノ停職
 第四 除名
 第三十四條 懲戒處分ニ付テハ判事懲戒法ノ規定ヲ準用ス
 附則
 第三十五條 現在ノ代言人ハ本法施行ノ日ヨリ六十日以内ニ辯護士名簿ニ登録ヲ請フトキハ試験ヲ要セス

シテ辯護士タルコトヲ得

第三十六條 現在ノ代言人本法施行前ニ委任ヲ受ケタル事件ニ付テハ其ノ判決ニ至ルマテ職務ヲ行フコトヲ得

第三十七條 第十二條ノ規定ハ現在ノ代言人ニ之ヲ適用セス

第三十八條 本法ハ明治二十六年五月一日ヨリ施行ス

明治十三年司法省甲第一號布達代言人規則ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十三章 執達吏

法律明治二十三年七月二日 股執達吏規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏規則

第一條 執達吏ハ區裁判所ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ及裁判ヲ執行スルモノトス

第二條 執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得

第一 告知及催告ヲ爲スコト

第二 動産不動産ノ任意競賣ヲ爲スコト

第三 拒證書ヲ作ルコト

第三條 執達吏ハ法律規則ニ定メタル職務ノ外裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ニ應スル事務殊ニ左ノ事務ヲ取扱フノ義務アリ

第一 書類物品ノ送付ヲ爲スコト

第二 罰金科料過料ヲ徴收シ及沒收物品ヲ取上ケ若クハ賣却スルコト

第三 令狀ノ執行ヲ爲スコト

第四條 執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ノ監督ヲ受ケ

他ノ判事又ハ檢事ニシテ職務上事務ヲ命シタルトキハ其事務ニ限リ執達吏ニ對シ監督權ヲ有ス

第五條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ住居ヲ定ムヘシ但地方裁判所長ノ許可ヲ得タルトキハ其區裁判所

管轄内ニ限リ他ノ地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ役場ヲ設クヘシ

第七條 一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判所書記ヲ經テ委任スヘキ事務トヲ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘク土地ノ區域ニ從フヘシ

事務分配毎司法年度ノ終ニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事前以テ之ヲ定ム 執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配上其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

第八條 執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ履行ヨリ除外セラレハシ

第一 自己又ハ其婦カ當事者若クハ被害者タルトキ又ハ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若クハ債還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ

第二 自己又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第三 自己カ同一ノ事件ニ付證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第九條 執達吏ハ民事訴訟ニ付テ其婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ノ爲ニシテ訴訟代理人及輔佐人トシテ法廷ニ出ルコトヲ得但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第十條 執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受ケタルトキハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得

第十一條 執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲ケル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

第一 執達吏ノ登用試験ニ及第シタル者

第二 執達吏ノ職務修習者ニシテ三箇月以上其職務ヲ修習シタル者

第三 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第四 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

第十二條 執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サルトキ又ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルトキハ命令ヲ爲シタル裁判所及検事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ速ニ其旨ヲ通知スヘシ

委任ヲ爲シタル本人ニ通知方ルコト能ハサルトキ又ハ急遽ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ申立ツヘシ

第十三條 前條ノ場合其他執達吏差支アルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ掲ケル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十四條 執達吏ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ

臨時職務執行ノ委任ヲ受ケタル者ハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帯スヘシ

第十五條 執達吏ハ裁判所書記ヲ經テタルト否トヲ問ハス委任ヲ受ケ職務ヲ行フニ付テハ定規ノ手数料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ケ

執達吏ハ定規ノ手数料ヲ増減シ又ハ手数料及立替金ノ外報酬ヲ受ケルコトヲ得ス

第十六條 執達吏第三條ニ掲ケル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手数料ヲ受ケルコトヲ得ス

第十七條 執達吏第十一條ノ場合ニ於テ臨時職務執行ノ委任ヲ爲シタルトキハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬トシテ手数料十分ノ三以上ヲ支給スヘシ

第十八條 第十三條ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタル者ハ其職務ニ付定メタル手数料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ケ

第十九條 執達吏一年間ニ收入セシ手数料百八拾圓ニ充テサルトキハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

第二十條 執達吏死亡シタルトキ又ハ停職免職若クハ勾留セラレタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ左ノ處分ヲ爲スヘシ

第一 官印帳簿其他職務ニ關スル書類ヲ區裁判所ニ差出サシムルコト

第二 執達吏職務上保管シタル物品及ヒ書類ノ保全ニ必要ノ手續ヲ爲スコト

第二十一條 執達吏ハ官吏恩給法ニ照シ恩給ヲ受ケ其恩給年額ハ第十九條ニ定メタル金額ヲ俸給額ト看做シテ算定ス

第二十二條 執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ル

附 則

第二十三條 執達吏ヲ置カサル間ハ區裁判所書記執達吏ノ職務ヲ行フ此場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ第十一條ニ掲ケル者又ハ自己ノ適當ト思量スル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

裁判所書記前項ノ委任ヲ爲シタルトキハ委任ヲ受ケタル者ニ執達吏ノ職務ニ付定メタル手数料十分ノ七以上ヲ支給スヘシ

法律 明治二十三年七月二日 朕執達吏手数料規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

一 執達吏手数料規則

第一條 執達吏ハ此規則ニ從ヒ手数料ヲ受ケ

第二條 書類送達ノ手数料ハ一通ニ付五錢トス

第三條 有體動産及未之土地ヨリ離レサル果實並ニ管證券其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ノ差押、假差押ニ付テノ手数料ハ左ノ區別ニ從フ

- 執行スヘキ債權額 手数料
- 貳拾圓マテ 三拾錢
- 五拾圓マテ 五拾錢
- 百圓マテ 七拾五錢

貳百五十拾圓マテ 壹圓
五百圓マテ 壹圓貳拾五錢

千圓マテ 壹圓五拾錢
千圓ヲ超ユルトキハ貳圓トス

若シ執務三時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第四條 執達吏差押、假差押ヲ爲スヘキ場所ニ臨ムト雖差押フヘキ物ナキトキ又ハ差押フヘキ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第五條 民事訴訟法第五百五十六條第二項、第五百八十六條第二項、第六百十五條ノ場合及既ニ差押、假差押ニ著手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタルトキ物ヲ換價スル爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第六條 特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債務者ヨリ取上ケテ之ヲ債權者ニ引渡ス場合ニ於テハ其手数料ヲ五拾錢トス若シ執務二時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第七條 前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖引渡スヘキ物ナキトキハ前項ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク
第八條 民事訴訟法第七百三十一條第一項ノ場合ニ於テハ執務三時間以内ハ手数料ヲ五拾錢トス若シ其執務三時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第九條 前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖船舶アラサルトキハ前項ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク
第十條 民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ不動産ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テハ第三條ニ定メタル區別ニ從ヒ其手数料ヲ受ク
第九條 動産、不動産及船舶ノ競賣ニ付テハ手数料ハ左ノ區別ニ從フ但競賣ニ依リ得タル金額執行スヘキ

債權額ニ超過スルトキハ其債權額ヲ以テ競賣金額ト看做ス

競賣金額

手数料

貳拾圓マテ 六拾錢

五十圓マテ 壹圓

百圓マテ 壹圓五拾錢

貳百五十拾圓マテ 貳圓

五百圓マテ 貳圓五拾錢

千圓マテ 四圓

以上千圓毎ニ壹圓ヲ加フ

任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同じ

第十條 執達吏執行ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ三拾錢トス

第十一條 執達吏執行ヲ爲スヘキ場所ニ臨ミタル後民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ五拾錢トス

第十二條 第三條及至第十一條ノ手数料ヲ受クヘキ行爲ニハ強制執行ノ場合ニ於ケル左ノ行爲ヲ包含ス
第一 警察上ノ援助ヲ求メ又ハ證人鑑定人ノ立會ヲ爲サレムルコト

第二 執行行爲ニ屬スル催告其他ノ通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト

第三 記名證券ヲ買主ノ氏名ニ書換ヘ及必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スコト

第四 支拂其他ノ給付、差押金銀及賣却金ヲ受取り、交付シ若クハ供託シ又ハ受取證書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト

第五 贖費ノ公告ヲ爲スコト
第十三條 執達吏ハ立替金トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

第一 書記料

第二 郵便料、電信料

第三 公告料

第四 證人、鑑定人ノ手當

第五 職工、役夫ノ手當

第六 有價證券ノ記名書及流通ヲ止メタル證券ノ流通ヲ回復スル爲ノ費用

第七 人及物ノ送致費用

第八 物ノ保存並監視ノ費用

第九 果實收獲ノ費用

第十 旅費

第十四條 前條ノ書記料ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ受ク

第一 法律ニ依リ又ハ利害關係人ノ求ニ依リ證書及記録中ニ存スル書類ノ謄本ヲ作りタルトキ

但法律ニ依リ交付スヘキ送達證書ノ謄本ハ此限ニ在ラス

第二 供託ヲ爲スニ際シ執行裁判所ニ差出スヘキ届書ヲ作りタルトキ

第三 差押命令ノ送達後第三債務者ノ爲ス陳述ヲ筆記シタルトキ

書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付貳錢五厘トス但十二行ヲ滿タサルモ半枚ト看做ヒテ算定ス

第十五條 強制執行ニ關セサル告知及催告ヲ爲ストキハ其手数料拾錢ヲ受ク

第十六條 執達吏拒證書ヲ作りタルトキハ手数料拾錢ヲ受ク

拒者ノ營業場又ハ住居ノ間合ヲ爲シ拒證書ヲ作りタルトキハ手数料貳拾錢ヲ受ク

第十七條 證人ニ支給スヘキ日當ハ貳拾錢以下鑑定人ニ支給スヘキ日當ハ五拾錢以下トシ執達吏土地ノ情

況ニ從ヒ之ヲ支給ス若シ一里以上ノ地ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第十八條 執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ拾錢以下ノ旅費ヲ受ク但

一里ニ滿タサルモ一里ト看做ヒテ算定ス

右旅費ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長ニ決定ム

第十九條 執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手数料及立替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納ヒレム若シ豫

納ヒサルトキハ委任ニ應ヒサルコトヲ得但裁判所及檢事局ノ命令ニ依ルトキハ又ハ訴訟上ノ扶助ヲ受ケタ

ル者ノ爲ニ事務ヲ擔任スルトキハ此限ニ在ラス

第二十條 執達吏ハ委任ノ終了シタル後手数料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五

十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二十一條 執達吏裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲ニ要シタル立替金ハ三箇月毎ニ確定シテ

之ヲ支給ス

右立替金ハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十二條 訴訟上ノ扶助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨濟

シ能ハサル場合ニ限ル

第二十三條 執達吏ハ其職務執行ニ付作りタル書類ノ正本又ハ謄本ニ手数料及立替金ノ額ヲ附記スヘシ又

執務時間ニ應ヒ其辨濟ヲ受クヘキトキハ調書ニ其執務時間ヲ附記スヘシ若シ之ヲ附記セサルトキハ最短

ノ時間ニ付テ定メタル金額ヲ以テ算定ス

第三十四章 官規

第一條 服務、懲戒

第一節 服務規律

勅令 明治二十年七月二十九日 官吏服務規律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム

官吏服務規律

- 第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ
- 第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但シ其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得
- 第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハズ廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス
- 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハズ威權ヲ濫用セス謹慎懇切ナルコトヲ務ムヘシ
- 第四條 官吏ハ已ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ洩洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退ク後ニ於テモ亦同様トス
- 裁判所ノ召喚ニ依リ證人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限リ供述スルコトヲ得
- 第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス
- 第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクテ擅ニ職務ヲ離シ及職務上居住ノ地ヲ離ルルコトヲ得ス
- 第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルヲ得ス
- 第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハズ總テ他人ノ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス
- 官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給贈遺ヲ受クルハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス
- 第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其譽燕ヲ受クルコトヲ得ス
 - 一 官廳ノ工事ヲ受負フ者
 - 一 官廳ノ爲換方又ハ出納ヲ引受クル者
 - 一 官廳ノ補助金ヲ受タル起業者

一 官廳ノ用品ヲ調達スル者

- 一 官廳ノ諸般ノ契約ヲ結フ者
- 第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハズ所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス
- 第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハズ商業ヲ營ムコトヲ得ス
- 第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス
- 第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス
- 第十四條 浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ
- 第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス
- 第十六條 凡局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ムルトキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レシ
- 第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

第二節 懲戒例

太政官達 明治九年四月十日 般官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相違候事

官吏懲戒例

- 第一條 自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ
- 第二條 懲戒ノ法三種トス第一 譴責第一 罰俸第二 免職
- 第三條 譴責ハ懲戒ノ輕キモノトシ本屬長官ヨリ譴責書ヲ付ス
- 第四條 罰俸ハ一月分拾分ノ一ヨリ少カラス三月分ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ
- 俸ヲ追スルノ法其一月給俸半額以下ハ一月俸中ニテ追了シ其以上ハ毎月給俸ノ半額ヲ領置シ數滿テ大裁省ニ送付ス

- 第五條 懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本廳長官ノ意見ニ從ヒ其委任ハ具狀奏請シテ之ニ免シ位記ヲ返上セシム但懲戒ニ由ルニアラスレテ免職スル者ハ長官官ヲ論シ本人ヨリ辭職ノ願ヲ差出サレバ然後ニ免職スヘシ
- 第六條 諸省長官ハ所屬奏判任官ヲ懲戒ス
- 第七條 府縣委任官ハ太政大臣之ヲ懲戒ス府縣拜警視廳判任官ハ其長官之ヲ懲戒ス
- 第八條 四等以下ノ判事ハ司法卿之ヲ懲戒ス府縣官判事ヲ兼ル者ハ所屬判任官ニ於ルハ他ノ委任以上府縣官ノ時議ヲ得タル後之ヲ懲戒ス
- 第九條 府縣長官警視廳長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其議實ヲ專行スル事ヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ内務卿ニ届出ヘシ
- 第十條 府縣官判事ヲ兼ル者其所屬判任官罰俸免職ヲ行フハ便宜處分シテ速ニ司法卿ニ届出ヘシ
- 第十條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ本廳長官官署ニ處分スル事ヲ得ス

第二款 試驗登用

勅令 明治二十六年十月三十一日 第九十七號 朕文官試驗規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試驗規則

第一章 總則

- 第一條 文官試驗ハ別ニ規程ヲ設ケルモノ、外本令ニ依リ之ヲ行フ
- 第二條 文官試驗ヲ分シテ文官高等試驗及文官普通試驗ノ二種トス
- 第三條 文官試驗ヲ行フヘキ期日及場所ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告シ東京以外ノ地ニ於テ行フ試驗ニ在リテハ仍其ノ地方ノ新聞紙一種以上ニ公告ス
- 第四條 年齡滿二十年以上ノ男子ニシテ左ノ諸項ノ一ニ該當セサルモノハ文官試驗ヲ受クルコトヲ得
 - 一 重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニアラス

二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三 破産若クハ家産分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第五條 文官試驗ヲ受ケテ合格シタル者ニハ合格證書ヲ付與ス

第六條 不正ノ方法ニ因リ試驗ヲ受ケント企テタル者及試驗ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス試験合格證書ヲ受領シタル後是等ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格證書ヲ無効トス

第七條 文官試驗ヲ出願スル者ニハ手数料トシテ高等試驗ニ在リテハ金七圓 普通試驗ニ在リテハ金二圓ヲ納メシム

第二章 文官高等試驗

第八條 文官高等試驗ハ毎年一回東京ニ於テ文官高等試驗委員之ヲ行フ

第九條 文官高等試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トス豫備試驗ニ合格シタル者ニアラサレバ本試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十條 豫備試驗ハ受験人尋常中學校以上ノ官立公立學校ヲ卒業シ又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ニシテ本試驗ヲ受ケルニ相當ナル學科ヲ修メタル者ト認ムヘキヲ否テ考試スルヲ以テ目的トス

第十一條 豫備試驗ハ論文試驗並ニ論文ニ關聯スル口述試驗及迅速作文試験ノ二次トス口述試驗及迅速作文試験ハ論文試験ニ合格シタル者ニ就キ之ヲ行フ

前項ノ口述試驗及迅速作文試験ハ試驗委員ニ於テ便宜其ノ一ヲ省略スルコトヲ得

第十二條 帝國太學法科大學、舊東京大學法學部、文學部及舊司法省法學校正則部ノ卒業證書ヲ有スル者ハ豫備試驗ヲ免ス

第十三條 本試驗ハ受験人學理上ノ原則及現行法令ニ通曉シ並ニ其ノ修得シタル學術ヲ實務ニ應用スルノ能力アルヲ否テ考試スルヲ以テ目的トス

第十四條 本試驗ハ左ノ科目ヲ用井テ之ヲ行フ

- 一 憲法
- 二 刑法
- 三 民法
- 四 行政法
- 五 經濟學
- 六 國際法

以上ノ科目ハ試験ノ際選擇取捨スルコトヲ得ス

一 財政學

二 商法

三 刑事訴訟法

四 民事訴訟法

以上ノ科目ハ受験者ヲシテ其中ニ就キ豫メ一科目ヲ選擇セシメ之ヲ試験ス

第十五條 本試験ハ分チテ筆記試験及口述試験トス筆記試験ニ合格ルタル者ニアラハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 豫備試験及本試験ノ合格者ヲ定ムル方法ハ試験委員ノ議定スル所ニ依ル

第十七條 文官高等試験ニ関スル細則ハ閣台ヲ以テ之ヲ定ム

第三章 文官普通試験

第十八條 文官普通試験ハ各官廳ノ須要ニ應シ其廳ノ文官普通試験委員之ヲ行フ

第十九條 文官普通試験ノ科目ハ尋常中學校ノ科程ヲ標準トシ各官廳所掌ノ事務ヲ助的シテ文官普通試験委員之ヲ定メ文官高等試験委員ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條 文官普通試験ニ関スル細則ハ文官普通試験委員之ヲ定メ文官高等試験委員ニ報告ス

附則

第二十一條 本台ハ明治二十七年一月一日ヨリ施行ス

勅令 明治二十六年十月三日 朕文官任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官任用令

第一條 奏任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノ、外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一 文官高等試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二 滿三年以上高等文官ノ職ニ在リタル者但特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者或ニ教官技術官ノ在職年數ヲ除ク

三 滿三年以上判事檢事ノ職ニ在リタル者及在リタル者

第一條 判任文官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノ、外左ノ資格ノ一ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

一 文官普通試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

二 文官高等試験ヲ經テ其ノ合格證書ヲ有スル者

三 官立公立尋常中學校又ハ文部大臣ニ於テ之ト同等以上ト認メタル官立公立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

四 高等商業學校舊附屬主計學校及舊主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者或ニ文部大臣ノ認可ヲ經タル

學則ニ依リ法律學政治學又ハ經濟學ヲ教授スル私立學校於テ本台施行前ニ卒業證書ヲ得タル者

五 滿三年以上文官ノ職ニ在リタル者但特別任用ノ規程ニ依リ在職シタル者或ニ教官技術官ノ在職年數ヲ除ク

第三條 教官及技術官ハ別ニ任用ノ規程ヲ設クルモノ、外兼任官ニ在リテハ文官高等試験委員、判任官ニ

在リテハ文官普通試験委員ノ銜ヲ經テ之ヲ任用ス

第四條 特別ノ學術技術ヲ要スル行政官ハ別ニ試験ヲ行フ川井ス奏任官ニ在リテハ文官高等試験委員、判任官

ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銜ヲ經テ教官技術官ノ中若クハ試験委員ニ於テ教官技術官ノ資格

ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銜ヲ經テ教官技術官ノ中若クハ試験委員ニ於テ教官技術官ノ資格

ニ在リテハ文官普通試験委員ノ銜ヲ經テ教官技術官ノ中若クハ試験委員ニ於テ教官技術官ノ資格

アリト認ムル者ノ中ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

第五條 滿五年以上履歷トシテ同一官廳ニ勤務シタル者ハ文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ直ニ其ノ官廳ノ判任官ニ任用スルコトヲ得

第六條 本令第三條、第四條及第五條其ノ他特別ノ規程ニ依リ任用セザレタル者ハ文官試験ヲ經ルニアラサレハ其ノ各條又ハ其ノ規程ニ指定シタル以外ノ文官ニ任用スルコトヲ得ス

第七條 文官任用及銓衡ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第三十七號文官試験試補及見習規程、同年勅令第五十八號、同年勅令第六十三號、明治二十二年勅令第一百號、同年勅令第三十七號、明治二十三年勅令第八號、同年勅令第二百號、明治二十四年勅令第九十一號、明治二十五年勅令第二十四號、同年勅令第三十一號、明治二十年勅令第二十三號、同年閣令第二十五號、同年閣令第二十八號、明治二十二年閣令第十號、同年閣令第二十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

勅令 明治二十六年十月三日 朕文官任用令施行前ノ規程ニ依レル試補等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十年勅令第三十七號及同年閣令第二十五號ニ依リ行政官試補ニ採用セララルヘキ資格ヲ有シタル者ニテ本年勅令第八十三號文官任用令施行前高等文官タリシ者及同上ノ資格ヲ有シタル者ニシテ同令施行ノ際現ニ行政官試補者クハ判任文官タル者ハ別ニ試験ヲ用井ス奉任文官ニ任用スルコトヲ得

附則

本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

勅令 明治二十六年十月三日 朕文官試補及見習規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布ス

文官試補及見習規程

第一條 本年勅令第八十三號文官任用令及同年勅令第八十四號ニ依リ奉任文官ニ任用セララルヘキ資格ヲ有スル者ハ試補トシ本年勅令第八十三號文官任用令ニ依リ判任文官ニ任用セララルヘキ資格ヲ有スル者ハ見習トシテ各官廳ノ事務ヲ練習セシムルコトヲ得

第二條 試補ハ奉任官見習ハ判任官ノ待遇トス但俸給ヲ支給セス

附則

第三條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第五十七號及明治二十一年閣令第二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

勅令 明治二十六年十月三日 朕官吏ノ勤績ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令 明治二十六年十月三日 朕陸軍下士文官採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍下士文官採用規則

第一條 陸軍下士ニシテ左ニ掲グル者ハ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得

一 戰役若クハ公務上ノ傷疾疾病ニ因リ免官シ尚ホ文官ノ勤務ニ堪ヘ且伎倆證明書ヲ所持スル者

二 現役七箇年以上服役滿期ノ下士ニシテ伎倆證明書ヲ所持スル者

第二條 陸軍下士ハ本令ノ請願ニ因リ前條恰當ノ者ハ試験ヲ要セスシテ判任官トナルコトヲ得

第三條 海軍省ヲ除クノ外各官廳ニ於テ判任官ヲ任用スルニハ少クモ五人ニ付一人ハ陸軍下士ノ文官請願者ヲ以テス可キモノトス

第四條 文官タランコトヲ望ム者ハ服役滿期前一箇月間又ハ滿期若クハ免役後三箇月間ニ之ヲ請願ス可シ

第五條 請願者ニ於テ教官技術官タランコトヲ望ム者アルトキハ之ヲ採用セントスル官廳ニ於テ相當ノ試驗ヲ施行スルコトヲ得

第六條 請願者ノ名簿ハ本人請願ノ順序ニ從テ調製シ之ヲ陸軍省ニ備置リ可シ

第七條 請願者ノ採用ハ其同年内ニ係ルモノハ第一條各項ノ順序ニ從ヒ其同項内ニ於テ服役時日ノ多キ者ヨリ採用シ其服役時日ノ同シキ者ハ請願時日ノ順序ニ從ヒ採用スヘシ本人ノ伎倆及任務ノ必要ニ依リテハ前項ノ順序ニ拘ハラズ採用スルコトアル可シ

第八條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用スルトキハ陸軍省ニ照會シ直ニ本人ヲ其廳ニ呼出スヘシ

第九條 陸軍省ニ於テハ前條ノ照會ニ依リ第七條ニ照シテ請願者ノ氏名及履歷書ヲ其官廳ニ交付ス可シ

第十條 請願者ニ於テ其請願ヲ取消サント欲スルトキハ陸軍省ニ届出可シ

第十一條 本則施行ニ要スル細目及伎倆證明書ノ規程ハ陸軍大臣之ヲ定ム可シ

勅令 明治二十三年ニ
 陸軍省 陸軍省職滿五年以上ノ者ヲ警部警部補ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布センム
 巡査奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試驗試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラヌ文官普通試驗委員長ノ診察ヲ經テ警部警部補ニ任用スルコトヲ得但試驗ヲ經スレテ任用シタル警部警部補ハ普通試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

内務省訓令 明治二十四年九月
 巡査採用規則左之通り相定ム

第一條 巡査ハ必試驗ノ上採用スヘキモノトス但陸海軍現役滿期下士已上ノ者並巡査精勤證書ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第二條 巡査志願者ハ品行方正年齡二十一年以上四十歳未滿ニシテ徵兵ニ相當セス且左ノ諸項ニ抵觸セサル者タルヘシ

一 重罪ノ刑又ハ重禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ同上ノ刑ニ處セラレヘキ罪ヲ犯シ且ニ監視ニ附セラレタル者及輕禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經過セサル者但舊法ニ依リ施體ノ刑ニ處セラレタル者ハ總テ本文ノ權衡ニ準ス

二 賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者

三 巡査懲罰例又ハ官吏懲戒例ニヨリ免職セラレ若クハ故ナク巡査ヲ辭職シ二年ヲ經過セサル者

四 身分不相應ノ召價アル者又ハ家資分散者タルノ宣告ヲ受ケ未タ復權ヲ得サル者又ハ從前身分限リ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

五 酒癖アル者又ハ暴行癖アル者

第三條 巡査體格ノ検査ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一 體質善良ナル者即チ左ニ記載スル等ノ缺所ナキ者

二 四肢完具セサル者但執筆把握ニ差支サル指ノ萎小彎屈強直等ノ類ハ此限リニアラス

三 胸腔機關及腹内臟器若クハ皮膚病較著ノ疾病アル者但較著ノ疾病ニアラサルモ全身諸機關ノ機能減衰ノ者亦同シ

四 服裝又ハ運動ニ不便ナル者

五 贅生物畸形等容貌醜惡ナル者

六 二身軀五尺一寸以上ニシテ胸圍大約身長ノ半ニ等シク呼吸縮長ノ差一寸以上ノ者

七 三兩眼共視力三分ノ二以上ニシテ辨色力完全ノ者

八 四聽力六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽識シ得ル者

九 五言語應答明瞭ニシテ充分ノ發聲ニ堪ユル者

六 精神完全ナル者即チ精神病及神經病(鬱憂癲狂癡狀及舞踏病癩癩等ノ病)ナキ者

第四條 巡査技藝ノ試驗ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一 刑法刑事訴訟法警察法規等ノ大要ニ通スル者

二本邦歴史及地理ノ大略ニ通スル者

三 假名交リノ論文及普通往復文ヲ作り得ル者

四 算術加減乗除ヲ爲シ得ル者

五 普通ニ楷書又ハ行書ヲ書キ得ル者

第五條 巡查ノ試験ハ廳府縣巡查教習所ニ於テ警部二名以上立合ノ上巡查教習所長之ヲ施行スヘシ

第六條 試験ノ上巡查ニ採用スヘシト定リタル者ハ警視廳ニ於テハ巡查本部長、北海道廳及府縣ニ於テハ警

部長親ク左ノ諸件ヲ宣告シ誓書ヲ徴シタル上採用ス可シ

一 巡查タル者ハ官吏服務紀律ヲ恪守スヘキハ言ヲ俟タズ常ニ上官ノ命令ヲ遵守シ勤務中ハ勿論勤務ニ服

セサルトキト雖モ櫻ニ政治ノ是非得失ヲ論評スルカ如キコト決シテアルマシキ事

一 巡查タル者ハ常ニ人民ノ保護者タルコトヲ記憶シ之ニ對シテ丁寧親切ヲ旨トシ而モ之ト相押昵スルカ如

キコトナク職務上ニ於テ負擔スル百般ノ責務ハ最モ嚴正忠實ニ之ヲ踐行スヘキ事

一 巡查タル者ハ一端奉職ノ上ハ他念ナク職務ニ從事シ五箇年未滿ニシテ一身ノ故ヲ以テ辭職スルカ如キ

コト決シテアルマシキ事

一 巡查タル者ハ自身ハ勿論家族ニ至ル迄専ラ品行ヲ正シクシ警察官吏タリ又其家族ケル體面ヲ汚損スル

カ如キ所業決シテアルマシキ事

第七條 巡查タルヘキ者ヨリ呈セシムヘキ誓文ハ左ノ如シ但前條各官ノ面前ニ於テ本人ヲシテ自書捺印セ

シム可シ

誓文

某 儀

今般何(廳府縣)巡查志願任候ニ付御採用ヲ被ルニ於テハ官吏服務紀律ヲ恪守仕ルヘキハ勿論人民ニ對シテハ丁寧親切ニ職務ヲ執行シ且ツ總テノ法律命令ヲ遵守シ職任上百般ノ責務ハ嚴正忠實ニ踐行仕ルヘキ又奉職五箇年ニ滿タスニテ一身ノ故ヲ以テ自ラ職務御免相願候様ノ儀決シテ無之且ツ自身ハ勿論家族ニ至ルマテ品行方正

相保チ警察官吏タリ又其ノ家族タル體面ヲ汚損致シ候様ノ所業決シテ仕マシク依テ誓文如件

明治 年 月 日

府縣國郡市町村番地身分

何

某 實印

第八條 新ニ採用スル巡查ハ先ツ三級俸ヲ給スヘシ其陸軍現役滿期ノ下士及巡查精勤證書ヲ有スル者ニ係ルトキハ直ニ二級俸ヲ給スルコトヲ得但陸軍現役滿期ノ下士ニシテ士官適任證書ヲ有スル者ハ特ニ二級俸ヲ給スルコトヲ得

內務省訓令 明治二十四年十月本年九月當省訓令第二十一號ヲ以テ巡查採用規則相定候處專ラ犯罪ノ探偵ノニ從事セシムル巡查ハ試験ヲ要セス直ニ採用スルコトヲ得但本文ニ依リ採用シタル巡查ハ定規ノ試験ヲ經ルニ非サレハ他ノ職務ニ服セシムルコトヲ得ス

第三款 給與

第一節 俸給

勅令 明治二十五年十一月 朕茲ニ高等官官等俸給令ヲ裁可ス

高等官官等俸給令

官等及級任

第一條 親任式ヲ以テ級任スル官ヲ除ク外高等官ヲ分テ九等トス親任式ヲ以テ級任スル官及一等官二等官ヲ勅任官トシ三等官乃至九等官ヲ奏任官トス

第二條 勅任官中親任式ヲ以テ級任スル官ノ辭令書ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣又ハ首座ノ大臣之

ニ副署ス

第三條 親任式ヲ以テ被任スル官ヲ除キ其他ノ勅任官ノ辭令書ハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ奉行ス
 第四條 奏任官ノ任官及被任ハ内閣總理大臣之ヲ奏薦シ其各省及各省所屬ノ官廳ニ屬スルモノハ内閣總理大臣ヲ經由シテ主任大臣之ヲ奏薦ス
 第五條 奏任官ノ辭令書ハ内閣ノ印ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ宣行ス
 第六條 高等官官等ハ別ニ定ムルモノヲ除ク外本令中ノ文武高等官官等表ニ依ル
 官制上他ノ官ニ在ル者ヲ以テ兼任セシメ又ハ之ニ充ツルノ官ニシテ別ニ官等ヲ定メサルモノハ本官ノ官等ニ依ル
 第七條 初メテ奏任文官ニ任セラル、者ノ官等ハ六等以下トス
 奏任文官ヲ勤ノ退官シタル者再ヒ奏任官ニ任セラル、場合ニ於テ其官等ハ前官ノ官等以下トス
 第八條 奏任官ノ官等ハ別ニ進級ノ例ヲ定メタルモノヲ除ク外在職滿三年ヲ踰ユルニテラサレハ陞級スルコトヲ得ス

俸給

第九條 高等文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノ、外左ノ如ク

- 内閣ノ部 年俸九千六百圓
- 内閣總理大臣 年俸九千六百圓
- 内閣所屬職員 年俸三千五百圓
- 書記官長 高等文官年俸一號表ニ依ル
- 局長 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 書記官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 内閣總理大臣秘書官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 恩給局審査官

- 賞勳局 年俸三千五百圓
- 總裁 年俸三千圓
- 副總裁 一級俸年俸二千圓二級俸年俸千六百圓
- 書記官 一級俸二級俸各一人トス
- 法制局 年俸四千圓
- 長官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 參事官 年俸四千圓
- 各省ノ部 年俸六千圓
- 大臣 年俸四千圓
- 次官 高等文官年俸一號表ニ依ル
- 局長 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 參事官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 秘書官 高等文官年俸三號表ニ依ル
- 書記官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 外務省翻譯官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 大藏省主計官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 大藏省主稅官 年俸千二百圓
- 農商務省特許局審判官 技術官俸給令ニ依ル
- 農商務省特許局審査官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 逓信省鐵道事務官 高等文官年俸二號表ニ依ル
- 第十條 高等文官ノ俸給ニ關シテ別ニ定ムル所ナキモノハ總テ本令ノ規定ニ依ル

陸海軍武官ノ俸給ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第十一條 同一ノ官職ニシテ官等ニ依リ其俸給ヲ異ニスルモノハ本令定ムル所ノ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其官等ニ照シテ之ヲ給ス

第十二條 同一官職ノ同一官等内ニ於テ其俸給ニ數級アル場合ニ於テハ其等級ニ依リ事務ノ繁簡ニ從ヒ本屬長官便宜之ヲ増減スルヲ得

第十三條 高等文官死亡シタルトキハ其在職中ナルト非職中ナルトニ拘ハラズ在職最終年俸三分ノ一ヲ其遺族ニ給ス但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スル者ヲ謂フ

終身官ハ其在職中死亡シタル者ニ限リ前項ノ規定ニ依ル

第十四條 年俸ハ十二分シテ毎月之ヲ支給ス

第十五條 俸給ハ新任増俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス

第十六條 非職廢官退官退職及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシ當月分ノ金額ヲ給ス

第十七條 非職廢官退官者事務引續職務調理ノ爲特ニ命ヲ承ケ公務ニ從事スルトキハ其間尚從前ノ年俸ヲ給ス

第十八條 病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ踰ユル者及私事ノ故障ニ由リ執務セサルコト三十日ヲ踰ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受ケル者及特旨ニ由リ賜暇休養スル者ハ此限ニアラス

第十九條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第二十條 本令ハ明治二十五年十一月二十日ヨリ施行ス 但第十四條ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

第二十一條 明治二十四年勅令第八十二號高等官任命及俸給令並ニ同年勅令第二百十五號文武高等官官職等級表ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

俸給ニ關スル他ノ勅令ニ於テ明治二十四年初令第八十二號中第一號表第二號表若ハ第三號表ニ依ルヘキコトヲ規定セルモノハ本令施行ノ後ハ本令中同號ノ高等官年俸各表ニ依ル

第二十二條 現任ノ高等官ニシテ本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ左表ニ依リ明治二十四年初令第二百十五號文武高等官官職等級表ニ規定シタル等級ト相對照スル官等ニ被セラレタルモノトス 現任判事檢察官ニシテ本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ現ニ受ケル所ノ俸給ニ照シ高等文官官等相當俸給表ニ定ムル所ノ相當官等ニ被セラレタルモノトス

對照表

文武高等官官職 等級表ノ等級	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等
文武高等官官等 表ノ官等	親任	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等

(年俸表略之)

勅令 明治二十四年七月二日 朕茲ニ判任官俸給令ヲ裁可ス 十四日第八十三號 判任官俸給令

第一條 判任文官ノ月俸ヲ別テ十級トシ別表ニ依リ毎月下旬ニ於テ之ヲ支給ス

第二條 陸海軍准士官下士ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依リ其他特ニ定ムルモノハ前條ノ限ニアラス

第三條 判任官ハ毎級在職一年以上ニ至ラサレハ増俸スルコトヲ得ス

第四條 判任官最上級俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務熟練優等ナル者ハ特別ヲ以テ別表ノ範圍ニ拘ラス漸次七十

五圓マテ増俸スルコトアルヘシ

第五條 官ニ在リテ死亡シタル者ハ月俸三ヶ月分ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ於テモ亦同シ但遺族トハ官吏ノ遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スル者ヲ謂フ

第六條 前條ノ外俸給支給ニ關シテハ高等官官等俸給例第十五條第十六條第十七條第十八條ノ例ニ依ル

第七條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

一級	六十圓	三級	四十五圓	五級	三十五圓	七級	二十五圓	九級	十五圓
二級	五十圓	四級	四十圓	六級	三十圓	八級	二十圓	十級	十二圓

大藏省令 明治二十五年十二月 文官俸給支給細則左ノ通り相定メ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス
但明治二十三年當省令第十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

文官俸給支給細則

- 第一條 高等文官及判任文官ノ俸給ハ各廳左ノ日割定日ニ於テ支給スルモノトス但休日ニ當ルトキハ順延トス
每月二十一日
外務省及其所管經費ニ屬スル官廳 內務省及其所管經費ニ屬スル官廳
大藏省及其所管經費ニ屬スル官廳 海軍省及其所管經費ニ屬スル官廳
陸軍省及其所管經費ニ屬スル官廳 司法省及其所管經費ニ屬スル官廳
農商務省及其所管經費ニ屬スル官廳
每月二十二日
文部省及其所管經費ニ屬スル官廳 選信省及其所管經費ニ屬スル官廳
每月二十三日
非職廢官退官退職及死亡ノ時ハ當月分ノ俸給全額ヲ其際支給スルモノトス
高等官官等俸給令第十七條ニ依リ職務調理ヲ命セラレタル者其調理翌月以降ニ涉リ全月分ヲ支給スルモ
ノハ第一條ノ支給定日ニ依ル但最後ノ月ハ日割ヲ以テ調理終了ノ日迄ヲ其際支給ス
第三條 轉任者ノ俸給ハ其發令ノ當日迄ヲ甲廳ノ負擔トシ翌日以降ノ分ハ乙廳ニ於テ之ヲ支給スルモノトス

第四條 他廳へ轉任シタルモノハ第一條ノ支給日ニ拘ラス日割計算ヲ以テ發令ノ當日迄ニ係ル俸給ヲ其際支給ス

第五條 他廳へ轉任ノ際俸給過渡アルトキハ前任廳ニ於テ其際之ヲ追徴スヘシ

第六條 俸給支給定日後他廳ヨリ轉任シ來リタルトキハ後任廳ニ於テ其月ノ殘日數ニ對スル俸給ヲ其際支給スルモノトス

第七條 高等官官等俸給令第十八條ニ依リ減給ノ者非職廢官退官退職及死亡ノ時ハ其減給ニ係ル當月分ノ全額ヲ支給スルモノトス

第八條 傷疾忌引若クハ特旨賜暇ノ場合ハ病氣若クハ私事故障ト連續スルモ減俸トナルヘキ間勤日數中ニ算入セス又病氣ト私事故障ト連續スル場合ニ於テハ之ヲ通算セス

第九條 俸給ヲ支給スルニ當リ計算上厘位未滿ノ端數ヲ生スルトキハ之ヲ切捨ルモノトス
日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ルヘシ

第二節 旅費

閣令 明治十九年六月 內國旅費規則ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治九年太政官第六十四號達旅費定則中內國ノ部ハ廢止ス

內國旅費規則

- 第一條 內國旅費ハ官吏公務ニ依リ本邦内ヲ旅行スルトキ旅行中一切ノ費用ニ充ル爲メ之ヲ支給ス
- 第二條 內國旅費ハ分テ四等トシ別表ノ定ムル所ニ從ヒ順路ノ路程ニ依リ汽車賃汽船賃車馬賃及日當ヲ支給ス
- 第三條 汽車賃ハ汽車旅行、汽船賃ハ汽船旅行、車馬賃ハ陸路旅行、日當ハ宿泊料及其他ノ諸費ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス
- 第四條 官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入備入タル舟車馬等ニテ旅行シ若クハ旅行ノ性質ニ依リ特ニ舟車馬等ノ賃費拂フ許可シタルトキハ本令ノ汽車賃汽船賃及車馬賃ヲ支給セス

第五條 汽車賃ハ哩數、汽船賃ハ海里數、車馬賃ハ里數、日當ハ日數ニ應シ之ヲ支給スヘシ外國旅費ノ日當ヲ給スルトキハ本條ノ日當ヲ支給セズ

第六條 (削除)

第七條 日當ハ陸路六里未満、汽車十哩未満及汽船十海里未満ノ旅行ニハ支給セサルモトス但公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要スルトキハ宿泊ノ數ニ應シテ日當ヲ支給スヘシ

第八條 汽車賃汽船賃及車馬賃ハ其種類毎ニ經過セシ路程ノ總數ヲ合算シテ之ヲ支給スヘシ但其一位未満ノ端數ハ計算セサルモトス

第九條 旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ各年度毎ニ之ヲ區別シ旅費ヲ計算スヘシ但シ汽車賃及汽船賃ハ會計年度ニ係ハラズ汽車汽船ノ到達地ニ着タル日ヲ以テ之ヲ區別シテ計算スヘシ

第十條 檢田測量及土木工事等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ車馬賃ヲ給セズ日當額ニ三割ヲ増給ス

第十一條

赴任旅費ハ新任地ヨリ新任地ニ至ルマテ本官相當ノ車馬賃汽船賃若クハ汽船賃ノ二倍ヲ支給スヘシ

第十二條 廢官若クハ退官ノ際事務引繼義務取調其他公務ノ爲メ旅行セシムルトキハ前官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十三條 新任用スル爲メ召喚スルモノハ其新任官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十四條 旅行中歸省其他私事ノ爲メ許可ヲ得テ迂路ヲ通過スルトキハ順路ノ路程ニ應シ旅費ヲ支給スヘシ

第十五條 旅行中廢官死亡又ハ諭旨退官シタルモノハ前官相當ヲ以テ舊任地マテノ旅費ヲ支給スヘシ

第十六條 前二條ノ場合ニ於テ日當ヲ支給スル爲メ其日數ヲ計算スルハ汽車旅行ハ一日二百哩計、汽船旅行ハ一日百海里計、陸路旅行ハ一日十二里計トス但距離接近シテ數種ノ旅行相跨ルトキハ各其路程十二分ノ一ヲ以テ一時間ノ行程トシ一日ノ旅行時間ハ十二時間トシ其日數ヲ計算スヘシ

第十七條 各省大臣ハ平常旅行ヲ要スル官吏ニ對シ特異旅費額ヲ定メ月額ヲ以テ之ヲ支給スルコトヲ得

第十八條 各省大臣ハ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得

旅 費 額

等	級	瀛車賃 每哩	瀛船賃 每海里	車馬賃 每里	日當 每二日
一	親任官	十	二十	二十八	四圓
二	勅任官	八	二十	二十	二圓五十錢
三	奏任官	六	十	十五	一圓六十錢
四	判任官	四	十	十	七圓十錢

一 強風積雪及道路險惡ノ爲メ定額ノ車馬賃ニテ支辨シ難キ場合ハ車馬賃ノ五割以内ヲ増給スルコトヲ得
一 北海道廳管轄内ハ毎年十一月ヨリ翌年三月マテ五箇月間車馬賃ニ限リ定額ノ二倍以内ヲ増給スルコトヲ得

附則 (削除)

閣令 明治二十二年四月四日 明治十九年(六月)閣令第十四號(上ニ出ツ) 內國旅費規則第四條ニ據リ官船若クハ各船ニ於テ借入傭人ノ船舶ニ乗込出張スル場合ニ於テ官ヨリ賄フ爲サ、ルトキハ左ノ食卓料ヲ支給ス

親任官	一日	金壹圓七十錢
勅任官	一日	金壹圓五十錢
奏任官	一日	金壹圓貳十錢
判任官	一日	金九拾錢

第四款 非職、恩給、扶助

第一節 非職

大政官達 明治十七年一月四日第三號 官吏非職條例左ノ通相定候條此旨相逕候事

官吏非職條例

第一條 官吏(判任官以上并ニ出任御用係モ之ニ準ス)奉職中各官廳ノ事務張弛其他疾病等ノ事故ニ因リ本屬長官ハ其僚屬ノ官吏ニ非職ヲ命スルコトヲ得但勅任官ノ非職ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス

第二條 非職員ハ其本官ヲ奉シテ常ニ其職務ニ從事セス其他總テ在職官吏ニ與ナルコトナシ

第三條 本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ非職員ヲシテ更ニ其職務ニ從事セシムルコトヲ得

非職員復職スルトキ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス

第四條 非職ハ三年ヲ一期トス期滿ハ其官ヲ免ス

第五條 (削除)

第六條 廢廳廢官ノ際御用滞在ヲ命スル者アルトキハ本條例ニ準據ス

第七條 非職員ハ持ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ地方病院學校及農工商陸海運輸等會社ノ業務ニ從事シ其役員ト爲リ又ハ商業ヲ營ムコトヲ得但此場合ニ於テハ第五條ノ俸給ヲ支給セス

本屬長官ハ其非職員ノ勅任官ニ係ルモノハ上裁ニ依リ奏任官ニ係ルモノハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ許可ス

第八條 (削除)

閣令 明治十九年二月 非職官吏ノ俸給下渡住居移轉及商業ニ關シ左ノ通之ヲ定ム

第一條 凡ソ非職官吏ノ俸給ハ太藏省ニ於テ下渡スヘシ(消滅)

第二條 本屬長官ハ非職官吏ノ官等俸給氏名住所及非職ノ年月日等ヲ太藏大臣ニ通知スヘシ

第三條 非職官吏ハ本屬長官ニ届出テ本屬官廳所在ノ地ノ外ニ住居スルコトヲ得

第四條 本屬長官前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ太藏大臣ニ通知シ太藏大臣之ヲ地方官ニ通知シ該廳ヲ經由シテ俸給ノ下渡ヲ爲ス可シ

第五條 非職官吏移轉地ニ到着シタルトキハ其住所ヲ本屬長官及地方官ニ届出ヘシ嗣後更ニ其住所ヲ移轉スルトキモ亦同シ

第六條 非職官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得テ商業ヲ營ムコトヲ得

第二節 恩給

法律 明治二十三年六月 朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一 年滿六十歳ヲ超テ退官ヲ許シタルトキ

二 傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尚其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

- 一 公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘズ退官シタルトキ
- 二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受ケルヲ顯シルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘズ退官シタルトキ
- 第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス
- 第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス
- 非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
- 實際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官當ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
- 兼官ニ依テ受ケル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ
- 恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム
- 第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷痍疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限內ニ申出レハ查覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス
 - 一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二箇年
 - 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三箇年
- 第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス
- 明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲ケル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ハ一個年ニ當テ其年數ニ應ズル金額ヲ一時支給ス
- 第八條 左ニ掲ケル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

- 一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數
- 二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官任シテ其現役中ノ日數
- 三 從軍年加算ノ年月
- 四 非職及休職中ノ月數
- 五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數
- 六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數
- 第九條 左ニ掲ケル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ
 - 一 年齡二十歲未滿ノ者ノ在官月數
 - 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
 - 三 郡區書記ヲ除ク外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ禁ズル官職ニ在ル月數
 - 四 御用掛履等外仕勤任ノ月數
 - 五 第八條第二ニ掲ケル者在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數
 - 六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數
- 第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス
- 第十一條 恩給ヲ受ケル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス
 - 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
 - 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサルハ增加セズ
- 第十二條 恩給ヲ受ケル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス

在ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受ケタルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニ

アラス

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依

リ免官シタル者ハ恩給ヲ受ケルノ資格ヲ失フ

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受ケルノ資格ヲ失ハス

第十四條 政府ヨリ恩給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受ケルノ

權ナキモノトス但郡區書記ハ此限ニアラス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ

此法律第三條ニ該當スル者ニ限リ退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受ケヘキ事由ノ生シタル後三箇年以内ニ請求セザレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタル者ハ六箇月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決

ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテ

ハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エルト否ヲサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與管入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押アルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停

止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨ

リ三箇年以内ニ請求セザレハ之ヲ受ケヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵触スルモノハ總テ廢止ス

勅令 明治二十三年六月 文官判任以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分

ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官シタル者ハ其在

職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス

本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シ

タルトキハ前項ニ掲グル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス

恩給ヲ受ケル者并自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ

本令ノ賜金ヲ給セス

本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

閣令 明治二十三年七月 官吏恩給法施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受ケヘキ者ハ恩給請

求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳

ノ長官ニ差出ス可シ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受ケヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ